

写真新世紀

New Cosmos of Photography

2016 Vol. 30



Grand Prize 2015
TEPPEI SAKO



25th Anniversary



Excellence Award
RYUTA ARAKAKI
KEISUKE KISHI
HALKA
TAKIYA MATSUMOTO
TAKESHI MITA



写真でなにができるだろう？ 写真でしかできないことはなんだろう？

「写真新世紀」は、写真表現の可能性に挑戦する
新人写真家の発掘・育成・支援を目的とした
キャノンの文化支援プロジェクトとして、1991年にスタートしました。
作品のサイズや形式、年齢、国籍などを問わない、公募形式のコンテストを実施し、
写真の持っている新たな可能性を引き出す創作活動を奨励しています。

写真の誕生から170余年。
デジタルカメラの普及などにより、今や誰もが気軽に写真を撮り、楽しむ時代となりました。

絵画やイラストといった隣接ジャンルとも、互いに影響を与え合い、
写真表現の幅はより一層の広がりを見せています。
写真を取り巻く環境が大きく変化していくなか、
「写真でなにができるだろう?」「写真でしかできないことはなんだろう?」を
常に問い、写真界に新風を吹き込むクリエイターを発掘してまいります。

「写真新世紀」は
次世代の表現を切り拓く才能を応援し、
新人写真家が大いなる第一歩を踏み出すための「場」でありたい。
私たちはそう願っています。

写真新世紀

New Cosmos of Photography

Contents

2015年度(第38回公募)グランプリ

006 迫 鉄平「Made of Stone」

優秀賞

016 新垣 隆太「sweep」

024 岸 啓介「HAKKO×Rebirth」

032 HALKA「レッツゴーニ匹」

040 松本 卓也「Tangent Point」

048 三田 健志「等高線を登る」

佳作

056 浅井 孝秋「Industrial Human Design」

石野 郁和「glue」

057 いぬ「猫パンチ」

上田 良「浮遊するオブジェの写真」

058 岡田 泰裕「Fafrotskies」

数井 佐弥子「月へ流れる」

059 川口 典峰「じかんとくうかん」

駒瀬 由宗「car」

060 鷺山 啓輔「白い紙船 2014」

島津 啓「緞帳」

061 白浜 哲「Reprise」

津田 隆志「あたらしい山」

062 西村 尚己「passion」

紅 たえこ「好奇心とかいう一瞬の関係性」

063 山内 浩「彼の労働の果実、或いはその欠如」

山本 剛士「まるち人間(石田泰道)」

064 優子「ちょっと宇宙(そこ)まで」

Natalia Behaine「José」

065 総評

Contents

審査員インタビュー

- 070 フリッツ・ヒールスベルフ
076 清水 穰
082 荒木 夏実
088 澤田 知子
096 野口 里佳
104 さわ ひらき
- 110 写真新世紀 2015年度(第38回公募)
グランプリ選出公開審査会
- 113 写真新世紀
これまでのあゆみ

歴代受賞者インタビュー

- 116 2014年度(第37回公募)グランプリ
須藤 絢乃「面影 Autoscopy」
- 126 2011年度(第34回公募)優秀賞
奥山 由之「BACON ICE CREAM」
- 136 写真新世紀25周年記念イベント
「写真の未来は僕らがつくる!」レポート
- 141 Message
写真新世紀25周年
歴代受賞者からのメッセージ
- 146 写真新世紀 活動履歴



| 2015年度第38回公募受賞作品 |

写真新世紀
New Cosmos of Photography



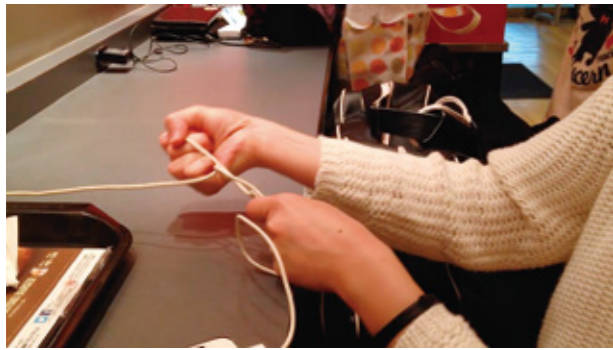
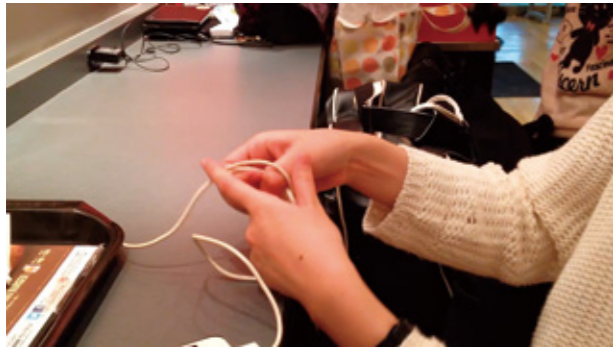
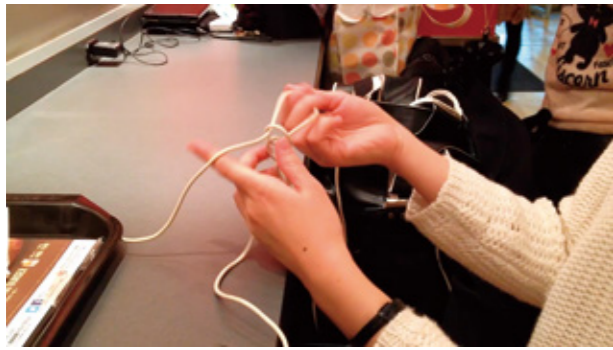
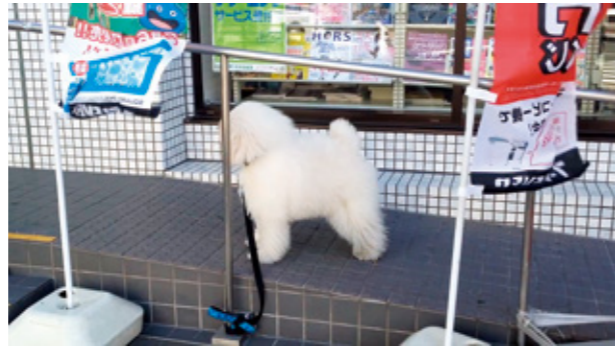
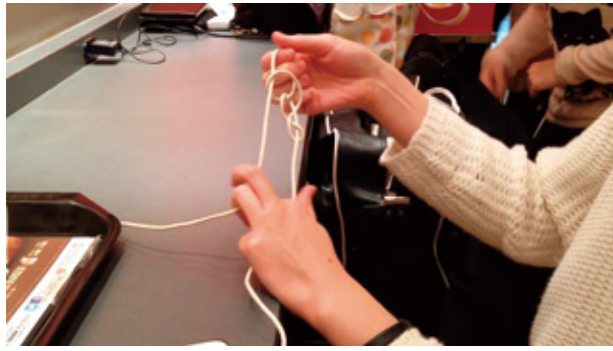
2015年度(第38回公募)グランプリ

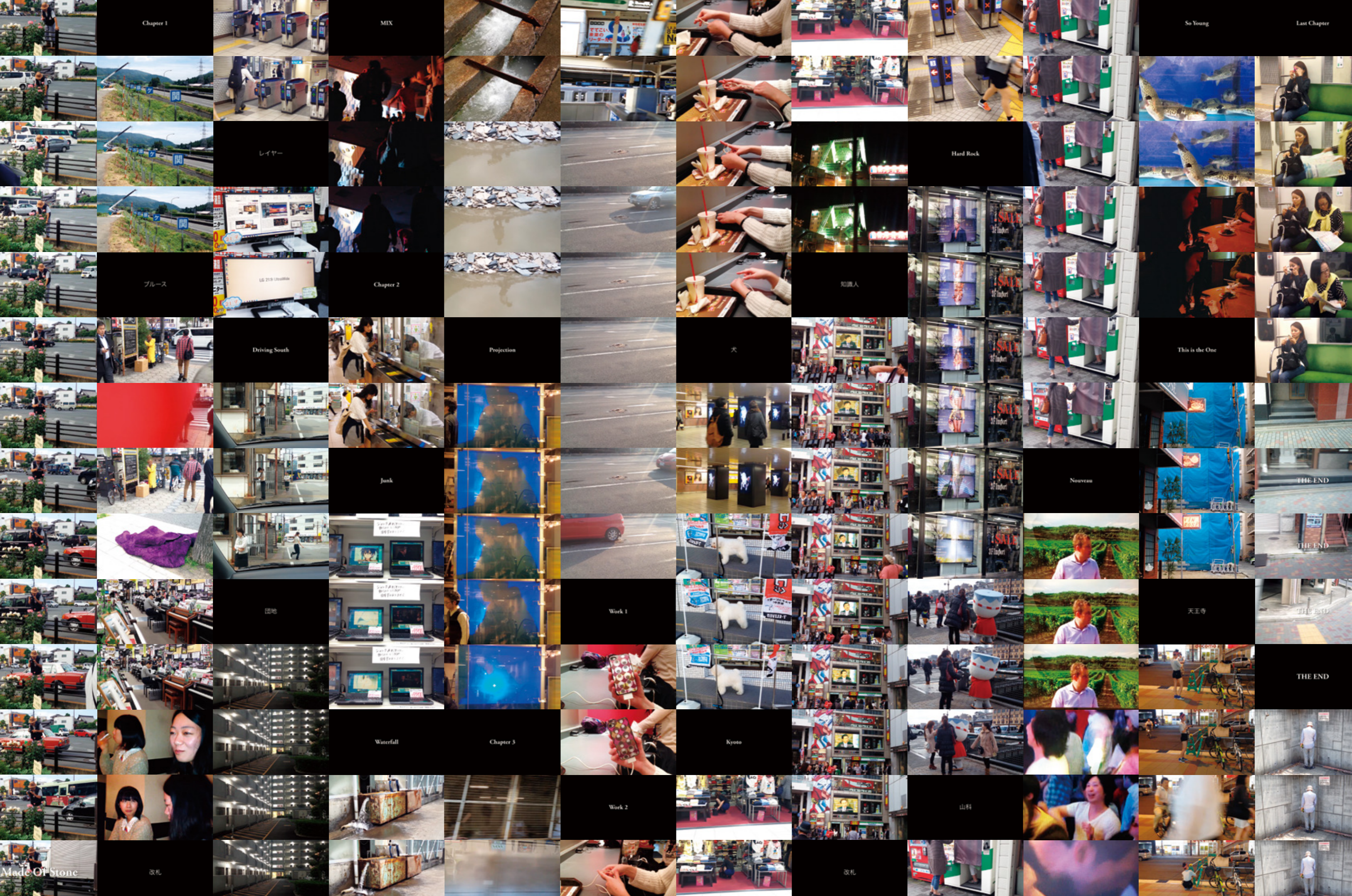
迫鉄平 *Teppei Sako*

Made of Stone

みんなの手で
京の美化!







Chapter 1

MIX

So Young

Last Chapter

レイヤー

Hard Rock

ブルース

Chapter 2

知照人

Driving South

Projection

This is the One

Junk

Nouveau

THE END

Work 1

天王寺

THE END

Waterfall

Chapter 3

Kyoto

山科

Work 2

改札

THE END

Made Of Stone

改札

THE END

迫 鉄平

Teppei Sako

Made of Stone

映像作品 / 17分29秒



『Made of Stone』は、約27個のごく短いシーンの寄せ集めにより構成された映像作品である。タイトルがでかかかと挿入される冒頭のシーンにはじまり、最後は「The End」という文字が大きく映し出されこの作品は終了する。

しかしながら、なにかの物語を軸にシーンが続いていく映像作品ではなく、個々のシーンはそれぞれが独立した1枚の写真である。この映像作品『Made of Stone』は「スナップ写真」と映像の持つ「時間」についての作品である。

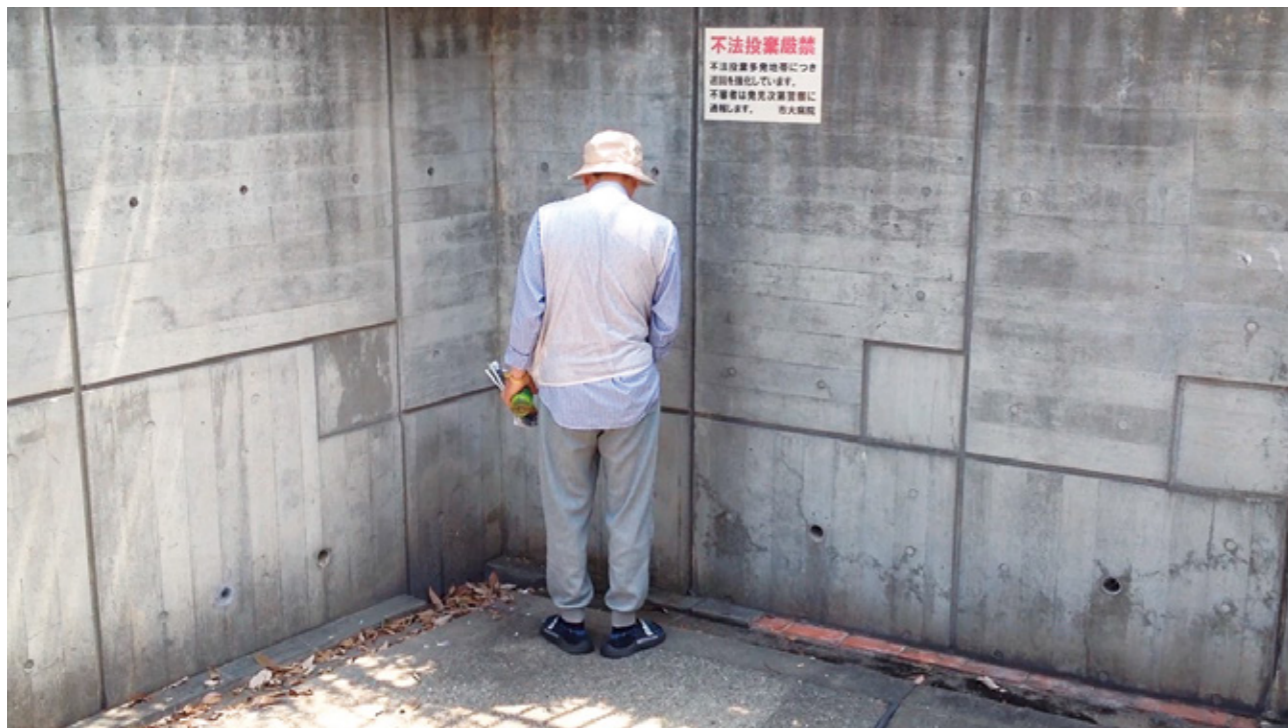
タイトルの『Made of Stone』とは、2013年に公開されたイギリスのドキュメンタリー映画のタイトルから引用したものである。その映画の内容は、80年代末にイ

ギリスのマンチェスターを拠点に活動していた THE STONE ROSES の 2011 年 の再結成を捉えたものである。また、『Made of Stone』は彼らの代表曲のひとつでもある。劇中でその彼らのライブシーンでは、歌われる楽曲の歌詞が日本語の字幕として表示され、私はそこで初めて彼らの歌詞の内容とその意味を知ることとなった。そして、「This is the One」という楽曲の「これがそれだ これがそれだ」という歌詞が、「スナップ写真」と、私が映像作品を制作するきっかけとなった被写体の「あるがままの姿」とを言い表わしていた。

街を歩いていてなにかを発見したときや、唐突になにかと出会ったときに「あ！」とシャッターを押すのがスナップ写真の基本

であり、私にとってそれは被写体の「あるがままの姿」を捉えるのに最適な方法であるように思えた。そして、実際に自分でスナップ写真を撮りはじめてみると、そのシャッターチャンス「あ！」が複数存在することに気付いた。複数存在するシャッターチャンスのなかで、最も技術的に撮影することが困難なのが「これからなにかが起こりそうな予感がするシャッターチャンス」であった。そしてその決定的瞬間を切り取る、という技術的困難さが、撮影する前から被写体を自分の見たい「あるがままの姿」に押し込めてしまっているようにすら思えた。

映像は、言うまでもなく連続した写真である。私は、自分に起こったあるふたつのできごとをきっかけに、「連続した写真」として



迫 鉄平

1988年 大阪生まれ
京都精華大学大学院芸術研究科博士後期課程在籍

【個展】

- 2013年 『9.Submission』(KUNST ARZT、京都)
- 『シーズンII』(ART GALLERY5 FIVE、大阪)
- 『サブミッション・ハウス』(舟岡画廊、京都)
- 『サブミッション・ハウス 千里丘リミックス』(ART GALLERY5 FIVE、大阪)
- 2014年 『Made of Stone』(アトスペースジューズ#13、大阪)
- 2015年 『Fantasy Black Channel』(KUNST ARZT、京都)
- 『シーズンII』(ART GALLERY5 FIVE、大阪)

【グループ展】

- 2010年 『ニューフェイス展』(石田大成社ホール、京都)
- 2013年 『瀬戸内国際芸術祭 '13秋』(高見島、香川)
- 2014年 『Coincidental Perception』(KUNST ARZT、京都)
- 『ケヴィン・シールズの欲望』(social kitchen、京都)
- 『複々線』(現代HEIGHTS、東京)
- 『いつも以上にHappy Life』(中野ZERO展示ギャラリー、東京)
- 2015年 『百度の鈍角』(京都精華大学サテライトギャラリー kara-S、京都)

の映像について考えるに至り、それが被写体の「あるがままの姿」を捉えていることに気がついた。

ひとつめは、映画を見ている際に起きた、なんでもなようなシーンから目が離せなくなってしまいう体験である。そのシーン自体は、物語の構成上まったく必要がないように思われるし、舞台や物語の背景の説明、または登場人物の心情の表現としても機能していない。たとえば、少し高い位置から都市風景を俯瞰で撮影したシーン。フレームは固定され、時折、車や電車が画面を横断する。このような映画のなんでもないシーンとふいに会うとき、私は映像という不可逆な時間のなかで、1枚のフレーミングされた都市風景の写真を見ながら、同時に同じフレームで何千何万枚の都市風景の写真(すべて同じとも言えるようで、少しずつどこかが違う)を順番に見させられていた。

ふたつめは、友人たちと写真を撮るとき。デジタルカメラやスマートフォンなどを構え、「ハイ！チーズ☆」とシャッターを押したものの、実はムービーモードが起動していて、写真ではなく短い映像が撮影・記録されるという体験である。被写体の友人は少しの間、後、「動画かい！」とつっこみ、脱力する。映像によって一瞬の「シャッターを切る時間」が引き伸ばされた結果、ポートレート撮影されるという意識から自らを演出し

ていた被写体から、「あるがままの姿」が引きずり出されていた。それは前述したように、スナップ写真の肝であった。

以上のできごとから、私は街に出て、スナップ写真を撮るようにカメラを構え映像を撮影しはじめた。それゆえ、撮影された映像はすべてワンシーンワンカットとなっている。被写体を追いかけるようなカメラワークではなく、フレームをできるだけ固定し、撮影者である私は動かないよう努めている。撮影に使用しているiPhone 4Sの性能上ズームすることもできない。

このようにして、スナップショットの基

本に従い映像を撮影すると、「あ！」が「あー」となる。また、「あ↑↑↑」となる場合も「あ↓↓↓」となることもある。つまり、私の決定的瞬間を捉えたいという欲望は、常に被写体の「あるがままの姿」に裏切られる可能性があるということである。スナップショットは「あ！」という決定的瞬間を切り取り、その刹那を表現の強度とするものである。だが、私は映像作品で「あー」とその決定的瞬間を引き伸ばし、その伸びたシャッターチャンスのなかで被写体が露呈する「あるがままの姿」を見たい。



選者コメント さわ ひらき

17分強と少々長い動画の作品ですが何度も見返してしまいました。三脚なしでスナップショットのように撮影されていますが、コンポジションがよい。街のなかに溶け込む方法で撮影されているのか、被写体が撮影者を意識することなく3分、5分と撮影され続けられていて、作者の意図する写真特有の一瞬の間が伸びて別の次元をつくり出しています。間の伸びた写真に音が変わり、被写されている人や場所がさらに生々しくなります。写真の延長にある動画作品で力わざを感じられ、そこがまたおもしろく楽しめました。

2015年度(第38回公募)優秀賞

新垣 隆太 *Ryuta Arakaki*

sweep





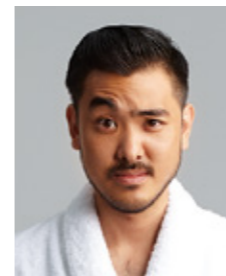


新垣 隆太

Ryuta Arakaki

sweep

ブック/大四切/23点



1988年 沖縄県生まれ
 沖縄国際大学卒業
 (在学中にカリフォルニアへ留学)
 2012年 戸田嘉昭に師事(パイルドライバー入社)
 現在、パイルドライバー勤務、フォトグラファーとして活動中



テーマはない。

強いて後付けするとしたら、視覚で捉えたものだけでなく、意識のなかに産まれるものも写真として見せたかった。

自分でも気付かない程深い場所にあった、潜在的な感覚は、突拍子もないできごとで蘇る瞬間がある。それは最初から自分のなかにあるものとは少し違う気がして、いつか見たことがあるようなものだったりもするし、誰かが与えてくれたもののような気もする。

ブックのタイトルの「sweep」とは、アメリカのプロバスケットボールリーグのNBAでよく使われる好きな言葉で、プレイオフやファイナルで7回戦中4勝すれば次のステージに進めるなか、1回も負けなしで4連勝するときによく使われるスラングからきている。

今回の審査から、写真も動画も一緒に評価されるということで、写真の強さははっきり見えるものを出したいと思い、臭いも音も感じなさそうな、写真を集めた。絵画から写真、写真から動画へと進化し、それぞれもまた進化し続けた。写真より動画のほうが確実に情報は上回るので、多くの感覚が刺激される。

先日、いつもより少し早い時間に職場へ向かう朝、工事している完成間近のマンションの前を、いつもと変わらず通り過ぎようとしたときの話。白い閉ざされたパネルゲートの向こう側から、ラジオ体操をしている音

が聞こえた。写真を撮ったけど、写真にしたところで、ただの閉ざされた白い壁だった。それはそれでかっこよかったのだけれど、動画で撮ると、もっとかっこいいのかもしれないと思った。なにひとつ動きのない壁の向こう側から、音がするだけで、作業服を着た人達のいろんな姿が想像できたし、その声や、布が擦れる音から、けだるさや、その温度感も伝わってきた。

ただ、いろんな制限がなくなることが必ずしもいいとも思わない。なにもない広場で遊ぶにしても、ボールがあればボールを使って遊ぶし、それがサッカーボールだったら、サッカーをはじめると、サッカーをやれば手を使ったらいけないし、ファールもあるしオフサイドもあるし、制限されることが増えていくが、それがあから楽しい。

床の間の掛け軸や、部屋に飾るアイドルのポスターにしても、動画だったら嫌だし、逆にジラシックパークを映画館に観に行つて、紙芝居みたいなスライドショーだったら金を返せということになる。

写真も制限だらけだけど、そのなかでできることを最大限に発揮して、それ以上は諦める事を心がけている。次の楽しみがなくなりそうな気がするから。スタジオで瞬間をつくりあげても、バスの窓から視覚を刺激してくれる瞬間に出会っても、どの瞬間も一瞬だし、決して同じ瞬間はないけれど、心に染み込んだ瞬間はいつかまた、突拍子もな

いことで蘇るし、似たような景色や気持ちは、また訪れるから、そのときもう一度シャッターを切れる。

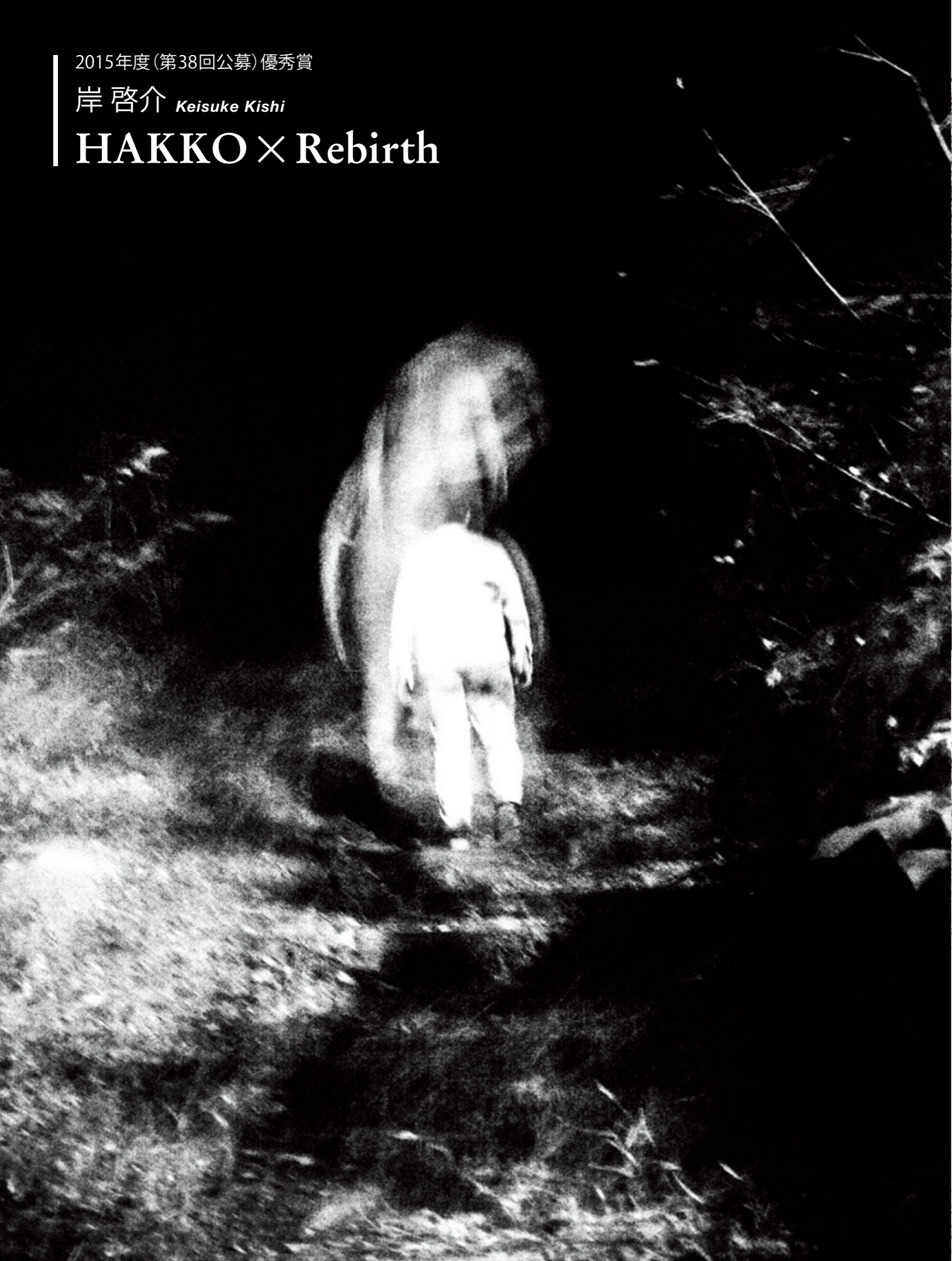
選者コメント 澤田 知子

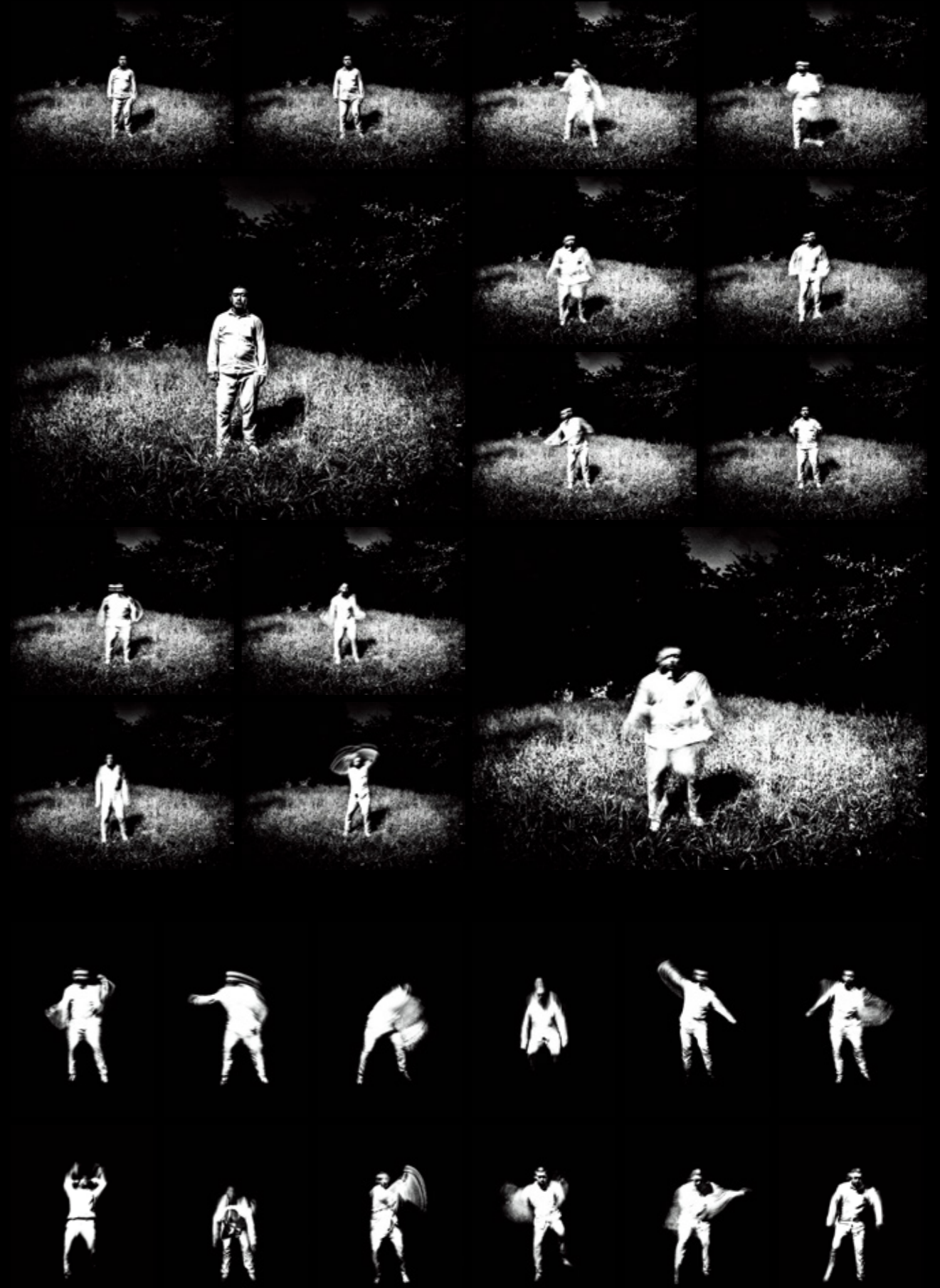
コーデロイの表紙が必ずしもいいとは思わなかったけれど、ブックを開いた最初のページにあるインパクトの強いセルフポートレートであろう強烈なイメージからはじまって、写真のセンスのよさを感じました。よく考えて編集されていて、作品点数そのものは多いほうではないけれど、豊かなイメージ力とパワーを感じます。このタイプの作品は既視感があるものが多いけれど、彼の作品ではそれをあまり感じませんでした。見たことのないイメージを見せてくれました。イメージする力と作品から感じるパワーに前向きさを感じます。期待を込めて選びました。

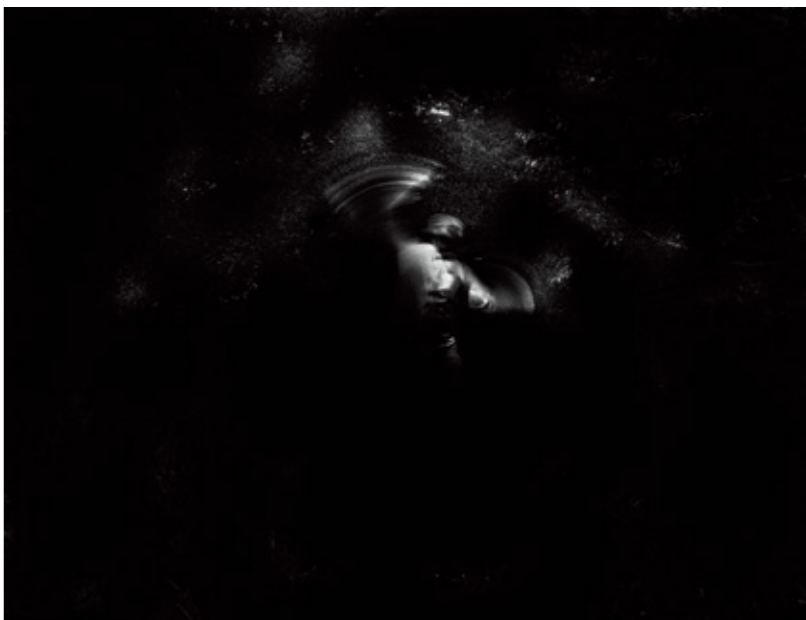
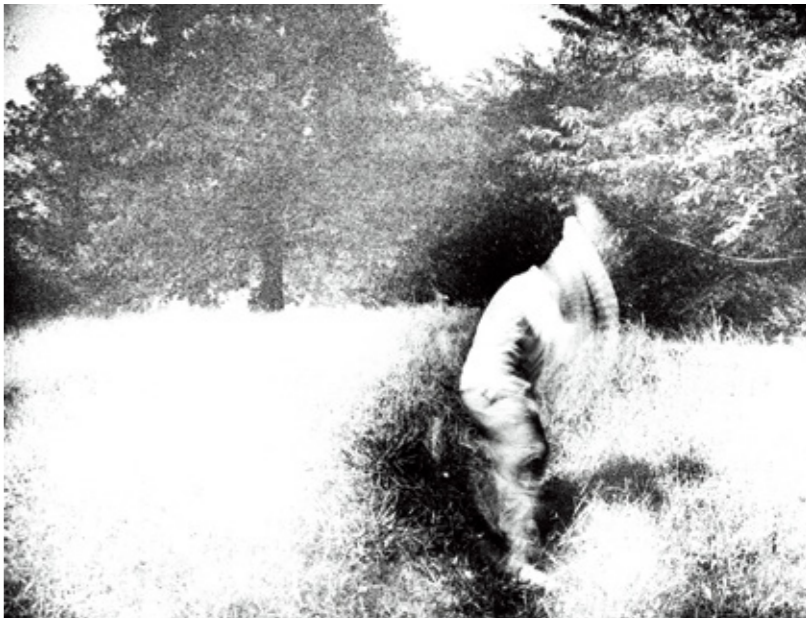
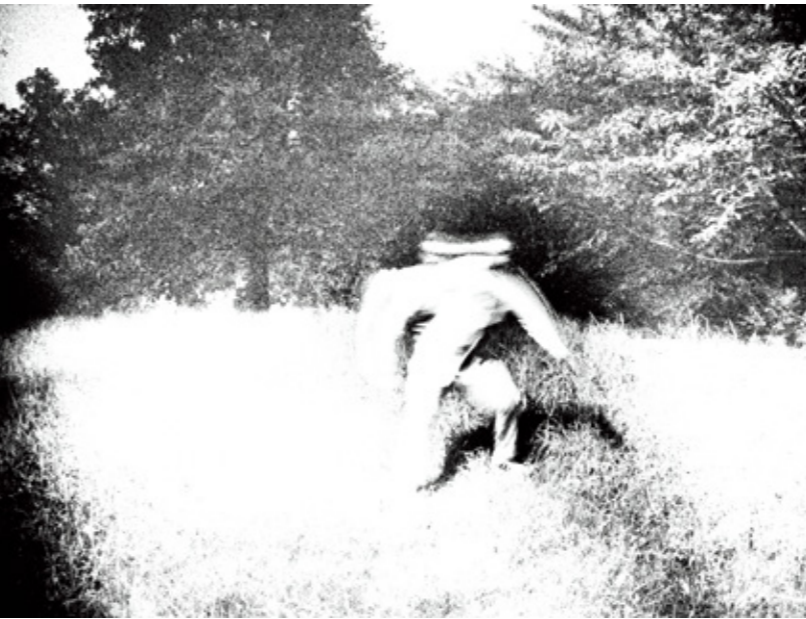
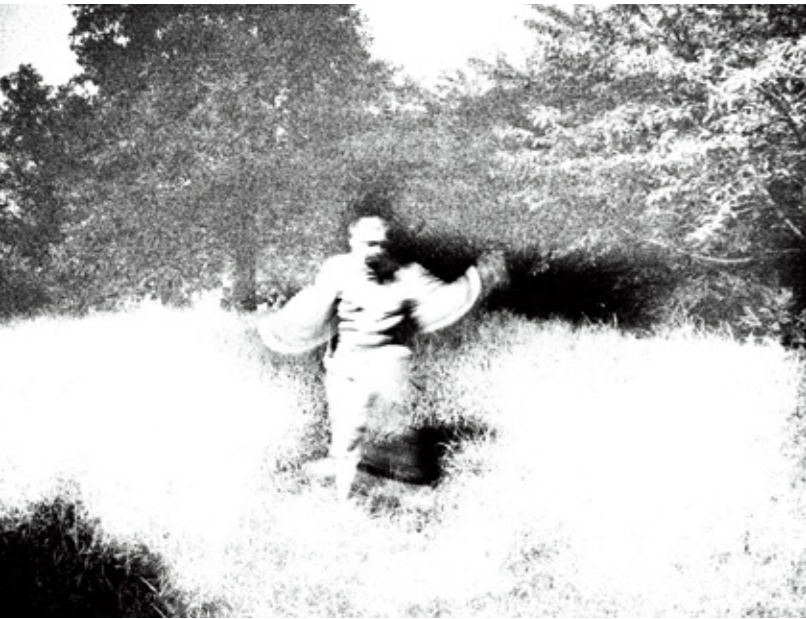
2015年度(第38回公募)優秀賞

岸啓介 *Keisuke Kishi*

HAKKO × Rebirth







岸 啓介

Keisuke Kishi

HAKKO × Rebirth

ブック/四切/インクジェットペーパー(厚手パラिता調)/48点



1979年 神奈川県生まれ
中央大学総合政策学部 中退
バンドでCDを多数リリース、全国をライブして巡る
BAR「APRIL FOOL」で写真を学ぶ
第8回1_WALL(写真)入選
現在フリーフォトグラファーとして活動中

目に映るすべて太陽の影だ
命が発光しないのならば

そう考えていた。

僕らが目を通して認識しているすべてのものは太陽によって描かれた影、つまり偽りの世界だ。写真の限界がそこにあるのだとしたら、写真とはなんと退屈な存在であることか。

3年程前、愛娘が今にも生まれそうだった頃、写真を撮りはじめた。それまでの10数年間、僕はアンダーグラウンドミュージックに酔い入り、歌を歌い、バンドでのライブツアーやレコーディングが生活のすべてだった。仲間や大好きな音楽に囲まれて本当に自由に幸福な日々だったが、心の中はいつも晴れない気持ちで一杯だった。理由はシンプルで、なにもかもが信じられなくなっていたということ。自分を取り巻く世界や、自分自身を含む存在するものすべてを完全に見失っていた。言い換えればすべてに対して完全に否定的だったのだ。救いようのない闇のなかで救いを求めて盲目のまま彷徨っていた。

東日本大震災が起き、困惑する周囲を眺めながら、自分のすべきことはなにかと日々問い続けていた頃、新しい命を授かった。そして直感的に思った。この娘を幸せにしてあげたい。この娘の生まれてくる世界が否定されたクソつたれの世界では

いけないと。そこから僕の、世界を、自分を肯定する旅がはじまった。そして出会ったのが写真だ。写真は、そこに立ち、そのすべてを受け入れて認めることで初めて生まれてくるものだ。それは肯定の産物そのものだった。それから3年間、毎日カメラを抱えて世界を歩き続けた。そしてひとつの結論に辿り着いた。

この目に映るすべては太陽によってもたらされているということ。

太陽なくして光は存在せず、この目や写真に映るそのすべては、太陽光の反射によってもたらされた影でしかないということだ。そこに映っているものが本当のものでないのであれば、写真というものになんの価値があるのだろうか。ここから僕は見えないものを撮りたいと思うようになっていった。

見えないもの、それとはなにか。僕らはさまざまな感覚を使っているいろいろな物事を感じることができる。空気や風、匂いに音、味、熱、大地や宇宙の波動だって感じることができる。場合によっては人の心だって敏感に感じ取れてしまう。そのすべてを写真に映し込もうというのは困難なことかもしれないが、自分が写真に求める最も大切な要素はなにかを考えた。僕にとって最も大切なもの、それはライブ、生きているということだった。音楽のときと考えることは同じで、それはただ息をしているということではなく、心で感じることから始まって、意志を持つ

て躍動すること。そういう写真が撮りたいと思った。

今作品は、太陽の存在に少しでも抗うかのような気持ちで、夜中に撮影を行なった。月明かりと高速道路から漏れる薄灯りだけが夏の夜にひんやりと彼を照らしていた。被写体は最も古い付き合いになる幼馴染みの友人で、撮影するにあたって多くの言葉は必要なかった。ありがとう。そして、彼を撮影して大事なことに気付いた。写真に映る彼の姿は、影などと言い切れるような希薄な存在では決してなかったのだ。はっきりとした光の印象となって確かにそこに存在していた。それは人間が、命が、自ら光となって発光していることを証明していた。命は発光しているのだ！僕らはこの目で、写真で、太陽が照らし出した色付いたシルエットをただ眺めているのではなく、心や記憶、あらゆる感覚を以て、命を見ているのだ。そこに光は確かに存在しているのだ。それを否定していたのは振り出しに戻ってまでも自分自身であったのだ。

このように僕にとって写真について考えることは、生きることについて考えることと同じです。これからも写真とともに成長し、また皆さまに楽しんで頂けるような写真が撮れれば幸いです。

そしてこの場をお借りして、いつも迷惑ばかりかけている家族に、ありがとう。

選者コメント 野口 里佳

シンプルな作品なのに、力強い。なにか力強さの秘密なのだろうとファイルを何度も見返してしまいました。自分の言葉で作品をつくっている感じがします。次にどんな作品を作るのか楽しみです。ぜひ次を見てみたいと思いました。



2015年度(第38回公募)優秀賞

HALKA

レッツゴー二匹

Vamonos!







HALKA

HALKA

レッツゴー二匹

Vamonos!

ブック/A4/写真用紙クリスピー(高光沢)/30点



大阪府出身
大阪府立成城高等学校卒業
2010年 山口 晴久氏に師事
2010年 全国高等学校写真選手権大会 準優勝
2011年 全国高等学校写真選手権大会 優勝
2016年 現在フォトグラファーとして活動中

小さい頃、我が家には家の決まりがあり、家族同士がつくってきたルールをみんなが守ることにより安心感を保っていた。

親の価値観が優先され、ときには外傷的、心的なストレスを感じることもあったが、外の世界を知らない私にとっては、その秩序を守ることが重要だった。

大人はあまり好きじゃなかったけれど、大人と一緒にいることを好む女の子で、そうしていつか私も大人になるのだろうかと思いついて描いていた。

しかし、少女から大人にさしかかる時期を迎え、それまでは素直に受け入れてきた親や周りの大人たちの言動に対し、自分の考えを主張するようになる。大人の価値観や倫理から見れば悪とされることに耐えられなくなり、焦り、苛立ち、どこか不自然になっていく。「自分が一体何者で、なにをしようとしているのか」と自問し続ける日々を過ごしていた。

大人からも同世代からも少しずつ距離を取りはじめ、時折押し寄せる底なし沼のような寂しさと強烈な孤独感が、他人を、自分自身をも信用できなくしてしまう。

「自分は自分でコントロールできるようになりたい」という強い欲求のエネルギーの矛先、「模範となるモデル」を求めているのだ。物語や映画の中、あるいは音楽や絵画の世界へと広がっていくことで、そのヒントを得ることもあるかもしれない。写真をはじめ

めたのもその頃だった。

「私らしさ」なんてものは10人いれば10通りできるくらいに、人は人の都合で見ている。それらには善も悪もなく、ただただ相手の主観で心地いいか悪いかにふるいわけられ、世間一般的に言われる「らしさ」ばかりが優先的に認められていく。

そして私はある日、ひと組のユニークな親子と出会った。

私と同世代の彼女は、アメリカ人と日本人のハーフだ。最初はそのフォトジェニックな容姿に惹かれて、私は彼女を撮るようになった。祖母に育てられ、18歳で家出をし、19歳で結婚。娘が2歳になる頃にシングルマザーとなり、アメリカへと移住していった。そんな波乱万丈な生い立ちを持ち、奇抜なファッションセンスと派手なメイクも手伝ってか、そのアウトローな存在感と、一匹狼のような性格は「母親」というステレオタイプから逸脱しているものの、彼女は自分らしさを貫いていた。

そして、大人の世界と子供らしい無邪気さとの狭間で、自分なりに折り合いをつけながら母親の後ろ姿を追いかけ続ける娘の姿は、大人でもあり、子どもでもある母親自身がそのままそっくり投影されているかのようだった。

このユニークな親子は、少女と大人の狭間で思い悩む自分自身を、2人同時に見ているようで、新鮮に感じる反面、どこか安

心するような共感すら覚えた。

また、彼女たちのようなシングルファミリーは今ではめずらしくない。

私の高校時代では、実にクラスメイトの3分の1がシングルファミリーだった。そうしたお互いの家族形態はごく自然に話し合われ、世間体を意識したタブーという認識はほとんど感じなかった。家族という社会を構成する基礎的集団の「個人化」が進んでいるのを、目の当たりしているようでもあった。

変化し続ける社会に、柔軟性と融通性が求められるなか、なんとかうまくやっていく懸命な親子の姿を追いかけ続けて3年が経った。

見えている対象は異国の風景のような、新鮮さがあるのに対し、見ているときの気持ちは、家族アルバムを開いたときのような温かい気持ちに包まれる。

不意に耳にする、「レッツゴー二匹」というおまじないのようなフレーズを唱えながら、2人は日々変化し続けて、こちらを飽きさせない。

選者コメント 荒木 夏実

まずこの写真のインパクトに魅かれました。母と娘が描写されていますが、母親は世の中で言うような模範となるきちんとした母親というイメージからはほど遠いかなりバンキーで不良のお母さんです。そのお母さんのどこか危うげな表情に対して、娘のほうは非常に生き生きとしていてドッシリと構えている感じがします。このふたりはとてもいい組み合わせで最高のコンビであるというのが伝わってくる。そして深い愛情というものも感じられて、いわゆる世の中のスタンダードとはちょっと違って見えるかもしれないけれども、そこに確かにある絆や関係性というものに魅力を感じました。

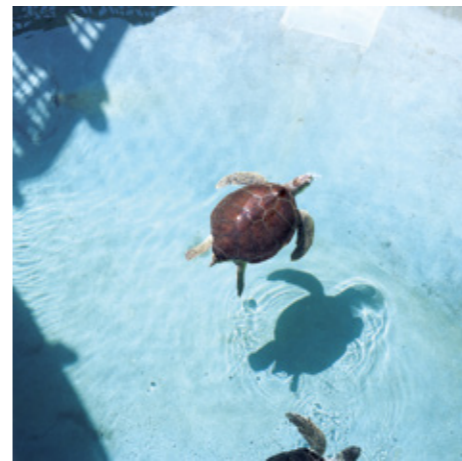
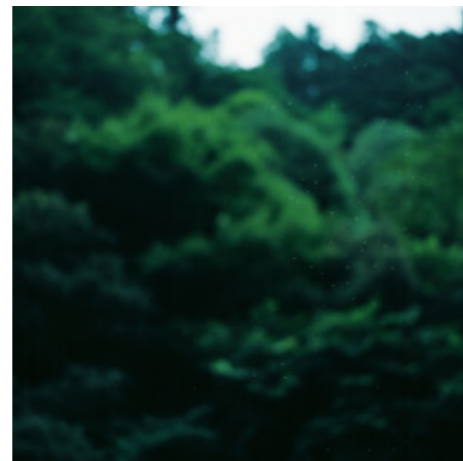
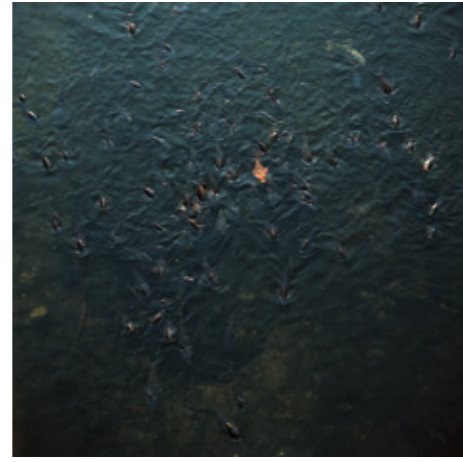
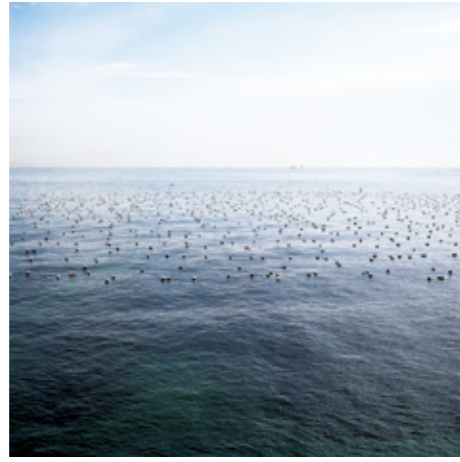
2015年度(第38回公募)優秀賞

松本 卓也 *Takuya Matsumoto*

Tangent Point







松本 卓也

Takuya Matsumoto

Tangent Point

ブック/A3/アーカイバルピグメントプリント/46点
プリント/A3~大全紙/アーカイバルピグメントプリント/42点

1976年 大阪府出身
2000年 映像制作会社 T601 所属
2009年 ビジュアルアートユニット「LANP」を立ち上げる
2011年 文化庁メディア芸術祭推薦作品選出
2013年 写真家 瀬戸 正人氏に師事
2015年 個展「Tangent Point」PLACE M
映像作家/写真家/インスタレーション作家/演出家として活動中



子供の頃、Landsatという衛星が、私の生まれる少し前に宇宙に飛び立ったというのをなにかの本で読んだ。その衛星は成層圏の少し上から、赤外線を含む複数の波長を照射し続け、波長は大気という膜を超え、ひたすら地球をデータ化し続けている。見たこともない画角で地球の表面を記録した美しい画像。私は空の遙か彼方上空にある“目”に思いを馳せた。まるで空から波長を照射している気持ちになった。その目は私のいるところにも届いている。きっと今も。

私は、写真を撮りはじめたのとほぼ同時期にコンピュータで空間を制作しはじめた。リアルな現実の物をコンピュータのなかに再現したり、インスタレーションを制作したり。コンピュータで空間制作をはじめたから写真を撮るやりはじめたとも言える。

三次元コンピュータグラフィックスはポリゴンと呼ばれる三角形の欠片を積み上げて形をつくっていき、自然界の物理法則なども演算で再現する。画面のなかで岩が崩れ、炎が上がる。今日の日光、照明。そのような光の状態も数値で入力し現実の事象を画面のなかに再現する。それを擬似的なカメラで撮影していく。最後にレンダリングというコマンドを押すと、三次元空間にあるポリゴンと数式の塊の灰色フェイスとワイヤーフレームの羅列は、ピクセル1点1点が演算により描画され絵に変化していく。そこに世界が立ち上がってきて、完成

していくような感じ。3D空間で見られていた灰色画面は、カラフルな平面的なデジタルに変換される。

写真を撮るといことは、現実を見て、現実空間を平面に定着させるということ、行為としては似ている。写真はあるがままの目の前の世界から、ものごとを読み取る行為だと思し、写真に映るものは、私の体験であり主観的なものからはなかなか逃れられないのだけれど、映ったものは違う意味を持ち合わせることがある。私はここに現実だけが持つノイズみたいなものを感じる。CGをつくるときに絶対に表現できないものがここにあるように思える。

このノイズはなんなのか。もしこのノイズをコンピュータが生成できるようになったらどうなるのか。私が両方に興味があり同時にやっている理由でもあるんだけど。

バーチャルとリアルがどんどん混同していく感覚は、現代ではあたりまえになりつつあるし、バーチャル世界とリアル世界は上辺では違和感なく接続し合っている相思相愛の関係のように思える。バーチャルの世界は人間になにかを示唆してくれるはずの存在にすらなってきた。それは世界を見る新しい方法を提示してきているのだと思う。

コンピュータのアルゴリズムは私たちに最適だと思われる現実を提示してくる。たとえば画像検索する。岩山や炎と文字を打つ。そ

こに表示されるのはアルゴリズムが判断する“いい”イメージたちの羅列。まさに岩山、炎と呼んでよいものが無数に立ち上がってくる。誰かがどのような意図で撮ったという主観は排除され、ただ岩と判断されて選ばれてくる。画像検索のまな板に乗った瞬間に主観のイメージは捌かれた魚のように生体を失って、発光するディスプレイの上に表示されるRGBデータになるのである。コンピュータにとっては簡単なイメージや思考の一致。私たち人間にとっては欠陥と言ってもよいぐらいにとっても難しいこと。でもそれが難しいから、私たちは一回ということや、最初や最後、連続していくことを大切に思えるのだし、一回性を生きるからこそ、そこに私たち人間の世界が持つフォルム、アルゴリズムが立ち上がってくるのだと思う。

暗闇のなかでも、新しい技術による宇宙望遠鏡は、ガラスの屈折のようなものを見つけて物質を見分けるらしい。目に見えないものを見ようとする行為。画面のガラスのようなもの。薄い膜のようなもの。それは限りなく透明でわずかにリフレクションしている。ある事象が立ち上がってくる所。物質と体感の狭間にあるものを、私は知りたい。

私は、地球の周りを周回するLandsatになった気分、成層圏の遙か上空から照射される波長を思いながら、今日も淡々と写真を撮り続けている。

世界は美しい。

選者コメント フリッツ・ヒールスベルフ

アーティストがここで使っている言語はとても一貫していると思います。日常生活や風景のドキュメンタリースタイルの作品と言えます。都市、自然、特に自然の写真が多いです。けれど、見慣れた環境に対するとても新鮮な視点を与えてくれます。単に批評的ではなく、とてもオープンで、これまで見てきた、似たようなスタイルの写真とは異なるものです。私から見ると、この作品は繊細、詩的、日常のなかの詩、と言ったクリシェ(決まり文句)で語られるいわゆる“日本的”なものであり、決してラディカルに新しい言語とは思いますが、このアーティスト自身の言葉を持っていることが評価に値します。



2015年度(第38回公募)優秀賞

三田 健志 Takeshi Mita

等高線を登る

Climb on the contour line



上: "Andrew on Solid Gold p1" (used under CC BY-SA) by Laurel Fan
"Sunset" (used under CC BY) by khawkins04
"Ocean lightning" (used under CC BY) by andrewmalone
下: "On the contour line" by Takeshi MITA (CC BY-SA)



上 : "Glacier river" (used under CC BY) by Kitty Terwolbeck,
"Hiking in the Brooks Range" (used under CC BY) by Paxson Woelber
下 : "On the contour line" by Takeshi MITA (CC BY-SA)

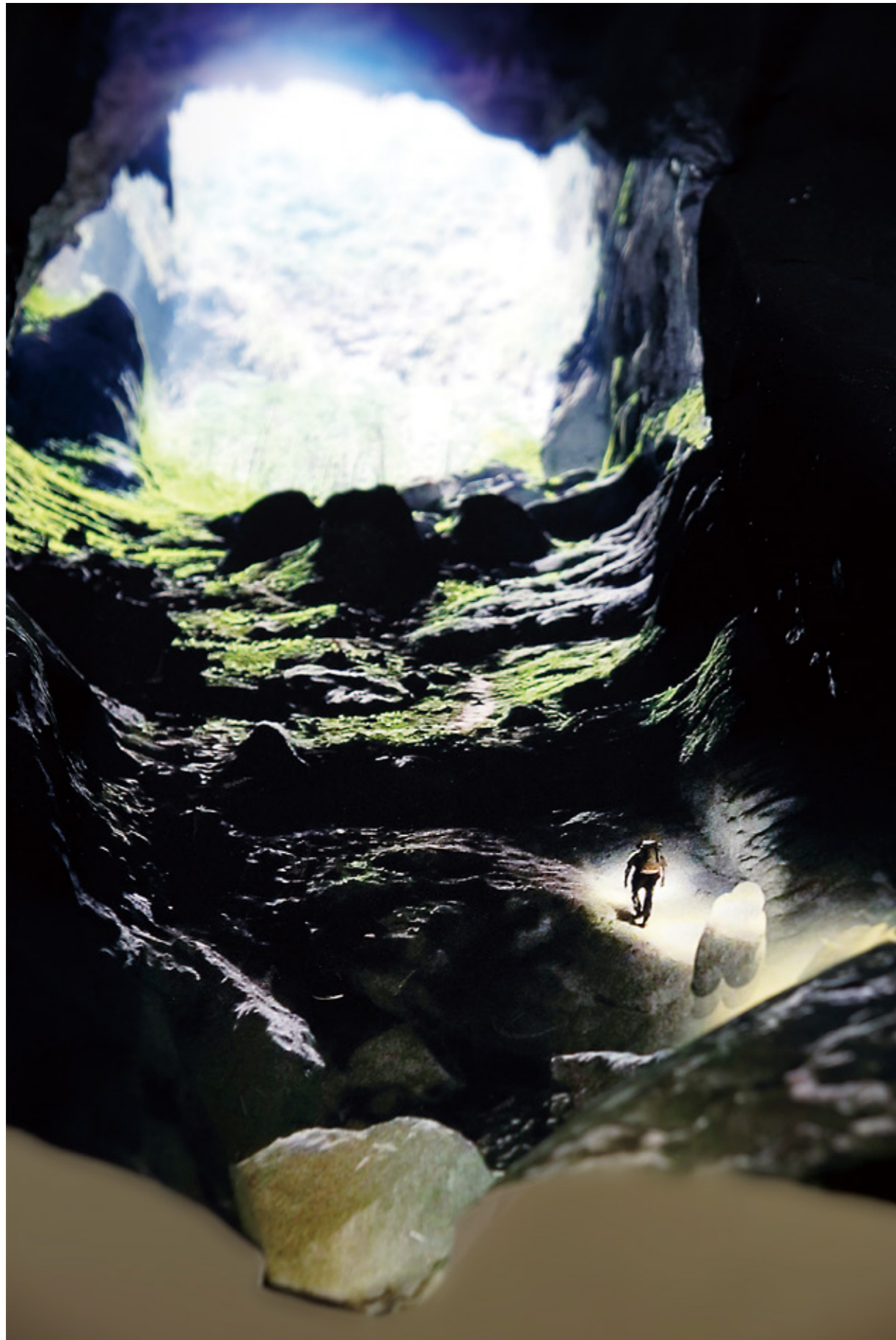
上 : "Ice Caves" (1) (used under CC BY) by AER Wilmington DE,
"Ice Caves" (2) (used under CC BY) by AER Wilmington DE
下 : "On the contour line" by Takeshi MITA (CC BY-SA)



上 : "BC Rainforest" (used under CC BY) by Stewart,
"Piz Bo? - Cresta Strenta, matkalla ferratalle." (used under CC BY-SA) by waltimo
下 : "On the contour line" by Takeshi MITA (CC BY-SA)



上 : "day lightning" (used under CC BY-SA) by ejoui15
下 : "Son Doong-47" (used under CC BY-SA) by travelinknu



"Son Doong-47" (used under CC BY-SA) by travelinknu

三田 健志

Takeshi Mita

等高線を登る

Climb on the contour line

A3/インクジェットプリント/44点
A4/インクジェットプリントの束による立体/1点
ほか資料



1979年 広島県出身
2004年 多摩美術大学大学院美術研究科絵画
専攻(版画)修了
2013年 個展「Climb on the contour line」
(新風館・京都)
2014年 個展「Explore on the contour line」
(Hasu no Hana・東京)
現在、美術作家として活動中

[契機]

私はこれまで「経験」を巡る諸問題について、制作を通して考えてきました。近年では、「経験をひらくもの」を象徴する存在である冒険家をモチーフとして、彼/彼女の旅の軌跡を辿る形式の作品を中心に発表しています。

本作を構成する作品の多くは、世界中からアップロードされた改変・商用利用可能な画像を使用して制作したものです。画像共有サイトでタグを辿りながら画像を収集し、それらをプリンタで印刷した「写真用紙」を撮影しています。ですから、作品の多くは一見、風景写真のように見えますが、物理的には静物写真であるといえます。ただし、被写体となる写真用紙は、手で歪められているため、作品には元の画像とは異なる被写界深度と消失点を与えられることになります。

44点のプリントといくつかの資料で構成された作品は、全体としてある物語性を帯びたものとなっていますが、ここで大切なことは、各マテリアルは物語へ奉仕するために召喚されているのではなく、物語が遊行して各マテリアルに奉仕しているのだということです。

こうした作品は、冒険家・大洲 奏との出会いがきっかけとなって生まれました。私は本作を通して、他者の経験の内に未知を見出し、移動なき冒険を続けた大洲の旅

の軌跡を辿り、願わくはそれを今日の我々の冒険として提出してみたいと考えました。

[大洲 奏]

20世紀前半に活躍した冒険家・登山家。世界各地で採取した植物や鉱物を製薬会社等に送ることで資金を得て活動を続けるなど、近代的な冒険のスタイルを築いた草分け的存在として知られる。

滑落事故で体の自由を一部失い、引退を余儀なくされてしまうが、その後も世界中の秘境の資料を蒐集して研究を続け、数冊の冒険記を著した。また晩年には、世界各地から取り寄せた土を用いた作陶にも取り組んでおり、その器の表面はかつて大洲自身が登った岩肌の質感を再現するように荒く削られている。

[背景]

芸術とはなにか。この重要で少し退屈な問いの答えはさまざまにあるのでしょうか、作家の意図はともあれ、それは時代を映す鏡であったと言えます。各時代に現われた眼差しから生まれた「表現」は、時代の経験を「記録」とは異なる位相で描き出してきました。

では、今日の私たちの経験は、どのような眼差しによって映し出されるのでしょうか。私は、それはおそらく特定の個人や権力のコントロール下でない、複眼的で、離

散的なもので、たとえば、画像・映像共有サイトのようなアーカイヴが持つ眼差しではないかと考えています。撮影者名やタグなどのわずかな秩序で束ねられたアーカイヴには、プロの写真や公的な機関が提供する資料も多く存在していますが、これらを圧倒する量で蓄積され続けているのは、いわゆる素人による記念写真や観光写真です。第二次大戦後をひとつの起点として生まれ、しばらく束ねられることなかったこれら大量のイメージは、近年誕生した画像・映像共有サイトによって、中心を持たない半公共的なアーカイヴとして可視化され、私たちの経験や眼差しを静かに、しかし大きく変容させています。

経験とは、常にすでに直接的かつ間接的なものであり続けました。さまざまなインフラの下でその事実が明らかにされてしまった今日においては、経験の境を規定することに個人的な欲望や趣味を超えた意味を見出すことは困難です。前時代の欲望は、我々の眼にひとつのノスタルジーとして立ち現われますが、「ネットワーク」や「仮想/現実」という言葉がもたらすイメージも、もはや十分に懐かしいものとなりました。

本作では、アーカイヴが見ているこうした私たちの経験と眼差しを、直接的/間接的経験を横断しながら旅を続けた冒険家の形象を通して、ある懐かしさの内に描き出そうとしています。

※「等高線を登る」はクリエイティブ・コモンズライセンスの下、幾つかのマテリアルから派生した作品です。

「等高線を登る」はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 継承 4.0 国際 ライセンス (<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/>) の下に提供されています。

選者コメント 清水 穰

アイコンでありインデックスであるという写真の二重性を、デジタルとアナログに割り振っていて、写真の「本当らしさ」が架空の世界と奇妙な折り合いを付けています。ちょっと飛躍がありすぎる細部(焼物など)もあるので、本人も手探りなのかもしれませんが、その手探りを応援したいと思いました。「フェイク」と「リアル」という古びた二分法の彼方で、「現実」の「写し」を「追体験」という、写真をめぐる現在の経験を巧みに表現しています。

2015年度(第38回公募)佳作

浅井 孝秋
Takaaki Asai

Industrial Human Design

ブック/A3/インクジェットプリント/26点

多くのサラリーマンが日々活動している東京の中央区を中心に撮影した。都市は人が形づくっているのか、はたまた都市が人を形づくっているのか、どちらなのか見えてわからなくなるときがある。構造に身を任せるときの恍惚感とそれを外側から見たときの心地悪さ、その両方を感じながら今の社会を観察していこうと思う。

選者コメント 澤田 知子

タイトルの付けかたがうまく、タイトルを見たあと、イメージを見えなるほど!と思いました。屋間のビジネス街を歩けば、どこにでもある風景のようですが、切り取りかたが独特でよく編集されている作品だと思いました。次にどういう展開があるのか楽しみです。



石野 郁和
Fumikazu Ishino

glue

ブック/B4/インクジェットプリント/4枚1組として104点

情報と画像の垂れ流しの時代において、自己を形成している歴史を再認識、編集する行為が自分自身の指標を示す有効な方法だと思う。私は自分の育った核となる90年代をテーマにし、インターネットに氾濫する画像をリサイクルしそれを「メイン」として使い、私の撮る写真は「のり」または「サブ」としてメインの穴埋めのために使うことに至った。

選者コメント フリッツ・ヒールスベルフ

1ページを4つの写真で構成する、非常によくできたブックです。ドローイングやTV画面などもあり、それらがとても美しい手法で集められています。タイトル「glue」はスクラップブックを想起させます。つまり、これらは画像のコレクションであり、写真もそれらビジュアルメディアの一部として扱われています。この作品には、私たちの視覚文化への言及という側面があります。またもうひとつ重要な物語が背景にあります。アーティスト自身が個性のない郊外という環境と向き合うなかで、さまざまな画像を集めることでその空虚さを埋めようとしていることが反映されているからです。そうした意味でも、特別な作品です。



いぬ
Dog

猫パンチ *Cat punch*

A3/インクジェットプリント/40点

日常世界に潜む闇を鋭角に切り取った社会派な作品群です。

選者コメント さわひらき

ページをめくってザワザワしました。自分ではこのような作品はつくれないし、構成もイメージも見ていておもしろいので選びました。



上田 良
Yaya Ueda

浮遊するオブジェの写真 *Photograph of a floating object*

額装/A1/5点

自身で制作した彫刻作品を撮影し、その写真のなかに写り込んだ空間、重力、その被写体が彫刻作品として自立していることを示す情報、記号から物体イメージのみを切り抜いている。彫刻の制度的な空間と重力を、写真の非空間と非重力へと移行させることで、新たな視点で彫刻を捉え直すことが可能なのではないかと思い制作した。

選者コメント 澤田 知子

第一印象が強い作品で、目と目に飛び込んできました。発想の豊かさを感じます。2次元と3次元の関係性を表現するために、写真をうまく使って作品化されていて、影を消して浮遊しているような不思議な違和感を出すことでおもしろい表現になっています。数をもっと見てみたかったし、これからの展開、期待を込めて選びました。



岡田 泰裕
Yasuhiro Okada

Fafrotskies

ブック / B3 / インクジェットプリント / 24点

彗星探査機・ロゼッタから送られてきた彗星の写真を見て、壮大で美しいと感じながら、どこか現実感の乏しい嘘っぽいものと感じました。それはとても曖昧な感覚でした。自分の行ったことのない世界を見たいし、感じたい、そんな願望からあるかもしれないし、ないかもしれないものを表現したいと思い、つくりました。

選者コメント 野口 里佳

まずなんだろうという驚きがありました。ファイルのつくりと質感で不思議な強さを感じる作品です。テキストで作品を説明し過ぎている感じもしましたが、独自の表現になっていると思います。



数井 佐弥子
Sayako Kazui

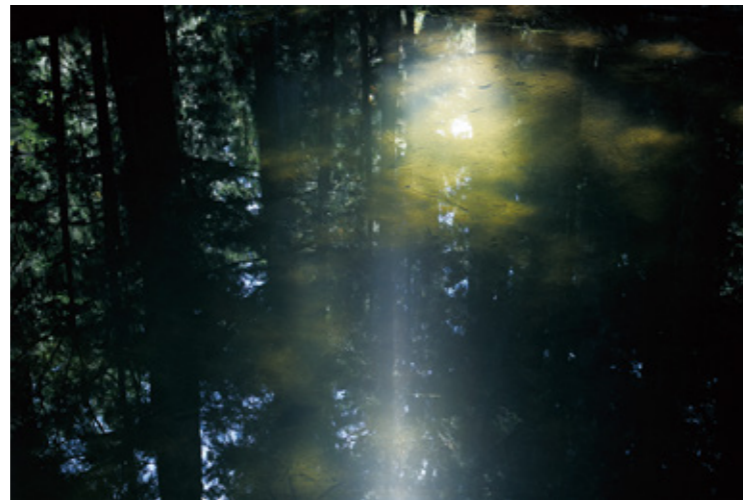
月へ流れる flowing to the moon

ブック / 大四切 / インクジェットプリント / 35点

切り取った世界と現実の間に生じるずれ。はっきりとしない記憶。見えなかった世界。捉えようとする不確かな対象は、いびつで美しい像を結ぶ。それらの断片をつなげてゆくと、さらに新たなイメージが広がる。自分の小さな世界が膨らんでゆく様子は宇宙のようで、私は自身をとりまく宇宙を、写真に変換しようとしている。

選者コメント 澤田 知子

写真を丁寧に大切に扱っている印象を受け、それが作品の繊細さにもつながっています。よく練られて編集されているブック作品で、抽象的なものと具象的なものがうまく混在し、こういう作品によくありがちな既視感があまりなかったのがよかったです。一枚一枚の写真もしっかりした世界観を持っていると思いました。



川口 典峰
Noritaka Kawaguchi

じかんとくうかん Time and Space

映像作品 / 1分58秒

このさくひんはいろいろなものがいたりきたりしています。じかんとじかんがいたりきたり。おととおとがいたりきたり。ひととひとがいたりきたり。へいめんとくうかんをいたりきたり。しゃしんとえいぞうをいたりきたり。

選者コメント 野口 里佳

動画ならではの作品だと思います。とてもシンプルで短くて、完成度の高い映像。しかもビデオ作品と写真のちょうど中間にあるような作品だと思いました。



駒瀬 由宗
Yutaka Komase

car

写真集 / A3 / わら半紙 / レーザプリント / 500点

私は車が好きではありません。私は車の写真が好きなのです。車と車の写真の間にある違いは、いったいなんなののでしょうか。そのギャップ ギャップ ギャップが、たまらなくおもしろいのです。ですから無限に車を撮り続けてしまうのです。

選者コメント フリッツ・ヒールスベルフ

ブックのつくり自体がとても美しい。グレーの薄い紙をひもで綴るといったクラシカルな手法が使われています。膨大な車の写真のアーカイブにもかかわらず、あまり野心的な感じがしないこと。この写真が特別に感じられるのは、駐車場にまるで打ち捨てられたようにそこに佇まいます。車の一部だったり全体だったり、ランダムにもかかわらず、全体のスタイルと雰囲気に一貫性があります。車への愛着ではなく、車への魅了、街の中にある現代的なオブジェクトとしての車に魅了されていることが感じられます。私は車愛好者ではありませんが、この写真がとても好きです。とても力強い作品だと思います。



鷺山 啓輔
Keisuke Sagiyama

白い紙船 2014 *A WHITE PAPER SHIP 2014*

映像作品 / 10分

2013、2014年、福島県阿武隈川流域へ撮影に向かった。そこでは、自然とも人工とも捉えがたい「新しい風景」が形づくられはじめています。東京の水産経済新聞社でアート展示としてはじまったこの制作は、時空を超えて要素を洗練し、上映作品にとしてまとめあげてみました。折り紙の船は、震災当時に発刊された新聞紙でつくられています。より多くの方々に本作をみて頂きたいです。

選者コメント さわひらき

ジワジワと心に響いてくる美しい作品です。各ショットのコンポジションや編集点が丁寧に仕上げられていて、じっと見入ることができます。ただもう少しイメージを輪郭的に表現できればよかったです。



島津 啓
Kei Shimazu

緞帳 *Drop Curtain*

ブック / A3 / インクジェットプリント / 40点

覆いであり
網の目であり
幕であり
帳である
幾重にも連なるものの縫れ合いの

選者コメント 野口 里佳

一見地味ですが、一枚一枚がとても丁寧に並べられていて、それが本当に必然で並んでいる感じがしました。儂い美しさみたいなものが写っていると思います。



白浜 哲
Satoshi Shirahama

Reprise

ブック / A4 / インクジェットプリント / 40点

東京のある地域に興味を持ち、写真によるフィールドワークをはじめたのが制作のきっかけです。そこで出会ったもので構成されたこの作品の大きなテーマは「時間」です。過去-現在-未来がひとつの束になって流れる川のようなできごと、今後も眼を向けていきたいと思います。

選者コメント 清水 穰

ルプリーズとは再び取り上げること。音楽では先行する音楽的な素材（メロディや音型など）が再び戻ってくる。「不気味なもの」とは、かつて親しかったものがいったん抑圧され、再び帰ってきたものだというフロイトの定義は知られています。本作品も、戦前は親日派の建築家、戦中は米軍の東京大空襲に協力し、戦後は再び東京で建築家として活動したというヤヌスの建築家・アントニン・レーモンドの戦後の建築を舞台に、戦後日本に潜む「不気味なもの」（＝「アメリカの影」）を漂わせることに成功しています。音楽的で巧みな構成は、かつて「サイ子（=psycho）」で佳作を受賞した山崎雄策タイプ。ただしヒッチコックというよりデイヴィッド・フィンチャー。



津田 隆志
Takashi Tsuda

あたらしい山 *Mountain of vision*

額装 / 12×17 & 23×30インチ / 新世紀ed / W130mm × H195mm (イメージサイズ) /アーカイバルビグメントプリント / 10点

“最大の価値”を示唆するスーパーの駐車場を撮影の対象にして反転や対立の要素を内包させながら、経験に左右されない“あたらしい山”のイメージをつくり出しています。

選者コメント フリッツ・ヒールスベルフ

美しく額装された風景写真です。実際の風景に見えますが、実は実際の山のサイズとは異なります。なぜなら、これらは人々が雪かきで捨てた雪からできているからです。しかし、まるで本当に自然の山のように見えます。この人工的なものとリアルなものを混同させることがこの作品の本質かどうかはわかりませんが、私はこの作品の本質は、アーティストがこの彫刻的な形に美しさを見出したことではないかと思います。それがこの作品全体に物語を与えています。自分がこれから自然の風景を見るときにこんな捉えかたを試してみようと思わせてくれました。



西村 尚己
Naoki Nishimura

passion

ブック/A3/印刷/35点

人生は挫折の連続である。ときには過去を悔み、未来に失望する。人を恨み、不運を嘆くこともある。しかし、どれだけ悩み、もがき苦しんだとしても、結局、自分ができることは、今この瞬間、瞬間を情熱を持って、あきらめずに精一杯生き切ることしかない。情熱に満ちあふれ、直向きに闘うアスリートたちのように。

選者コメント 清水 穰

アスリートを撮って、高性能カメラの望遠力、高解像力、時を止める力を、極端に使いつづけています。飛び散る汗はまるでダイヤモンドダストのよう。そのやり過ぎ感がまずおもしろく、まじめに撮れば撮るほどおかし。ほかのスポーツ写真とは、極端へと突き抜ける真剣さが違います。いわば、デジタル技術のドラッグクイーン。それとともに、そこはかとなく漂う「ゲイ」感。誇張された体毛、張りつめた肉体の押し合いへし合い、キスしたり舐めたりできるほど望遠によって寄る、触感のエロスがこの作者の魅力です。たぶん「まじめ」な作者には心外なコメントでしょうが、エロスと最新技術がシンクロするおもしろい作品群です。



紅 たえこ
Taeko Beni

好奇心とかいう一瞬の関係性
That instantaneous relationship
called curiosity

ブック/A4/インクジェットプリント/25点

他人というほど関心がないわけではない。けれど、他人以上の感情は入れたくなかった。友達というほど気を許しているわけでもない。だけど、友達のように理解し合いたかった。恋人というほど深く関わるつもりもない。けれど、恋人のように彼のすべてが知りたかった。お互いに「好奇心」だけでつながっていた一瞬。

選者コメント 荒木 夏実

写真を通してドラマチックな物語性を感じる作品になっています。ところどころに手書きのメモが入っていて、付き合っていたらしき人の描写がされています。「こんな人だった」「こんなことをしている人だった」ということが殴り書きされていて、それがリアルな印象を持ちました。いなくなってしまう人の気配を感じさせてくれるような部屋の風景とその人への思いと描写が非常に興味深く絡み合っている作品でした。



山内 浩
Hiroshi Yamauchi

彼の労働の果実、或いはその欠如
Fruits of his labor, or lack thereof

デジタル写真/43点

バブル経済崩壊後から続く慢性的な不景気で、都市部では住所も定職も持たない人達がめずらしくなくなりました。数字やグラフでデータとしてひとまとめにされがちな彼らひとりひとりに名前と顔、そして今の状況に至った経緯があります。この作品は厳しい生活のなかでなんとか社会の生産的な一員であろうとする男性を追ったプロジェクトです。

選者コメント 荒木 夏実

この作品はホームレスの男性を撮っている作品です。社会問題としてのホームレスやその惨めな部分よりは、この男性の個人の魅力があふれています。そして彼の一日の過ごし方、缶を集めて潰して販売してそして収入を得ているというような労働のプロセスみたいなものがとても具体的に描写されていて、ホームレスを描く作品としては新鮮だと感じました。なにしろここに出てくる男性が力強くかっこよくて「生きる力」のようなエネルギーが表れているのが魅力的だと思います。



山本 剛士
Takeshi Yamamoto

まるち人間(石田 泰道)
Multi-Human, Taido Ishida

ブック/A3/インクジェット/48点

高校の教師をしながら実家のお寺を手伝いライフワークで現代美術の活動をやりながらも家族サービスもうまくやってしまう。ある意味、多彩な人間を写真で表現したいと挑戦しました。

選者コメント 荒木 夏実

写真の被写体になっている男性は、高校の美術の先生もやっているし、地元の副住職もやっていて、それからアーティストで作品もつくっていて、その作品の船に乗って川に入ったりもしている人なんですね。いろんな顔を持った男性の日常が伝わってきます。家族や生徒など周りにいる人たちとの関係もとても和やかで、この男性の魅力がひしひしと伝わってくる作品で、撮っている人の被写体に対する愛情も感じます。



優子
Yuko

ちょっと宇宙(そこ)まで Stepping out for a universe

ポートフォリオ/六つ切りワイド/光沢/54点

なにを考えているかわからない人や不思議な行動をとる人を宇宙人と比喻することがある。でも、自分以外の人が本当はなにを考えているかなんてわかる人はいないと思う。

となると、自分以外の人は宇宙人とも言える。一歩外を出ればそこは宇宙。

本日もちょっと宇宙(そこ)まで、写真を撮りに行ってきます。

選者コメント さわひらき

夕飯の食材を買いにいくときにふと目にする瞬間をこれだけ集めると、ページを捲るたびにふっと宇宙に行くことができるのかと、私の思考がてんでバラバラな方向に宙に浮いて飛んでいきました。



Natalia Behaine Natalia Behaine

José

映像作品/4分59秒

ビデオ作品「Jose」は、私の二人の祖父のうち後の方に亡くなったYusef Behaine Gatazの晩年をまとめたものである。長い間ともに過ごしているなかで、アルツハイマー病がもたらした限りなく広がる空想の世界を祖父は話してくれた。「Jose」の本質は、夢想の神秘性を讃える賛歌である。繰り返された時の流れ、死、そして面影がアルツハイマー病でばらばらにされてしまったが、ビデオ作品は、これをひとつにまとめたものとも言える。写真を全体に使うことで物語風に仕上げ、証としたものである。

選者コメント 清水 穰

短編映画ではないからおもしろい。動画をコマ撮りに還元し、連写しています。そこに徐々に死へと近づいていく主人公の話が折り込まれていく。シンプルではありますが、「死」もまた、ある連続性(=「生」)の幻影が崩れていくことだと理解して、動画の時間と写真の時間を行き来することで、生と死がひとつであることをテーマにしていると思います。新ジャンルにふさわしいチャレンジであり、作品もコンパクトで美しい。



Judges' general
comment

総評

フリッツ・ヒールスベルフ

(オランダ写真美術館キュレーター)

たくさんの興味深い作品を拝見し、日本の写真の状況について私の考えを一新してくれました。作品はとても多様で多岐にわたっており、それは私にはよいサインだと感じられました。多くの静止画、そして動画をデジタルの形式で受け付けるというアイデアも魅力的でした。このような多様な形式を受け容れるコンテストの審査をこれまで経験したことがありませんでしたので、とても特別でした。

今、私が選んだ候補者のリストを見ていて、他の形式に比べて動画で質の高い作品があまりなかったことは残念に思います。よい映像作品をつくっているアーティストはたくさんいるはずですが、次回からはそのような方たちにキャンボンがリーチされることを期待します。なぜなら、特にここ日本には多くの優れたビデオ・アーティストがいるはずだからです。

全体としては質の高いコンテストだと感じました。



フリッツ・ヒールスベルフ

荒木 夏実

(森美術館キュレーター)

今回、初めて写真の審査をさせていただきました。専門分野ではないのでとても新鮮でおもしろかったです。同時に写真ってなんだろうということを考えさせられ、難しい媒体であると感じました。

デジタルで撮ることはある意味誰でもできますし、必ずしも技術を伴わなくても撮れる手軽さがあります。その一方で、なにをなんのために撮るのか、なんでこの媒体でなければいけないのかという必然性、そういうことがうまくきちんと揃ったときに、力のある作品が出てくるのではないかと思います。

今回の審査で、私が一番とまどったのが動画作品になります。

結局、これというものを選ぶことができませんでした。動画、ビデオと言うジャンルは非常に広いということ、ドキュメンタリーなのか実験的なものかナラティブを追っていくことなのか。それから動画の特質である動くことそのもののおもしろさを追求していくことなのか。でも中には単にスライドショーでしかないものもあって、動画の必要性があるのかと首をかしげました。

日頃、現代美術に携わっていて非常におもしろいインパクトのある、いわゆるビデオアートというジャンルの作品を見ている立場からするとあまりにも弱い作品が多いように感じました。

Judges' general comment

総評



荒木夏実

さわ ひらき

(美術家)

こんなに大規模な写真コンテストの審査は初めての経験です。まず、どうやって見ていこうかというところからはじまりました。プリント(紙焼き)、フォトブック、そこに今回から静止画(デジタルイメージ)が加わって、それぞれ素材の特性は異なり、写真というメディアで、同じ映像作品でもまったく違うメデイウムになっています。そこに動画作品も加わり、審査前は動画と静止画全般の境界をどのようにまたぎつつ作品を見定めるかを心配していましたが、すでにプリント作品とフォトブック自体が作品の表現手段として違っていて、それぞれの媒体を超えた表徴が見えはじめると、動画を見てもそう違いはないのかもと思えてきて、ようやく均一に作品を見ていくことができました。



さわ ひらき

清水 穰

(写真評論家)

今回から静止画・動画のデジタル作品も応募できるようになりましたが、ちょっと誤解があったようです。

たとえば、静止画の応募作品のなかに、グーグルのストリートビューを使った作品がありました。1970年代の「ニュートポグラフィクス」をある種アプロプリエイトする作風で、アナログ・プリントで成立していた過去の作品を、デジタルイメージ(ストリートビュー)でなぞるという戦略はセンスがいいし、おもしろかったんですが、発表形態はミュージアムピースの物体であって、これこれの方法でプリントせよと指定してありました。それならそのプリントをちゃんと仕上げて欲しい。審査対象としてのデジタル静止画は、あくまでもモニターでの鑑賞が前提ですから。作品以前ということで落選になりました。

動画は、新しい試みのわりには期待以上でした。たしかに同じような混乱が応募者側にあって、新発田市や墨田区の宣伝ビデオ(?)、プロモーションビデオ(?)や短編映画(?)のようなものがありました。そういうものではなく、デジタル技術がムービーとスチルという境界や、瞬間という概念を曖昧にしていく新しい段階に差しかかかっていて、そこから動画とも静止画とも言いかねる、おもしろくて変な表現がでてくることを期待していたわけです。その期待に応えてくれる作品があったので喜んでます。



清水 穰

Judges' general comment

総評

澤田 知子

(アーティスト)

今回から静止画・動画のデジタル応募が可能になって応募した人もいると思いますが、デジタルイメージの場合は、デジタルでしか表現できないもの、デジタルでなければいけない明確な理由がない限り、なかなか賞に入るのは難しいと思います。

ブックも自分のお気に入りのイメージなど作品への愛情が強すぎて編集することができずとても分厚いブックになってしまっているものも多かったように思います。自分はなにを言いたくてつくっているのか、自分のテーマに合う表現はその手法なのかということがわかっていて、手法がそのテーマにマッチしている人の作品はやはりパワーもあり、プリントかデジタルかということにかかわらず選ばれていくと思います。



澤田 知子

野口 里佳

(写真家)

審査前は動画と静止画、そしてプリント作品を同列で選んでいくというのはとても難しいことのように思いましたが、作品を見はじめたら結局、いい作品はいい作品なので、いろいろな形の作品があることがかえって楽しかったです。

ただ、静止画はなかなか選べなかったです。額装したプリントや、ブック形式で応募している人に比べると、実際にかけている手間や時間が少なく、手軽さで応募している感じがしてしまい、つい厳しく審査してしまいました。静止画ならではの作品、静止画でしか成立しないという作品が見てみたいです。今回そういう作品はなかったように思いますが、これからどんな作品が出てくるのかという期待もあります。

Judges' general
comment

総評



野口 里佳



2015年度写真新世紀(第38回公募)審査員

フリッツ・ヒールスベルフ

Frits Gierstberg

オランダ国立写真美術館の立ち上げから関わり、現在も主任学芸員として精力的に展覧会を企画しているフリッツ・ヒールスベルフ氏。常に展覧会の現場で写真と向き合ってきたヒールスベルフ氏は、若手から巨匠までヨーロッパの多くの写真家たちから大きな信頼を得ているキュレーターである。日本の写真にも早くから興味を持ち、その歴史や動向への造詣も深い。

今回、唯一の外国人審査員として、「写真新世紀」の審査に参加。日本の写真賞の審査は初めてというヒールスベルフ氏に、日本の写真、写真と映像、ヨーロッパ写真の近年の動向などについてお話をうかがった。

日本写真との出会い

——フリッツさんはなぜ日本の写真、日本の写真家に興味を持つようになったのでしょうか。

私が日本の写真に興味を持ったきっかけは、1990年のロッテルダム写真ビエンナーレでした。日本写真のセクションがあり、森山大道、土田 ヒロミ、江成 常夫、荒木 経惟、須田 一政、鈴木 清、古屋 誠一の作品が展示されていたのです。

その2年後、ロッテルダム美術館で荒木 経惟の「アクト・トーキョー 1971-1991」の巡回展が開催され、それを企画したのが、私が当時勤めていたPerspektierf Galleryでした。そして、同年の第3回ロッテルダム写真ビエンナーレ「Wasteland」に、私たちのギャラリーは金村修と土田ヒロミに参加を依頼したのです。当時のヨーロッパでは、日本の写真はまったくと言っていいほど知られていませんでした。

その後、1999年に第3回東京国際写真ビエンナーレ「記憶 記録の漂流者たち」(東京都写真美術館)のノミネーターとして初めて来日し、その翌年もキュレーションした「STILL \ MOVING 境界上のイメージ — 現代オランダの写真、フィルム、ビデオ」(京都国立近代美術館)^{*1}のオープニングで来日しました。

こうして日本を訪れるうちに多くの日本写真家の作品を見る機会に恵まれ、若手の展覧会を企画したいと思いはじめたのです。それは、2001年の「Surface」(オランダ国立写真センター)として実現しました。金村 修、木村 友紀、松江 泰治、米田 知子や、写真新世紀で優秀賞を受賞した佐内 正史と岩崎 マミなど計12名の写真家^{*2}。そして、ペインティングですが、近藤正勝の作品も展示しました。写真と絵画の関係を考える示唆を与えてくれると考えたからです。ほとんどの作家をオランダで初めて紹介する機会となり、来場者からの評判がとてもよい展覧会でした。

日本の写真に出会ってから25年が経ちましたが、私はいつも、なにかを見過しているのではないかと感じています。日本人ではない私たちにはわからないミステリーがあると—それが、日本の写真に注目しつづける理由のひとつかもしれません。

いま、日本の写真になにが起きているのか？

——写真新世紀の審査はいかがでしたか？

今回の写真新世紀の審査は、とても興味深いものでした。それは、「いま、日本の写真になにが起きているのか？」を知ることができたからです。応募作品の全体のレベルは高く、さまざまな方向性の作品が揃っていました。

ほかの国と異なったのは、日常を写真で綴る作品が多かったことです。日本写真の典型と言えるかもしれませんが、フォト・ダイアリー—というか、ボーイフレンドやガールフレンド、朝食や花など、日々のなかで見つけたなにかが被写体となっている作品です。すばらしい作品もありましたが、私はこの中からは候補を挙げないと決めました。やはり既視感が拭えませんでした。今回の「写真新世紀」では、なにか新しいものを選びたかったのです。

意外だったのは、3.11に関する作品がほとんどなかったこと。全体としても、社会的、政治的なテーマが少ないと感じました。単なるドキュメンタリーやルポルタージュではなく、社会の動きを反映した作品—という意味です。ヨーロッパでも減少傾向にはありますが、まだまだ多く取り上げられるテーマです。5年後に迫るオリンピックにも触れられていませんでしたし、いまの日本では社会の動きを作品に取り入れることに関心が薄いということなのでしょう。

もうひとつ、ダミーを含む写真集という形での応募が少なかったことも予想外でした。日本は写真集大国として知られていますから。でも、ダミーでも写真集の形式にするのは費用もかかりますので、よく考えたらあたりまえかもしれません。

デジタル作品とはなにか

——デジタルデータで応募された作品に関して、これまでとの違いを感じましたか？

今年からデジタル(データ)での応募が可能になったと聞いています。静止画での応募作品の質は多様でした。1枚のみでの応募作品には、それ自体はいい写真であっても、コンテキストがわからな

いので評価が容易ではありませんでした。

動画は、いくつかとても興味深い作品に出会うことができました。ですが、期待していたほど多くはなかったというのが正直なところで。初めての募集だった影響でしょう。日本は、映画でもビデオアートでもすばらしい作家を数多く輩出している国。まだまだおもしろい作品があるはず。『写真新世紀』は『写真』の賞だから、自分は応募しても仕方がない—とってしまう人が多いのかもしれませんが。今回の優秀賞には動画作品も選ばれていますので、これから認知度が上がっていくことに期待しています。

実際のところ、「デジタル作品とは、またデジタルフォトとはなにを指すのか?」「デジタル作品とアナログ作品の違いは?」という議論もあります。今の時代、誰もがデジタルイメージをつくっている、それ自体は特別なことではありません。重要なのは、芸術としてどれだけ内容がある作品なのかということなのです。審査員のさわ(ひらき)さんもおっしゃっていましたが、たとえば、インスタグラムを使った作品でもよい訳です。Facebookという可能性もありますよね。最終的なアウトプットがデジタルイメージかどうかは別として、制作にデジタルソーシャルメディアを使う。このような作品こそがデジタル作品ではないのでしょうか。

別の例ですが、オランダにiPhoneで自撮りしたイメージを集めて作品としているアーティストもいます。一枚である必然性はないので、多くのイメージからなるシリーズでももちろん成立します。

デジタルか、アナログかは技法にすぎませんから、どんどん応募すればよいと思います。

ヨーロッパ写真、近年の動向

——最近の写真の傾向についてはどのようにお考えですか？

日本も同じだと思いますが、ひとつの大きな方向性があるのではなく、多種多様な方向に写真家たちの興味に向かっていく状況が続いています。

そのようななかでブックメイキング(写真集の制作)は、大きなトレンドのひとつです。自主出版が増え、実験的な、またはコンセプチュアルな写真集が多く見られるようになりました。ブックフェアや写真集の賞も増え続けており、発表の場があることも後押ししているのだと思います。



フリッツ氏が関わった展覧会のカタログ、写真集

ます。また、アナログのテクニックの実験を試みる写真家も増えていきます。写真の化学的な側面への興味が強まり、暗室に戻る傾向が見られます。荒木、森山のように、写真のメディア性にラディカルな考えを持つ写真家も目立ちますね。

そして、さきほど話をしましたが、政治的なテーマの作品はヨーロッパでも減少傾向にあります。明確な原因はわかりませんが、シリア問題や経済危機など、目前の問題が増え続けているので、現実逃避のひとつの現われなのかもしれません。一方でドキュメンタリーも根強く、旧来のスタイルから、少しユーモアが加わったマルティン・コラー^{*3}のような写真家までとても人気があります。

写真自体が、近年ポピュラーになってきたという大きな変化も強く感じています。写真フェスティバルや写真美術館、キュレーターも増えてきましたし、写真をアートだと考える人、鑑賞者が増え続けているという実感があります。

若い世代の写真家たち

——若手の写真家たちの活動についてどのように考えていますか？

20代から30代のヨーロッパの写真家たちの重要なキーワードは、「協働」です。「コレクティブ」^{*4}と呼ばれるグループは、メンバーと一緒にプロジェクトを進めたり、イベントやフェスティバルを主催したり、クラウドファンディング、出版など、発表できる機会が増えるように自分たちがイニシアチヴを取って、非常にアクティブに活動しています。お金を稼ぐという意味でもうまく機能していると思います。これまでとは違う、新しいエネルギーを感じます。

特定のグループとしてではなくても、個人として行なうデザイナーやライターなど他分野とのコラボレーションも盛んです。この世代の写真家は、ソーシャルメディアをうまく使っていますよね。たとえば、Facebookに「いま、このような新作をつくっていて、来年には本を出したいのだけど」書き込むと、それを讀んだ人が「それなら、あの人会ってみたら……」と提案をする。昔の写真家たちは、新作は発表するまで絶対に秘密にしていたものです。また、フットワークの軽さも特徴だと思います。いろいろな場所にどんどん出かけて行きます。昔に比べて航空運賃も安くなりました。アムステルダムからベニスまで100ユーロですから、ちょっとビエンナーレを見に行くというようなことも以前より気軽にできるわけです。



© Martin Kollar



© Martin Kollar

写真と映像の融合が生む、 新たなドキュメンタリー

——フリッツさんが気に留めている写真家や作家はいらっしゃいますか？

いわゆるファインアートではないのですが、ドキュメンタリーの分野でもおもしろい展開が生まれてきています。ドキュメンタリーでは写真と映像と一緒に発展してきたという歴史がありますが、スライドショーだけではないドキュメンタリー写真の発表方法を模索する中で派生した「デジタル・ストーリー・テリング」という手法です。

たとえば、オランダ出身の写真家、カティル・ファン・ロハイゼン^{*5}による「Via PanAm」という興味深いマルチ・プラットフォーム・プロジェクトがあります。彼は、アメリカを南から北へ横断し、その様子を写真、動画、文章などで発信しています。Webやブログはもちろん、新聞やラジオ局も巻き込み、iPadアプリも発売し、彼の旅にいつでもどこからでもアクセスできるように工夫されています。数ユーロからのクラウドファンディングも行ない、多くの参加者が自分たちもプロジェクトの一員であるという一体感とともに彼の活動を見守っています。そして、従来の写真家の発表方法である写真集や展示にも力を入れているので、実にさまざまな形式で彼の作品を見ることができるのです。

2011年にスタートしたTimeのLightBox^{*6}という写真プログラムも、写真と動画の併用、写真家に記事を執筆させるなどの試みで高い注目を集めています。

動画も手がける写真家が、映像の制作スタッフと協働して作品をつくることも増えてきました。たとえば、動画では音は重要な要素ですが、専門知識がないと非常に難しい部分でもあります。映画やテレビ番組を制作してきたスタッフはあらゆるノウハウを持っています。もともと、問題意識や興味は同じケースも多いので、親和性はあるのです。今は、1台のカメラで写真も映像も撮ることができるようになりました。テクノロジーや時代の変化が、カテゴリーを越えたコラボレーションを生み出すというのは興味深い状況だと思います。

これからの写真

——写真のプレゼンテーションのしかたについて、なにか変化を感じることはありますか？

私たちの美術館も、「これからの美術館はどうあるべきか?」「どうあることができるのか?」よく議論をします。10年前と比べると、いまの若い世代のイメージとの関わりかたは大きく変わってきています。従来のように、ただ作品とテキストが並んでいる美術館は、退屈だと思われるかもしれません。変わるの、つくり手だけではなく鑑賞者も同じなのです。

写真の展示方法も変化してきました。ティルマンス以降の傾向と言えると思うのですが、1枚の写真をひとつの額に入れて一列に並べて展示をするという方法を好む若い写真家はすいぶん少なくなってきました。たとえば、いま最も注目すべき写真家のひとり、オランダの出身のアヌーク・クルソフ^{*7}は、写真を貼った立体や糸で吊るした印画



紙などでさまざまなユニークなインスタレーションを展開しています。ビデオやパフォーマンスという形態の作品もありますが、彼女の基点はいつでも「写真」への問いなのです。

混沌とした時代だと思います。インターネット上に写真があふれかえり、「写真とはなにか?」という問いに明確に答えられる人は誰もいません。そもそも、定義が必要かどうかともわかりません。自分で「写真」だと思えばそれでよいのです。

——いま活躍している写真家と写真家を目指す人に対してメッセージをお願いします。

いまの時代、写真家になるのは簡単なことではありません。これまでに多くの写真家が、すばらしい作品を残してきました。彼らの後に一体どのような作品をつくればよいのだろうと考えると、正直なところ、私自身は写真家にはなりたいたとは思いません(笑)。新しい作品をつくり出すのは、本当に大変なことです。

それに、マーケットの状況もあります。みんながいつでも新しいものを欲しがるというシステムのなかで、「15分間は世界的な有名人名」になれても、消えていく人は少なくない。ある作品で、1冊の写真で成功して、その後、名前を聞かなくなってしまうことはよくあります。

これまで数多くの若手の写真家と仕事をしてきました。明るい、無口、アグレッシブ—いろいろなタイプに出会いましたが、「没頭」できる人に強みを感じます。制作に集中できる人、そして、制作を続けることができる人が生き残っていくように思います。私は、強い考えを持つ写真家に惹かれます。「なぜ写真を撮るのか」「どのように世界を見るのか」ということに意識的である写真家です。

若い写真家には、まずできるだけ多くの展覧会と写真集を見ることを勧めています。自分の写真を俯瞰して、どのような方向性に行けばよいのかというヒントがそこにあるからです。そして、写真家、キュレーター、批評家に作品を見せる、話すことも有効な方法だと思います。他人に、どのように自分の作品が見えているのかを知ることは重要です。若い写真家は、自分の作品を自分が見ているように他人が見ていると思いがちですが、そうではないことが多いのです。オープンに対話を重ねることで作品が発展していくケースはよくあります。ですが、自分の心の声を聞くことも忘れないでください。自分がなにに一番心を動かされるのか、なにが一番興味があるのか、それは自分にはわかりません。この部分は、他人にとってどうなのかは関係ありません。矛盾しているようにも思えますが、このふたつのことは、共にとても大切なことなのです。(談)



★5

★1 当時、日本ではあまり知られていなかった、オランダの写真と映像表現の最前線の動向を大々的に紹介したグループ展。すでに欧米では注目を集めていたリネケ・ダイクストラから、後にベニス・ビエンナーレのオランダ館代表となったフィオナ・タンやアールナウト・ミックなど気鋭の映像作家が出品。

★2 ほかに、浅田 暢夫、伊島 薫、市川 美幸、齋木 克裕、清野 賀子、若木 信吾が参加した。

★3 Martin Kollar : 1971年チェコ・スロヴァキア(現スロヴァキア)生まれ。1枚の写真の強さとシークエンスの妙で視覚言語としての写真の可能性に迫る。『Field Trip』(2014年、MACK)を発行し、ライカ・オスカー・バルナック賞(2014年)、第一回エリゼ賞(2015年)を受賞するなど、近年ますます評価が高まっている。
www.martinkollar.com

★4 写真家による共同組織。編集者、批評家、キュレーターが参加する場合もある。

★5 Kadir van Lohuizen : 1963年生まれ。80年代後半より、主にアフリカなどの武力抗争の取材を行ってきた。「Via PanAm」(www.viapanam.org)は2011年にスタートし、ティエラ・デル・フエゴ(チリ)からアラスカまでの約40,000Kmをパンアメリカンハイウェイで縦断したプロジェクト。写真集も発行されている。
ydocfoundation.org/viapanam

★6 TIMEの写真部による写真ブログ。ジャーナリズムからアートまで幅広い写真を扱う。time.com/lightbox

★7 Anouk Kruithof : 1981年生まれ。20代の頃から注目を集め、ICP(ニューヨーク)のインフィニティ・アワードなど各賞を受賞。現在、ニューヨーク在住。「Ocean of Images: New Photography 2015」(MOMA)に選出されるなど、ますます活躍の場を広げている。
www.anoukkruihof.nl

(フリッツ・ヒールズベルフ)
1959年オランダ・ハーグ生まれ。
ライデン大学にて芸術史を研究し、現代アート、建築、映画、写真を専門とする。2006年から2010年までエラスムス大学の客員教授として、ドキュメンタリー写真の理論について講義を行なう。現在はロッテルダムで、オランダ国立写真美術館のキュレーターとPiet Zwart Instituteの客員講師を務める。執筆活動も広く行っており、『Dutch Photobook』(2012年、Aperture)を共著で出版した。2013年、第13回Gjon Mili展(コンボ国立アートギャラリー)のゲストキュレーター。2015年には、1990年からのヨーロッパのポートレートをテーマにした大規模な写真展「Faces Now」を企画し、ブリュッセルのBOZARとテサロニキ写真美術館に巡回した。

清水 穰

Minoru Shimizu

2011年から写真新世紀の審査員を務める清水 穰氏。数多く寄せられる応募作品の中から新たな作家を選出、グランプリ誕生の瞬間に立ち会われてきた氏に、写真新世紀の新たな25年に向けての期待と注目する次世代の作家についてお話をうかがうとともに、応募者たちへアドバイスをいただいた。

入選する／しないを分ける ラインはどこにあるのか

— 25周年を記念したイベント「写真の未来は僕らがつくる!」ではポートフォリオレビューのレビュアーとしても登場していただきました。審査員とレビュアー、それぞれの立場から作品をご覧になられていかがでしたか?

どちらの場合も、ポートフォリオを見ていて思ったことがあります。写真を選んだり編集したりすることは、写真を撮る才能と同じくらい重要で、作家志望ならばそれをはっきり意識したほうがいい。

世の作家と呼ばれる人のなかには「天然」や「野性」で売っている人もいますが、誰でも例外なく野心的であり、プロとしての計算があります。“計算がある”とは計算を見せないようにする計算のことです。それとは反対に、僕が2010年から審査員に加わる以前の、最後の10年くらいの写真新世紀は、審査員の側の「天然」「野性」好みを計算して読み切った応募者が受賞するといった傾向が見えていました。それをキャンノンが刷新すると聞いたときには、まあ頃合いだろうと思ったことを思い出します。

ただ、最初に審査員の話をしていただいたときはびっくりしましたね。東京に住んでいるわけでもないし、よく清水を審査員にしようと思ったなど。そのころ主流になっていた「私のあるがままの日常」の写真を選ぶつもりは端からなかったから、写真新世紀の審査基準にある種の切斷が生じてしまいますよ、と。でも「それでもいい」ということなので引き受けて、数年間いろんな作品を見てきました。少しずつですが、ワンパターンな「あるがまま」写真ばかりではなく、批評的な作品も増えてきたように思います。ただ、批評的とは、写真史の知識のことではないし、難しい写真論を松葉杖にしたようなものではありません。正直、知識や理論は、ある写真のおもしろさを人に説明しなければならぬときに、簡単だから(それで説明だと見なしてもらえから)持ち出すという程度のものです。映画好きの人には通じる映画、お笑い好きの人には通じる笑いというのと同じように、それは写真好き(写真家好きや、被写体好きじゃなく)の人なら誰にでも通じる写真だと言えば、直観的すぎるでしょうか。

— 多くの応募作品があるなか、入選作を決めていくのは困難が伴うだろうと想像します。佳作以上に入選する作品とそれ以外を、分かっラインはどこにあると思われませんか? 気をつけるべき点があるのかどうかお話しただけなideしうか?

応募者はそれぞれ一所懸命に、真摯に作品をつくっているでしょうし、それは疑いなくそうだろうと思います。が、その真摯な応募作が何百と集まったとき、互いに恐ろしいほど似ていたりする。少し前にネオコンボラの作品が受けた、と。すると、あっという間にそれらしい作品が増える。インクジェットの彩度を活かした、水色やグリーンの差し色の綺麗な、凝った構図の日常写真ですね。またある時期は、作者の祖父母の死を扱ったものがやたら多かったり、「日常のなかに現われた小さな死」というわけで、道端で死んでいる小動物を撮った写真がやたら目に付いたり。それでは「よくあるね」のひと言で終わってしまう。ユニクロの服みたいにとってもよくできているけど、結果として画一的で被っているわけです。

佳作以上には選ばれる人は、たとえありがちなものを撮っていたとしても(正方形構図のポートレートとか)、そこにエクストラななにかがあるか、またはほかの人のしているようにはしていません。いかに古臭く聞こえようと、とどのつまりはオリジナリティ。その一点だけで評価されて選ばれた人はたくさんいますよ。人と一緒のことをしない、それだけで、たくさんのお応募作から頭ひとつ抜け出ることができる。そうして抜け出て目立つ頭だけを、僕らは審査するわけです。

では、佳作として入選した作品と、さらにその先の優秀賞やグランプリ作品との差はどこにあるか。自分が選んだ作者作品についてならその相違を言うことはできますが、会場ではほかの審査員が選んだものと一緒に並んだものを見ていくと、一般的な写真の世界で、互いに作品としての質的な差はないと言っていい。だから佳作以上を獲得した人は、あとは野心とガッツで作品をつくり続けてください。写真新世紀25年を振り返ってみても、受賞後に活躍している写真家には、グランプリ受賞者もいれば、佳作から頭角を現した人もたくさんいますよね。数年前から京都のeNartsというギャラリーで年1回企画を任されていて、そこで写真新世紀でデビューした才能をピックアップして紹介しています。^{★1}

よりよい作品をつくるために

— 応募を目指して作品をつくるうえで、見たり読んだり、写真を学ぶべきよい写真集や本などはありますか?

批評家の文章を読むのもいいのですが、それより薦めたいのは、過去の写真作品を見ること。たとえばウォーカー・エヴァンズは、ストリート写真の大家のように思われていますが、じつは「トリミングの鬼」と呼びたいほど、撮ったあとの見せかたを考えている。

アウグスト・ザンダーだって、同時代の人物を標本写真にしたとされていますが、個々の標本のために画角や光が練られすぎたあまり、



★2 いくしゅん/インクジェットプリント



★3 中島 大輔「blind」より/Light jet print/2015



★4 安村 崇「《日常らしさ》ショートケーキ」2002

結局ザンダーの意図(階級・職業による人間のアイデンティフィケーション)を、その写真が裏切っているところがおもしろい。

過去の写真家たちは馬鹿じゃない、ってことで、図書館で片端から内外の写真家の写真集をめくってください。

— 作品を批評的に見ていくことが、制作の大きな足しにはなりますか？

制作の足しにはならないでしょうが、自分の写真を見る力を伸ばすことにはなるでしょう。ただ、先ほども言いましたが、それで頭でっかちの作品をつくるようではまだまだです。

たとえば、社会学のゼミのレポートみたいな「解説」がないと作品の意味や意図がわからない、そんなものはコンセプトじゃありません。キャプションやインスタレーションなど、画像以外のいろいろな手法はいくらでもあるわけで、作品全体として自立した力をもっていなければ、

— 次代の写真家に向けて、期待する作品とはどんなものでしょうか。

これは写真家だけの問題ではなくて、見る側の問題でもあるのですが、写真を批評的に見るというのは、写真をもっと多様に受容することです。たとえば、「お笑い」のジャンルなら、多くの日本人がそういう受容のスキルを持っている。かつてM1グランプリ決勝において、選り抜かれた芸人が限られた時間内でネタを早口で喋りまくっているところへ、恐ろしいほど間延びした沈黙をもちこんで笑いを取ったスリムクラブの反則プレイを視聴者は受容できた、そういうスキルが写真界にも欲しいものです。

いくしゅん^{★2}や中島 大輔^{★3}のように、端的に天分を発揮する写真家もいますが、2000年代のネオコンポラ写真は、70年代コンポラ写真の途絶えた系譜を21世紀に継ぐものとして、まずは写真についての写真です。安村 崇^{★4}の写真は、スティーグリッツを知っていればもっとおもしろく見られますし(その逆もまた真)、山本 渉^{★5}や武田



★4 山本 渉「線を引く No.14」(2011年)
© Wataru Yamamoto, Courtesy of Yumiko Chiba Associates

陽介^{★6}の写真は、写真の原理や技術を反則的にズラして使うところから発想されている。

写真受容の多様化、と言いましたが、その反対の画一的な受容とは何かと言えば、写真家のお言葉、被写体の物語、画像エフェクトの三位一体でしょうか、無敵ですね(笑)。しかもあらゆる写真は、写真家と被写体とエフェクトに依存しています。ただ、三位一体になるためには、三者がかなり単純でないといけない。そうすると、結果としてあざとい計算が見えてしまうわけです。写真家も、被写体も、エフェクトも、本来複雑で收拾の付くようなものではありませんし、写真史や美術史、数多の画像イメージとのさらに複雑な関係におかれています。

期待する作品はと聞かれたら、未知のデジタル表現が見たいと答えますね。目下の段階では、デジタル技術を通じて、歴史のなかで形成されてきた写真の基本概念(レイヤー、ピント、決定的瞬間、感光……)を問い直すような作品が目立ちます。加納俊輔とか滝沢広、迫鉄平とか。でもおそらく、デジタル写真は、アナログ写真とは別の

ルートで、写真とは何でありうるか、を明らかにしつつあるのではないのでしょうか。その状況をどうかたちで作品にするか。どれほど大胆なものが出てきても、こちらとしては、なんとかついていくつもりですよ。

★1 2016年度の企画展(5月7日から予定)には麦生田 兵吾(2014年度佳作)と迫 鉄平(2015年度グランプリ)をピックアップして紹介します。

(しみず・みのる)
1995年頃より現代美術・写真、現代音楽を中心に批評活動を展開している。1995年『不可視性としての写真:ジェイムズ・ウェリング』(1995年 Wako Works of Art)で第1回重森弘淹写真評論賞受賞。主な著書に『写真と日々』(2006年 現代思潮新社)、『日々は写真』(2009年 現代思潮新社)、『ブルラモン』(2011年 現代思潮新社)などがある。現在、同志社大学グローバル地域文化学部で教授を務める。



★5 武田 陽介「122445」2014
© Yosuke Takeda / Courtesy Of Taka Ishii Gallery

2015年度写真新世紀(第38回公募)審査員

荒木 夏実

Natsumi Araki

写真、映像、絵画、彫刻、アニメーションなどの多彩な表現にチャレンジする現代美術アーティストたちをセレクトし、展覧会をパワフルに企画する森美術館キュレーター荒木 夏実氏。2015年「ゴー・ビトゥーンズ展：こどもを通して見る世界」では、世界各地での見過ごされがちな複雑な問題や個別の事実を明快なアプローチで浮かび上がらせました。

今回、写真新世紀第38回公募審査員にお迎えし、グランプリ選出審査をはじめ、25周年記念イベント「写真の未来は僕らがつくる!」のトークショー、ポートフォリオレビューなど一連の活動に参加いただきました。

キュレーターを志したご自身のお話からはじまり、応募者、受賞者のみなさんへ作家となるためのアドバイスを辛辣なご意見を交えてインタビュー。

キュレーターを志して

——キュレーターになられた経緯についてお話をいただけますか？

社会に出た一番最初の仕事は外資系の銀行でしたが、オフィスワークはまったく自分に合わないということを入社1ヶ月目くらいで悟りました。長く続けられる仕事に出会わなければ私は働けない。それからロータリーの奨学金がとれてイギリスへ留学しミュージアム・スタディーズという、いわゆる博物館学を専攻しました。手に職をつけようと思ったんです。もともと文学部の英文科出身だったので、じっくりと美術などを勉強したいという気持ちがありました。でも、それ以上に職業訓練的な道を進もうと1年間のマスターコースを選びました。

帰国後は美術に関われれば仕事はなんでもいいと思いながら、コマースギャラリーを含め仕事を探し、美術館の募集を受けてこの道に入りました。森美術館は2003年から勤めて13年目になります。

——現代美術に興味を持たれたきっかけは？

イギリス留学中、ミュージアムという場所は、サンクチュアリのような安全地帯に感じました。異邦人がいてもおかしくないし、誰にも干渉されない。併設されているカフェではのんびりできるし、アートも好きなだけ見られるという、居心地のよい体験をしました。

大学のゼミでは19世紀の英文学を学び、ラファエロ前派をはじめ、文学者とアーティストの恋愛や人間関係などいろいろと関わり合いがあることを知っていたので文学からアートに興味をもっていったように思います。

展覧会の制作プロセス、そのおもしろさについて

——展覧会を企画するプロセスを教えてくださいませんか？

とにかく作品を重視し、いろいろな場所で作品を見ていきます。そのうちにおもしろいと思う作品が溜まり、自分の中にある問題意識とつ

なげていきます。

それらは社会の状況やニーズと呼応するような感覚を持つことがあります。社会で起こるさまざまな問題を同時代に生きるアーティストも同じように注目し、制作に取り組んでいる。自分のなかでモヤモヤとしていたものと興味をもっていた作品が社会の流れとピタッと合った感じがしてくるとき、展覧会をつくっていてもおもしろいと感じます。

——森美術館の企画はどのようなところに気を配られていらっしゃいますか？

森美術館の来場者は海外からのお客さまも多く、関係者も非常に多くいらっしゃいます。ですから日本人同士でわかり合うような見せかた、やりかたはしません。日本人であれば、その作家を知っているかもしれませんが、まったくその作家を知らなかったり、その作品が語っている文脈、あるいはシェアされていない事件など、さまざまな文化圏から来られる方々にもわかるよう、キャプションやウォール・テキストなどは簡潔にわかりやすく表記するようにしています。

教えられる海外の展覧会、社会事情への興味

——荒木さんが惹かれる作品、展覧会とはどのようなものでしょうか？

意識して見ているわけではないのですが、見入ってしまうのは、その場所場所や地域地域における自治的、歴史的問題が含まれている作品です。それには注目せざるを得ない力があります。

いわゆるTVとかマスメディアが伝えることとは違う視点があり、その地域やあるグループの人たちを浮き彫りにするような作品が多く含まれていて、それらはジャーナリズムでは見落とされていたものだったりします。そういうものに自分はずごく教えられます。

——いま、注目している作家はいらっしゃいますか？



★1 Lim Minouk, Navigation, 2014 イム・ミヌク/ナビゲーションID (2014)

最近注目しているのは、韓国のイム・ミヌク★¹。彼女は政治的、歴史的な問題、それも歴史で語られているような大きな問題ではなく、隠されていた題材を浮き彫りにしてそれらを非常にアーティストックにしかも大胆な方法で表現します。韓国のアーティストはとても問題意識が高く、毎回驚かされます。

そして、フィンランドのエイヤ＝リーサ・アハティラ★²。彼女は本格的な映像作家で、作品のレベルの高さは国際的に評価されています。作品の登場人物はどこか奇妙でボーダーラインにいるように感じられ、作家もかなりの変わり者ではないかと思っていたのですが、本人は心理的にも非常に安定した人でした。自身の鋭い観察力とユニークな解釈によって、深く突き詰めた作品を発表しています。

作品に昇華していく過程で作品と自分との距離をとれるかどうか作家の強さなのかもしれません。

また、菊地 智子さん★³のジャーナリズム性は高く評価しています。ドラッグ・Queenを撮影するために生活を共にするなど逞しい。きちんとした考え、ペースを持って行動し作品をつくられていてとても安定感があります。

自分の生き方を見つけてほしい

——今回、審査会やポートフォリオレビューに参加いただきましたが、どのような印象を持たれましたか？

写真新世紀のポートフォリオレビューの際に、「説明してくれる?」という、「見た通りです」と言う人がいらっしゃいました。「わかる人にわかってもらえればいい」と言った人もいました。

ではなぜポートフォリオレビューに参加したのか? 「この写真だけではわからない、十分な説明にはなっていないですね」というようなコメントに対して、自分を全否定されたように感じてしまう人もいらっしゃいました。そのような反応は残念だと思います。そんなふうに見る人もいるんだということ、それがわかるだけでもラッキーだし、儲けものではないでしょうか。

いいことを言う人しか受け入れられないのは問題ですね。友達や家族は、本人がやっていることをリスペクトしてあげようとしているだけです。作品を見てもらう、いろんな批評にさらされることによって早いうちに方向転換だってできます。自分はこのには向いていないという気付きをもらうこともできる。その批評を撥ねのける力もなく、精神的にまいてしまうくらいだったら、違う道を選ぶべきでしょう。ただただ夢を追いかけているうちにお金も人並みの幸せもなにも掴めず、永遠の少年少女でいるような人が増えていくことが私は嫌なんです。

また、結構な年齢であるのにすごく青臭いことを言っている人もいらっしゃいました。「なぜ画廊に所属しないの?」という、「画廊でひどいことを言われて、それ以来売り込みをしていないんです」「そもそも作品を売る、それで儲けるということに罪悪感を感じます」とのこと。それではあなたはどうか生きて行くの? と疑問に思いました。食べていくためには戦略を考えないと。



★2 EIJA-LIISA AHTILA MARIAN ILMESTYS-THE ANNUNCIATION
3-channel projected HD installation (32 min 10 sec; 16:9; DD5.1) & Copyright Crystal Eye Ltd, Helsinki
Courtesy of Marian Goodman Gallery, New York and Paris / photographer: © Antti Ruusuvoori

批評に耐える作品を作れ!

—「写真新世紀東京展2015」25周年記念イベント「写真の未来は僕らがつくる!」にもご参加いただきましたが、感じられたことは何かありましたか?

開催された榎木野衣さんと須藤絢乃さんのギャラリートークはとても勉強になりました。

日本の作家は批評を受けることに慣れていませんが、榎木さんは徹底して批評していました。これは非常に重要なことです。

たとえばイギリスの学校では批評する、批評に耐える場というものが多くあり、そこで鍛えられます。そこをくぐってきている作家の力は違います。「なんでこれを撮るの? あんたじゃなくてもいいんじゃない?」。それぐらいの批評に耐えてきているから強度が違います。

そういった意味からイギリスで鍛えられた米田知子さん^{★4}の作品は見事だと思います。エスタブリッシュメントに近い存在ではありますが、攻める姿勢があるし、チャレンジし続けていて力のある作品を発表しています。なおかつ日本人じゃない人にもわかる写真です。こういう作品を目指してほしいです。

私は、米田さんのような硬派な作品が大好きです。日本ではやっている作品は、ムードとか勢いのあるようなものが多いですが、エモーションに溺れていない。日本はもっと批評にさらされる場所をつくらなくてはいけないと思っています。

いい作品はひとり歩きしていく

—写真家の写真作品は写真家だけのものではない、と。

「作品は誰のもの?」という問いに対して、私はオーディエンスのものと思っています。それはイギリスのミュージアム・スタディーズでも叩き込まれた考えでもあります。「美術館は誰のもの?」それは、来る人=オーディエンスのものという考えです。

いい作品はひとり歩きするものと思っています。作家はそのうち死ぬわけですから。作家がなにも言わず、誤読されていったとしてもどんどん転がり広がっていく作品が私はおもしろいと思います。いろんな人がさまざまに読み取りをし、意見を重ねていけるという作品がすぐれた作品だと思うんです。

一度出ってしまったらその作品は作家だけのものではないと思っています。なんでこんな扱いをされるんだろうと地団駄を踏んだところで、そのときはすでにキュレーターやオーディエンスのものにもなっていると思っています。作家の考えを伝えることだけが私のミッションではありません。

つくってみたい展覧会

—荒木さんがいま、気に留めていらっしゃるテーマはありますか?



★3 ©Tomoko Kikuchi, 「I and I」 September 2014



★4 from the series Cumulus, Hiroshima Peace Day, 2011
chromogenic print
「積雲」シリーズより「平和記念日・広島」(2011)
発色現像方式印画
© Tomoko Yoneda Courtesy of ShugoArts

「ゴー・ビトゥーンズ」展がきっかけになりましたが、いま社会で問題になっていること、自分自身がモヤモヤしていることに注目して展覧会をつくりたいと思っています。

本展で扱ったのは子供の問題でしたが、子供といっても明るい話ばかりではないし、移民や国際養子縁組の問題など、ゴー・ビトゥーンズという2つの価値観の間(はざま)で揺るがざるをえない、よるべき子供たちをテーマにしました。

それは社会問題であり、日本でも進行形で進んでいます。次世代、多文化のつらい部分ではありますが、メリットもすごくあるし、ポテンシャルもある。そういう両面が社会の問題になっていて、さまざまな人の心のトラウマにもなっている。けれどもそれはひとつの可能性でもあるよね、というように問題に注目していくような展覧会をやりたいですね。

今は、たとえば老人に興味があります。一見ネガティブに見えるような物事を取り上げて、でもそこにはこんな可能性もあるんだという逆転の発想があるようなことを世界で見せていく、そういうことに興味があります。

作家として続けていくために。

——写真家を目指す人たちに向けて、メッセージをお願いします。

今回、初めて写真新世紀の審査に関わりましたが、グランプリ選出審査会は作家たちのプレゼンに重きを置いて、そこがこのコンペのよいところだと思いました。

作品は見た目がすべてであるという考えも根強いので、賛否両論

はあるかもしれませんが、世界的な潮流を見るとこれだけ違う文化圏の人が集まって、そしていろいろな異種をシェアし、なおかつ競争するというアートの状況においてはどれだけきちんと作品の必然性やバックグラウンド、そういうものについて語れるかということが大事であると思うんです。

だから作品の見た目だけではなく、どうしてこれでなくてはいけなかったのかという作家の覚悟やプロセスが伝わるものであったのかというも審査の対象となるのは重要だと思います。

今回プレゼンを聞いていて、まだ分析しきれない感じもあり、極めて表層に留まっている、すごく個人的なことになってしまっているというのは気になりました。

それは日本全体に言えるのかもしれませんが、心理的な分析の欠如や知識の希薄さの影響だと思います。

自分がある問題行動をとってしまったら、ある心理状態になってしまうという傾向には、実は科学的ともいえるパターンがあります。自分だけが特殊なのではなく、案外あたりまえな症状であることは、本を読んだり、たとえばセラピーを受けるだけでもわかるようなレベルがたくさんあると思うんです。

それらはまだ一般には理解されていないし、そういうことを問題として話すことはまだまだタブーな状況があります。ですから受賞者の方たちも相当カミングアウトしてみたいな大胆な気持ちだったと思うのですが、まだまだ全然浅いですね。

作家には自分語りをするのではなく、社会学的、心理学的、病理学的に自分の思いや欲求を分析し、それをとことん理解したうえで、さらにそれを超えられるような作品をつくって欲しいと思っています。個人の物語に留まらないもの、そういう強度を持ったものをつくってもらえたら、それはたぶん作家個人を超えている人々に「この感じ、わかる」というように受け入れられると思うんです。

写真というメディアは難しい。入り込めるからおもしろいという部分もあるし、レンズを通して距離をつくることもできます。そして、その距離を近くにも遠くにもすることが可能です。また他者の視点を使うこともできる。おもしろくて難しいメディアだからこそ、自己分析のできる強い作家の作品を期待してしまいます。

彫刻、絵画を含めさまざまなメディアを取り扱っている作家であっても、写真や映像を用いて表現する作家が増えてきているように感じています。必ずしも写真家、映像作家ということではなく、表現者にとって必然的なメディアになって来ているからこそ今後益々おもしろい作品が出てくるに違いありません。(談)

- ★1 イム・ミンク
さまざまなメディアを用いて、政治と人々の感情を扱う作品で、韓国で最も注目される女性アーティスト。
- ★2 エイヤ=リーサ・アハティラ
美しい映像と写真を用いて、人間の深層心理を探る作品を制作するフィンランドを代表するアーティスト。
- ★3 菊地 智子
北京を拠点に活動している写真家。
1990年代末より欧米メディアで写真を発表しながら映画のスタイル・フォトグラファーなども手がけている。
- ★4 米田 知子
兵庫県生まれ。ロンドン及びヘルシンキ在住の国際的に活躍する気鋭の写真家。過酷な歴史を持つ土地を訪れ、静謐な美しい風景を写し取る手法が注目されている。

(あらし・なつみ)
慶應義塾大学文学部卒業、英国レスター大学ミュージアム・スタディーズ修了。1994年より三鷹市芸術文化振興財団でキュレーターとしての仕事をスタートし、2003年より森美術館キュレーター。2010年より慶應義塾大学非常勤講師。主な展覧会は「ストーリーテーズ:アートが紡ぐ物語」(2005)、「六本木クロッシング2007:未来への脈動」(2007)、「小谷元彦:幽体の視覚」(2010)、「LOVE:アートにみる愛のかたち」(2013)、「ゴー・ビトゥーンズ展:子どもを通して見る世界」(2014)など。ソウル市美術館での「シティ・ネット・アジア2009」では共同キュレーターを務める。「ゴー・ビトゥーンズ展」で第26回倫雅美術奨励賞(美術評論部門)を受賞。

2015年度写真新世紀(第38回公募) 審査員

澤田 知子

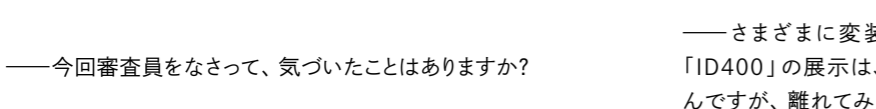
Tomoko Sawada

5年間にわたるニューヨークでの生活を終え、2015年春に帰国後の第一作目にあたる『FACIAL SIGNATURE』を発表した澤田 知子氏。変装したセルフポートレート作品で知られる彼女は、現地でたびたび出身地を間違われた経験から、「人はなにを見て個人を判断しているのか?」と興味を持ち、さまざまな東アジア人に扮した作品の制作を思い立ったそう。

2000年度の写真新世紀で優秀賞を受賞した後、着実に活躍の場を広げ、国際的評価を得てきた澤田氏に、今回初となる写真新世紀審査員を終えた感想と、作品コンセプトやプレゼンテーションを練る重要性についてうかがいました。

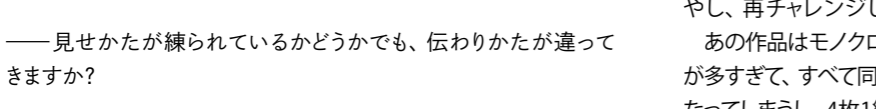


審査を終えて



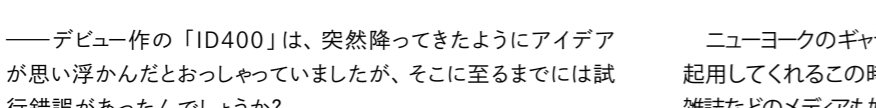
——今回審査員をなさって、気づいたことはありますか？

やはりプリントが大きかったり、写真の点数が多いと、作り手としてのパワーは感じますね。公募展の場はグループ展と一緒に、いかに表現者としてアピールできるかがポイントのひとつだと思うんです。作品だけで本気度は伝わってくるものだし、試しにちょっと出してみただけという場合もよくわかる。作品に愛情があるかないかもすぐにわかるし、そういう作り手の気持ちは驚くほど作品から伝わって来るものなんだとあらためて感じました。



——見せかたが練られているかどうかでも、伝わりかたが違ってきますか？

点数が多ければよいというわけではないところが、難しいところでもあります。自分のプリントを大事に思う気持ちはとてもよくわかりますが、全部使えばいいということではなく、たとえばブックだったら伝えたいコンセプトにあわせて編集することが大事ですね。いくら写真がよくても、情報量が多すぎるせいで伝わらない作品になってしまっている場合も多くて、それはすごく残念だなと思いました。



——デビュー作の「ID400」は、突然降ってきたようにアイデアが思い浮かんだとおっしゃっていましたが、そこに至るまでには試行錯誤があったんでしょうか？

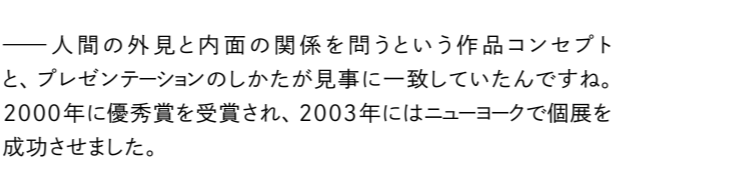
セルフポートレートをつくりたい、写真で作品がつくりたいということははっきりしていたんですが、その先どうしたらいいかわからなくて、半年ほど作品が作れなかったんです。だから、スケッチブックにひたすら学んだこと、考えたことを書きつらねていました。



同じ作品で再チャレンジ

——さまざまに変装した証明写真がおびたしい数で並ぶ「ID400」の展示は、近くで見るとキャラクターの違いが楽しめるんですが、離れてみると数に圧倒されつつも、同一人物であるという統一感が浮き上がってくるおもしろさもあって、圧巻の展示でした。

賞をいただいた前年にも写真新世紀に応募したんですが、そのときは落選したんです。でもコンセプトはおもしろいから制作を続けて量を増やしたほうがいいと、いろんな方からアドバイスをいただいたので、撮影していた自動証明写真機に通い詰めて写真の点数を増やし、再チャレンジしたら入賞することができました。あの作品はモノクロであることも重要で、もしカラーだったら情報が多すぎて、すべて同じ人間が変装しているということがわかりづらくなってしまい、4枚1組の自動証明写真機サイズであることも必須条件でした。



——人間の外見と内面の関係を問うという作品コンセプトと、プレゼンテーションのしかたが見事に一致していたんですね。2000年に優秀賞を受賞され、2003年にはニューヨークで個展を成功させました。

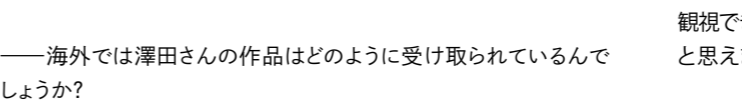
澤田 知子氏のポートレート作品。

ニューヨークのギャラリーは夏が閑散期で、新人作家をお試しで起用してくれるこの時期に私の「ID400」も展示してくれたんです。雑誌などのメディアも好意的に取り上げてくださって、とてもラッキーでした。ギャラリーの方が、『トモコの作品の前に立つとみんな口がこんな風に上がるのよ』って、人差指で口角を上げながら教えてくれたんです。見てくださった方が笑顔になるという意味だったんですけど、それがとても嬉しくて印象に残っています。



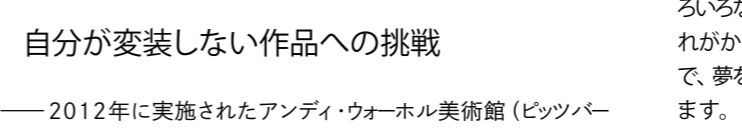
——2008年からは文化庁在外派遣研修員として、しばらく活動のベースをニューヨークに移されていましたが、環境の違いはありましたか？

日本だとアーティストという職業はちょっと特殊なイメージがありますけど、欧米はより一般的な存在で、なおかつとても尊重されていると感じましたね。

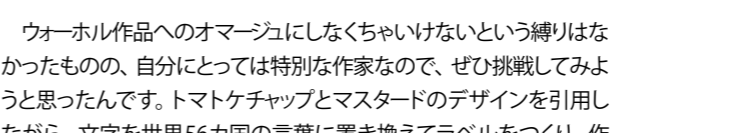


——海外では澤田さんの作品はどのように受け取られているんでしょうか？

フェミニズムの文脈で語られることもありますし、日本のサブカル研究でもよく論文に引用されます。コギャルに扮した「cover」やキャバクラの指名用写真をモチーフにした「MASQUERADE」、女子校の集合写真を作品にした「School Days」などは、参照図版にしたいとよく依頼がきます。作品として発表したら、その後どう受け止められるかはすべて見る側にゆだねられるわけですが、こんな風にいるんな文脈で解釈されるのは、とてもおもしろいと思います。



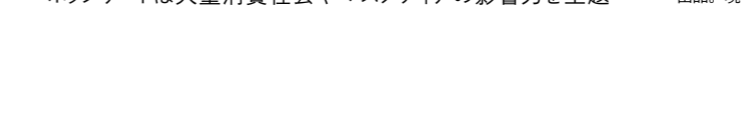
自分が変装しない作品への挑戦



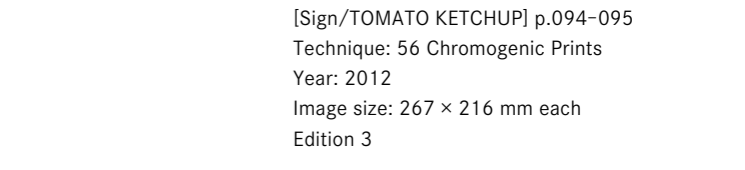
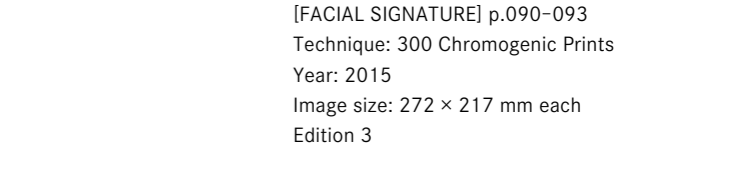
——2012年に実施されたアンディ・ウォーホル美術館（ピッツバーグ）のアートインレジデンスでは、ハインツ社とのコラボレーションで製品のパッケージをモチーフにした作品「Sign」を制作されました。

ウォーホル作品へのオマージュにしくちやいけないう縛りはなかったものの、自分にとっては特別な作家なので、ぜひ挑戦してみようと思ったんです。トマトケチャップとマスタードのデザインを引用しながら、文字を世界56カ国の言葉に置き換えてラベルをつくり、作品にしたのですが、ウォーホルが「キャンベルのスープ缶」を展示したとき、額と額との間は2インチだったと知って、「Sign」の展示でも同じ方法をとらせてもらったんです。

自身で変装するのは違う方法で制作した作品を発表したのはこれが初めてだったんですが、この経験から自分がやってきたことを客観的に見ることができるようになりました。私は人間や社会に対して感じることを、セルフポートレートだけでなく、ポップアートやタイポロジーの手法も使って表現してきたんだなって。

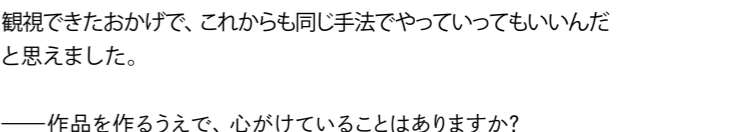


——ポップアートは大量消費社会やマスメディアの影響力を主題



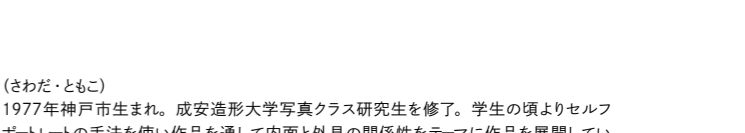
にした表現で、タイポロジーは同じ種類の被写体を複数撮影して、写真を併置することで、差異や同一性を浮かび上がらせる写真表現のことですね？

実は海外滞在中にすごいスランプを経験したんです。新しいアイデアが頭にあっても、評価されることが怖くて、これまでと同じように作品を制作して発表する自信が持てなかった。でも、自分の仕事を客観視できたおかげで、これからも同じ手法でやっていってもいいんだと思えました。

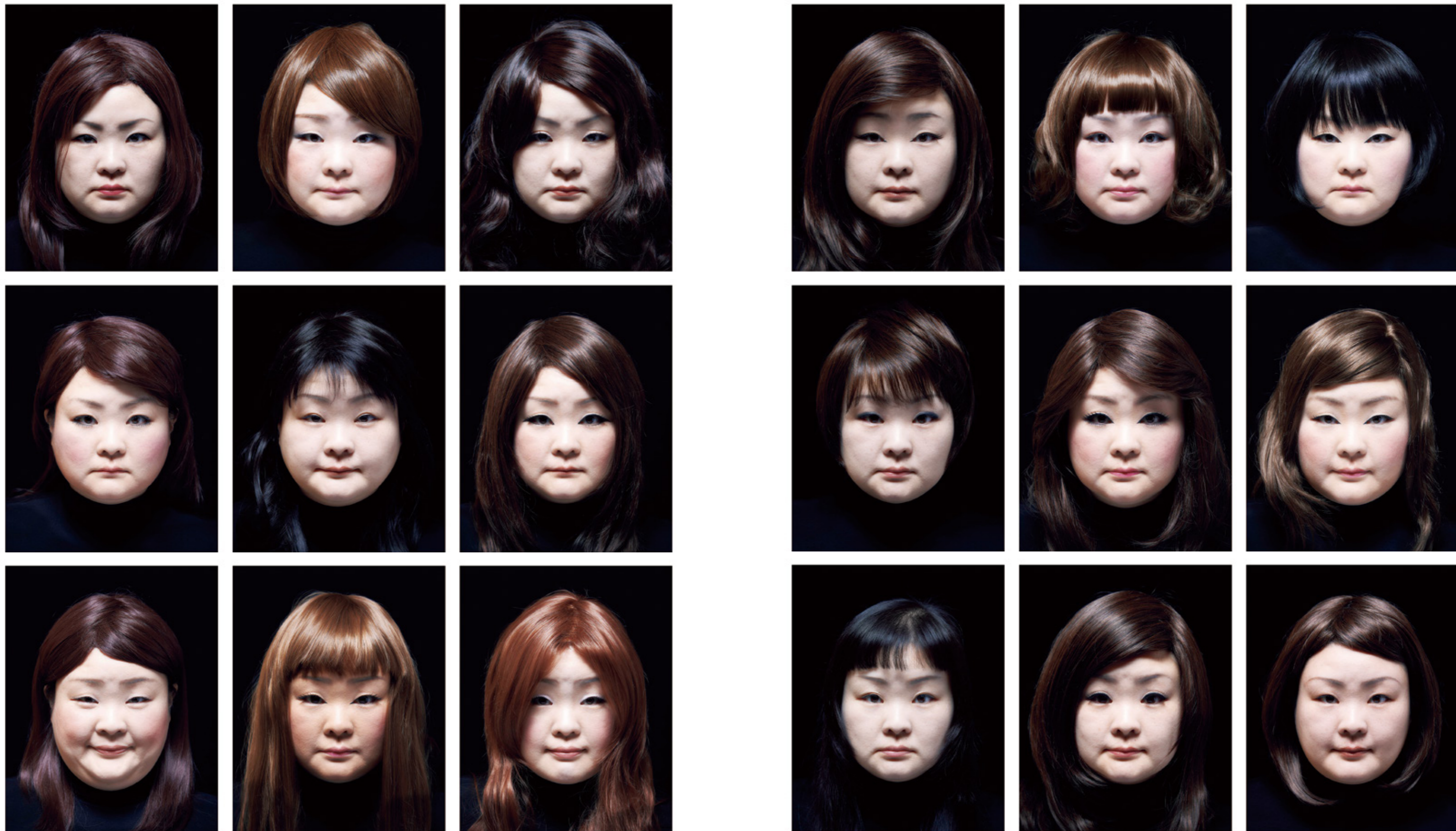


——作品を作るうえで、心がけていることはありますか？

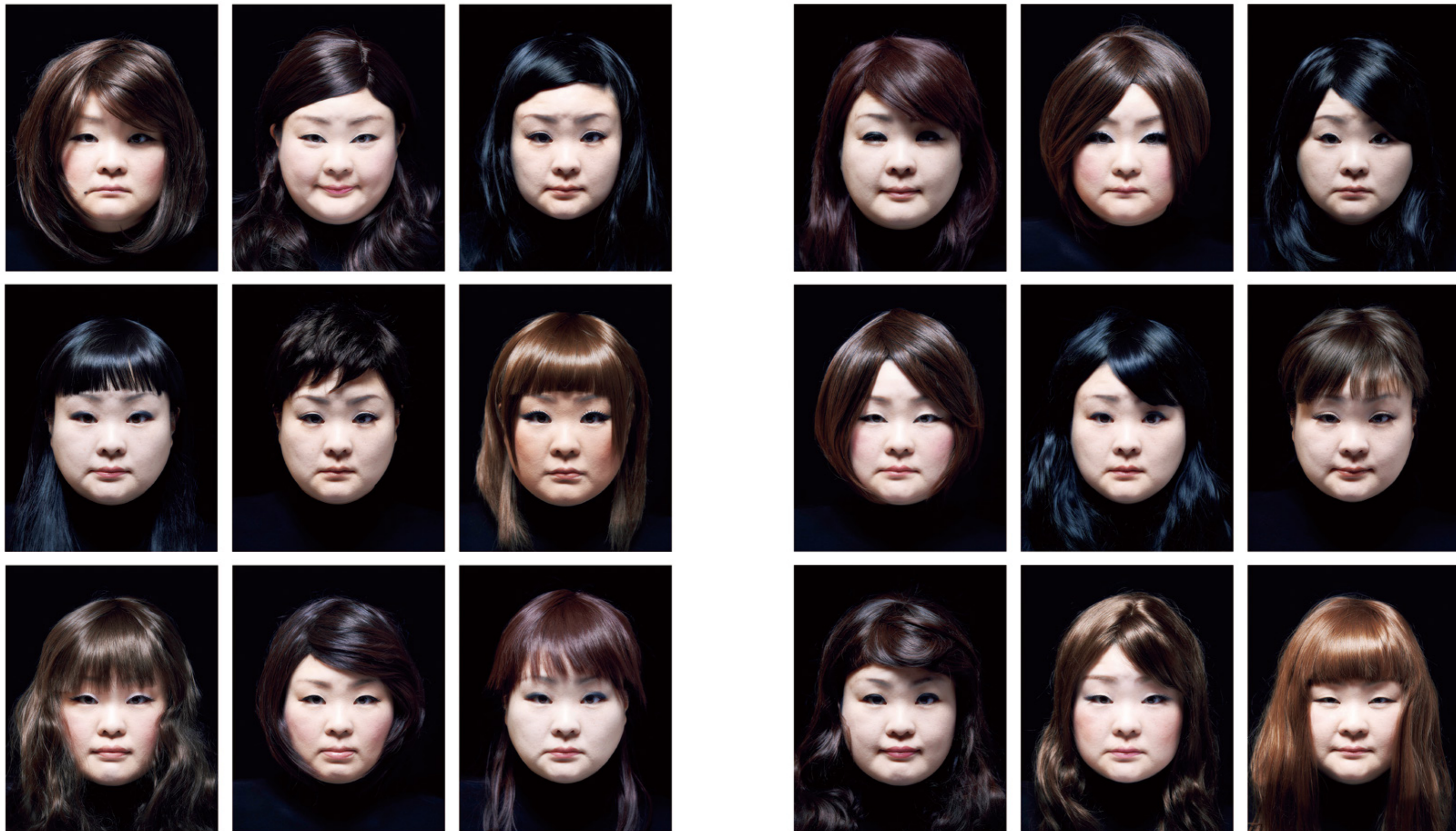
学生時代、椿 昇先生に教わっていたのですが、社会の問題について本当のことを言えるのはアーティストだけだけど、ユーモアをもって表現するよう意識していると、そんなふうにおっしゃっていたのがとても印象に残っています。私も、自分自身が制作を楽しみ、見てくださる方にも楽しんでもらえたら嬉しいなと思っています。写真新世紀で賞を受賞する前、私の夢はアーティストになって、いろいろなところに行き、たくさんの人と出会って交流することでした。それがなかった今、この仕事でしか得られない喜びを実感しているので、夢を持っている方はあきらめずにぜひチャレンジしてほしいと思います。



(さわだ・ともこ) 1977年神戸市生まれ。成安造形大学写真クラス研究生を修了。学生の頃よりセルフポートレートの手法を使い作品を通して内面と外見の関係性をテーマに作品を展開している。デビュー作『ID400』が2000年度キャンノン写真新世紀特別賞、2004年に木村伊兵衛写真賞、NY国際写真センターThe Twentieth Annual ICP Infinity Award for Young Photographerなど受賞多数。世界中で展覧会を開催。出版物は、写真集の他に絵本などもある。2015年度、春には青幻舎より写真集を2冊出版、バリの出版社からも写真集が出版。東京ではMEMにて3月に新作展を開催、ニューヨーク、ロサンゼルスなどでグループ展に出品。現在、成安造形大学客員教授、関西学院大学で非常勤講師を務める。



FACIAL SIGNATURE (detail), 2015 ©Tomoko Sawada, courtesy MEM



FACIAL SIGNATURE (detail), 2015 ©Tomoko Sawada, courtesy MEM



Sign/TOMATO KETCHUP (detail), 2012 ©Tomoko Sawada, courtesy MEM

2015年度写真新世紀(第38回公募)審査員

野口 里佳

Rika Noguchi

写真家として国内外で活躍する野口 里佳氏は、1996年度写真新世紀でグランプリを受賞してから今年で20年目となります。この間、デジタル技術の進歩やインターネットの拡大など、表現をとりまく環境が激変する中、ブレることなく追求してきたのは「写真とはなにか?」ということでした。

2008年度に続き、本年度の写真新世紀で2度目の審査員を務めた野口氏に、表現に向き合う姿勢や写真に対する思いをうかがいました。

「父のアルバム」2014

見たことがないものを見てみたい。

——今回、審査委員の立場で応募作品をご覧になった感想は？

純粋に楽しかったです。作品との出会いはワクワクしますね。

——審査するうえで野口さんなりの基準はあるのでしょうか？

どうしてもそれをつくらざるを得なかったというつくり手の切実な思いが出ている作品を見つけたいですね。たとえ不器用でも、その人にしか表現できないもの、これまでに見たことがないものが見てみたい。今回も、新しい答えを提案してくれる作品があるのではないかと思います。作品を拝見しました。

このカメラでどんな扉が開くのか？

——1996年に写真新世紀グランプリを受賞した「潜ル人」では潜水夫を被写体にしていましたが、「ロケットの丘」(2004年)や「飛ぶ夢を見た」(2005年)では種子島まで宇宙ロケットを撮りに行かれていました。

機械とか重機になぜかすごく惹かれるんです。よく理解しているとか得意な分野だというわけではないんですけど……興味の対象が小学生の男の子みたいですね。私の作品は、まるで夏休みの自由研究をずっとやっているように見えているんじゃないかと思います(笑)。

——かなりの行動派というイメージもあります。「フジャマ」(1997年)では富士山に登り、「マラブ」(2005年)では、動物園で見たマラブという鳥を、自然のなかで探すためアフリカまでバックパッカー旅行に行かれました。また、ラクダを撮った「砂漠で」(2008年)では、タイトル通りアラブ首長国連邦の砂漠地帯が撮影場所でした。

なんでこんな苦しいことをやっているんだろう？ と自分でもよく思うんですけど、これだと決めたら真っすぐ進んでしまう性分というか、そういう風にしか作品が作れないんですよね。

——写真新世紀・東京展と同時期に開催された「夜の星へ」展(キャノンギャラリーS/2015年12月17日～2016年2月8日)では、現

在活動の拠点とされているベルリンで撮影した最新作を発表されました。二階建てバスから夜の街を写されていますが、きっかけはなにかあるんですか？

雑誌の企画で乗り物から写真を撮ってほしいという依頼をいただき、自分が普段スタジオに通うために乗っているバスから撮ることにしたんです。

——街灯や車の光が美しく、構図ともあいまって独特の浮遊感が印象的でした。

縦位置の構図も含めて、撮影にハーフサイズのカメラを使ったことが表現の決め手になったと思います。

——「夜の星へ」展の出展作は、インクジェットで出力されたんですね？

今のインクジェット・プリントは驚くほど質が高く、特に黒の描写がすばらしいので、このシリーズに合うに違いないと思っていました。

——作品によって使用するカメラや機材は変えているんですか？

使い分けるといっても、今の自分と気の合うカメラというのはありませんね。ハーフサイズのカメラは小さいコンパクトだから、常に持っていて身近なものを撮ることが多くなりました。あと、一眼レフかレンジファインダーかでも大きく影響されるんですが、今は一眼レフが自分に合っている気がしています。

——制作では、カメラや機材が先に決まることあるのでしょうか？

もちろん言葉や本からインスピレーションを受けることもありますが、カメラとの出会いも私にとってはとても大事なきっかけです。カメラが乗り物みたいな感覚と言ったらいいかもしれませんが。このカメラでなにが撮れるんだろう？ どんな扉が開くんだろう？ と、そんな期待を持ちながらカメラを手にはしているし、そういう経験をずっとカメラにさせてもらってきたと思っています。

——デジタルの技術が拡大して、写真は旧メディアになってしまっ

たとも言われていますが？

手に入る印画紙の種類が少なくなり、値段も高くなってしまって困ったという状況はあるけど、過度期だからこそそのメリットもある。もうちよとしたらデジタルしかない時代になるかもしれないけど、でも今はまだぎりぎりアナログとデジタルの両方があるわけです。つまり、どちらも使うことができるんですね。写真家として、なんと幸せで稀有な時代に遭遇しているんだろうと思っています。

写真家として、これからが本番

——昨年発表された「父のアルバム／不思議な力」の制作方法は少し意外でした。亡くなられたお父さまが遺されたネガをプリントし、遺品のカメラで日常生活を撮影されましたね？

一昨年夏に父が亡くなったあと、遺品の中にあった父のネガを暗室でプリントしはじめたのですが、はじめたときはまだ作品にするつもりではなかったんです。その後、上田義彦さんが運営されているギャラリー916から個展開催のお話をいただいたんですが、上田さんもご自身のご家族を撮って本をつくられている写真家の方ですし、この機会にしかできないことはなにかと考えたときに、家族をテーマにした作品を制作することが必然であるように思えたいです。

さらにそこから、自分が新しい作品を作るとはどういうことだろうと突き詰めていったら、父の残したカメラで自分の日常を撮るといった形の制作方法になりました。

「父のアルバム」は私にとつての私写真です。もうひとつの作品「不思議な力」を同時に発表したことでいい形に結晶したと思っています。

——自分以外の人間、しかもお父さまが撮られたネガを焼くという行為は、どんなものだったのでしょうか？

父が撮った家族写真には、20年前に亡くなった母や、弟と私も写っています。私もその場にいたけど、私自身が見ていた風景とは違う。人の視線を追っていくということは自分が撮った写真をプリントするのは全然違う、不思議な体験でした。父の視線を暗室のなかで追っていくのはすごく幸せだったし、今までの自分がやってきたこととはずいぶん違う体験だったから、写真とはなにかということを改めて考えるととてもいい機会になりました。

——つまり、ターニングポイントになったとも言えるのでしょうか？

「父のアルバム／不思議な力」では、いつも一方向からしか見ていなかった“写真”というものを、裏側から見たと思えたいです。だからこそ、やらなくてはならないことがたくさん残っていると感じるし、写真家として、これからのいいよ本番だという気持ちになりましたね。

——これまでの活動は、本番のためのプロローグだった？

予行練習というか、準備体操というか……それにしては長すぎるだろう、と突っ込まれそうではあるんですけど(笑)。写真新世紀でグランプリをいただいてから20年がたち、自分の年齢も40代に入って、ここからあとどれだけのことができるかが、写真家としての今とてもいい時期だと思っています。写真にしかできないことはなんだろう？ と、自分なりに常に考えて作品をつくってきたつもりですが、明日の自分に期待して、さらに新しい世界に向かっていきたいと思います。

(のぐち・りか)
1971年埼玉県生まれ。1994年日本大学芸術学部写真学科卒業。大学在学中より写真作品の制作をはじめ、以来国内外で展覧会を中心に活動。1996年に写真新世紀年間グランプリを受賞。日本での主な個展に「予感」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川、2001)、「飛ぶ夢を見た」(原美術館、東京、2004)、「光は未来に届く」(IZU PHOTO MUSEUM、2011-2012)、「父のアルバム/ 不思議な力」(ギャラリー916、東京、2014)、「夜の星へ」(キャノンギャラリー?S、東京、2015)などがある。国立近代美術館(東京)、グッゲンハイム美術館(ニューヨーク)、ポンビッドセンター(パリ)などに作品が収蔵されている。2004年よりベルリン在住。



「不思議な力 #4」2014



「不思議な力 #1」2014



「夜の星へ #42」2014



「夜の星へ #39」2014



2015年度写真新世紀(第38回公募) 審査員

さわ ひらき

Hiraki Sawa

イギリス・ロンドンを拠点に制作活動を展開している美術家・さわ ひらき氏は、『dwelling』(2002)で若手作家の登竜門と言われるイースト・インターナショナル・コンペティションでグランプリを受賞後、映像作品を精力的に発表。世界各国で開催される数々の国際美術展に出展するなど独自の動画インスタレーションを発表し、多くのファンを魅了しています。

写真新世紀第38回公募では、新たな取り組みとなったデジタルデータ（静止画・動画）の公募審査に加わり、映像表現者という立場から、支持体にしっかりと向き合いながら、慎重に賞を選出。審査を通して感じられた写真・映像表現の新たなる可能性について、そして自身のモノづくりの原点を学生時代へとさかのぼり、広くお話いただきました。

写真新世紀の審査を終えて

——写真コンテストの審査員は初めてとのことですが、写真新世紀の公募審査はいかがでしたか？

プリント（紙焼き）がインスタレーションになったり、また、動画は実験映像のようなものに拡がっていくのもよいと思いました。フォトブックが雑誌になったり、ハードカバーの精巧なものになってもいいと思います。そういうさまざまな形でメディウムを自由に変化させて表現しているという印象が全体的にありましたし、そういった意味で目に飛び込んてくる作品がいくつもありました。

それは写真に限らず、彫刻、ペインティングなどいろいろな表現にも言えることですが、技術なのか手法なのか、作家性というのか。それらが複合されたトータルなイメージを表現できているのがいい作品だと思うので、そういう作家の力を信じて作品を見ていきました。そういった点を追いかけて見ていくうちに、なにかわからない、けれども、僕の心がざわざわしておもしろいというような、惹きつけられる作品を選考しました。私的な解釈でしかないかもしれませんが。

——デジタルデータ、静止画作品は895人の応募がありましたますが、審査をする上でなにか気づかれたことはありますか？

静止画の審査は難しかったです。まず作品数が多かったし、メディウムを使いきれしていない作品が多いという感じが印象に残りました。多くの応募者にとって、「デジタルデータ」というのが、応募の手段のひとつとしてのみ理解されていたのかもかもしれませんが、紙焼きやフォトブックと同等に表現方法の必然性を求めて見てしまうと、デジタル写真としての特性を見切ることができる作品が少ないように思えました。作品の主題のみで見ると、内容のある作品も幾点か見つけることができたのですが、審査の条件として紙焼きやフォトブックと比べてみたときに、どうしても作品の説得力に欠けるという印象がありました。完成された（もしくはその過程を見せる行為そのものがひとつの結果だとしても）ひとつの作品として成り立たせるためには、作家の表現方法の選択というのは制作の大事な決断であると思います。紙焼き

やフォトブックのように物體的な形をもたない、この媒体でこそ成立する作品があるのではないかと感じ、まだまだ未知数な要素（部分）が大きい表現方法だと思いました。

——動画の作品についてはいかがでしたか？

動画については、写真が含有する時間とは別の種類の時間軸をどのように取り扱うのか、それは制作の手順なのか、映像的なものなのか、主題によるのか、それらを踏まえて作品を見ていくと、その他の媒体では見るができなかった動画性を持った作品があり、それをうまく表現につなげている作品に目が止まりました。

フォトブックの中にあったとしても動的な作品、その逆の写真的な動画、双方それぞれが入れ替わることのできない静止画と動画の同等な関係性が、全作品の基準値になる点が興味深いと思いました。作品の長さの制限がなく、動画のコーデック以外は詳細な規定がない点で制作の自由度は高く、今後もさまざまな作品が受け入れられていくのではと期待が持てました。

美術家にいたる道のり

——ご自身についてお話をおうかがいします。モノづくりの道へ進まれたきっかけは？

子供の頃は図画工作の授業が好きで、特に切ったり貼ったり組み立てたりしてモノをつくることに興味を持っていました。

僕が育った町は新興住宅地で、近所には建設現場が多く、木っ端を見つけては家に持ち帰り、祖母から木工用具の使いかたを教わりながら、小さな船などをつくって川に流して遊んでいました。漠然とですが、将来はなにかを創り出す仕事に就きたいなと思っていました。それが次第に美術の方向に向いていくのですが。

僕が育った金沢は、文化的ではありますが少々保守的な町で、高校生になって本格的に美術の勉強をしたいと思いはじめても、身近な場所で見ることのできる展覧会が自分にはしっくりきませんでした。そんな思いを抱えているときに父親が旅費を出してくれ、近場では

富山県立近代美術館、少し離れて京都や東京などに行って、いろいろな展覧会を見る機会を得ることができました。その時期に偶然、渋谷ビームで開催していたICC（NTT主催）の「メディア・パサージュ」展を見る機会があり、私が今まで見てきた美術表現・作品と大きく違うなど衝撃を受けたのを覚えています。その後もオオタフインアーツで草間彌生展、スカイ・ザ・バスハウスで奈良美智展などを見て、このような自由で多種多様な表現もありなのだと思うと、ますます美術に惹かれていきました。

——それから美術家の道を志し、大学からイギリスへ留学されたんですね。

もともと日本の美大に行きたかったのですが、高校生のときに病気を患ってしまい、受験をすることができなくなりました。そんな状況下で、すでにイギリス留学をしていた姉の勧めもあって、ロンドンの大学を受験することになり、高校卒業後、すぐに東ロンドン大学の美術科に進学しました。

イギリスの美大の1年目は基礎コースで、いろいろな表現方法をひと通り試すことができました。ドローイング、ペインティング、写真の撮影から現像、ミクストメディアやシティ・マッピングなど、小さな規模ながら浅く広く一年間、あらゆることをやってみるのです。その後、残りの3年間の専攻を決める段階で彫刻科に進むことにしました。彫刻科の先生は4人いて、その中の3人は美術家として映像をつくっている人たちでした。彼らの指導は、いわゆる彫刻的な表現だけに固執するのではなく、メディアによって表現を区別しなくてもいいのだと自然に思えるような環境でした。

——コンピュータとの出会いは？

大学卒業後、ロンドン大学スレード校の大学院に進んだのですが、ここでも彫刻科を選びました。父親の影響で子供の頃からパソコンを使うのが好きだったので、作品制作にコンピュータを取り入れるのには抵抗がありました。手に取ってモノをつくっていく感覚を信じていたからだと思います。

しかし、ある日、友人の映画監督からコンピュータを使ってアニメーションをつくるのを手伝ってくれと頼まれ、独学で映像編集ソフトを使ってアニメーションをつくってみました。その制作の過程で、想像していた以上にコンピュータでも物質的な感覚を持つことができるのだ、コンピュータの画面・二次元の中の映像なのに三次元的な思考を持って制作ができるのだと感じ、大学院の1年目を目一杯使って、飛行機の作品「dwelling」をつくりました。この作品をEast Internationalとnew contemporariesという公募展に応募すると、両方同時に入選し、グループ展に参加する機会を得ました。

——「dwelling」から作家活動がはじまったんですね。

このグループ展を見たジェームス・コーハン・ギャラリーの画廊主が僕の作品を持って帰ってニューヨークで展示してくれました。そのすぐ後、オオタフインアーツからも連絡があり、大学院を卒業する頃には作家活動をはじめて、いろいろなところで展示に参加する機会を得ました。しかし、その頃は作家活動といっても、なにをすればよいかかわらず、学校では作品・制作に対する意識は学べても、作家活動の方法などは自分自身で見つけていかねばなりませんでした。ひたすら作品をつくり発表する、多くの人に頼りながら独自に活動方法を見つけていく。ただ、がむしゃらに動いていたと思います。

作品制作のテーマとプロセス

——映像作品はどのように制作されていますか？ スケッチなどを描かれますか？ スタジオにはかわいいオブジェがたくさんありそうですね。

手を動かすことからはじめていると思います。とにかく映像からつくりはじめることでしょうか。つくりはじめて・立ち止まって・見て・壊して・なにか見えてくるまで、なにかに決定的なイメージができるまで、それを繰り返します。スケッチは覚え書き程度に描きますが、動画制作に必要なストーリーボードは苦手です。有形的なモノを構築していくように制作がしたいと思っています。

僕のスタジオにはさまざまなオブジェや写真、紙や砂や木材などがありますが、それらをあわせて作品のイメージをつくっています。

——ご自身でこだわっているテーマや一貫したコンセプトはなにかありますか？

僕自身の今までの活動全体を通してそういったものが見えてくるといふ感じはあります。10年前の作品、20年前の作品が今の作品につながっているという感じです。

しかし、その全体像は自分でも無意識的につくり出されていることも多いと思います。僕の作品は隠喩的なイメージを形にすることが多いので、他者との共通概念としてのコンセプトという意味では弱いことがあるのかもかもしれません。

僕はコンセプトとして言葉で表現できるものであれば、言葉で表現しておいたほうがいいと思っています。その一方で、隠喩的なイメージでしか表現できないなにかがあるとしたら、それを作品にすべきだと思っています。言葉で表現されるものとイメージで表現するもの、なにが響くか、心に働くか、動くかということ、そしてなにが時間を経て人の心に残るのかということ作家は判断していくのだと思います。そこを通過してきたものがきつといひ作品であって、僕にとって興味をそそる作品であると思います。そういった意味でのいい作品、そうでない作品、さまざまな表現手法など、時間をかけて構築される作品群の全体像にこそ、個々の作家としての一貫性を見出すことができ、それをさらに分解することで生まれる自身の作家像をときどき確認することによって、一貫性が見えてくるのかと思います。

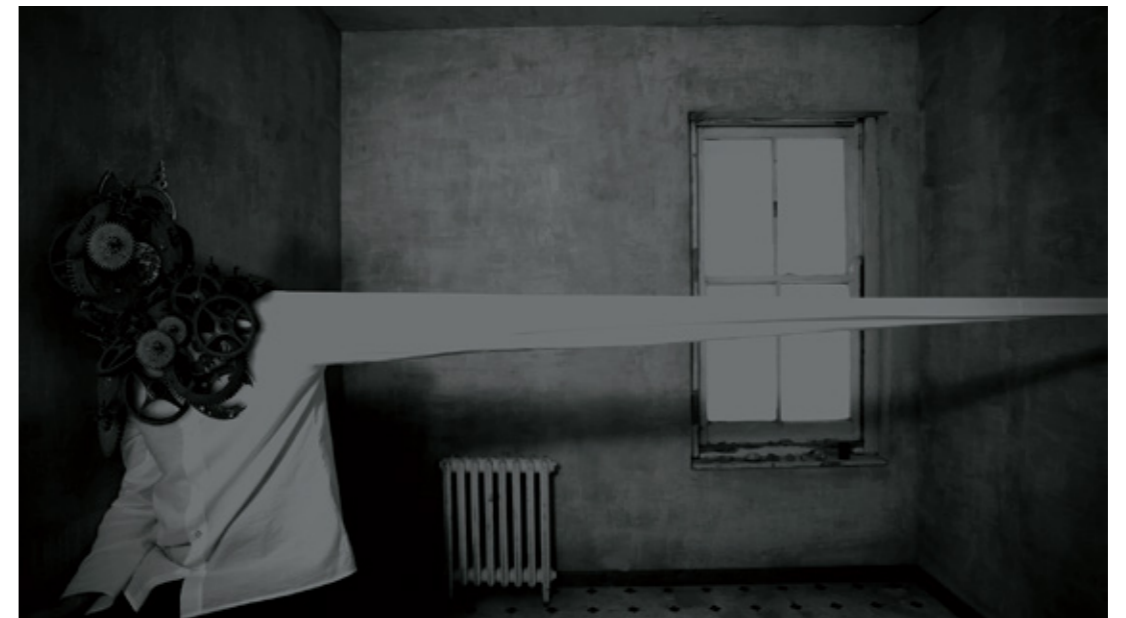
——今後の予定を教えてくださいませんか？

今はスタジオで新作の構想を練って、制作をはじめています。2016年の3月から森美術館で「六本木クロッシング」に参加を予定しています。2017年の春に宮城県の石巻・牡鹿半島で「リボーンアートフェスティバル」(<http://www.reborn-art-fes.jp>)という野外展覧会に参加予定です。

(さわ・ひらき)1977年石川県生まれ。2003年ロンドン大学スレード校美術学部彫刻家修士課程修了。2002年『dwelling』で若手作家の登竜門East International Award受賞。リヨンビエンナーレ（2003年、2013年）、横浜トリエンナーレ（2005年）、アジア・パシフィックトリエンナーレ（2009年）、シドニービエンナーレ（2010年）など国際的なグループ展に多数参加。個展に、「Lineament」（2012年、資生堂ギャラリー）、「Whril」（2012年、神奈川県民ホールギャラリー）がある。また、国内初となった大規模な個展「Under the Box, Beyond the Bounds」（2014年、東京オペラシティアートギャラリー）を開催した。生み出される映像作品と動画インスタレーションは、創造的空間を表し、鑑賞者を魅了する。現在、ロンドン在住。



dwelling 2002



Lineament 2012

グランプリ選出公開審査会



優秀賞の中からグランプリを決める公開審査会

写真新世紀2015年度 (第38回公募) グランプリ選出公開審査会が12月12日 (土) に東京・代官山ヒルサイドプラザにて行なわれました。

写真新世紀は創設25周年を迎え、この機に、カメラをはじめとする撮影機器の進化にあわせて静止画、動画を含むデジタル作品の募集も開始し、ジャンルを問わない新しい視点による作品、作家の創作活動を支援できるよう応募システムを整え、グローバルに公募を行ないました。

この新しい試みとなった第38回公募審査は、フリッツ・ヒールスベルフ氏 (オランダ写真美術館キュレーター)、荒木 夏実氏 (森美術館キュレーター)、さわ ひらき氏 (美術家)、澤田 知子氏 (アーティスト)、清水 穰氏 (写真評論家)、野口 里佳氏 (写真家) の6名により行なわれ、応募者1,511名の中から優秀賞6名、佳作18名が選出されました。

グランプリは、グランプリ選出公開審査会当日に行なわれる優秀賞受賞者6名のプレゼンテーションにより決定します。今年度のグランプリ候補は、新垣 隆太氏、岸 啓介氏、迫 鉄平氏、HALKA氏、松本 卓也氏、三田 健志氏の6名。審査会では、優秀賞全員のプレゼンテーション、審査員の質疑の後、審査員により合議でグランプリが決定されます。

開会

12月12日午後3時30分、期待と緊張感が高まる独特の雰囲気なか審査会が開会しました。

まずグランプリ候補者である優秀賞6名が緊張した面持ちで着席、続いて審査員6名が登壇しました。

その後、キヤノン株式会社 執行役員 野口 一彦より開会の挨拶がありました。

プレゼンテーション

優秀賞6名は、それぞれ持ち時間10分のなかでプレゼンテーションを行ない、自らの言葉で作品の背景や制作意図、作品への思いを語りました。審査員からは、作品に対する賛辞や鋭い批評、質問などが寄せられました。



2015年度グランプリは、迫 鉄平氏に決定!

プレゼンテーション終了後、別室にて約50分間のグランプリ審議が行なわれ、グランプリが迫 鉄平氏に決定しました。

表彰式では、2015年度のグランプリが発表され、受賞者の迫 鉄平氏に表彰状と奨励金の目録、副賞としてキヤノンデジタル一眼レフカメラ「EOS 5D MarkIII」が贈られました。

続いて、昨年のグランプリ受賞者である須藤 絢乃氏から花束が贈呈され、お祝いの言葉が述べられました。

迫 鉄平氏は、「今はびっくりしているというのが正直な気持ちです。今回から映像作品が応募の対象となったことで、映像を写真として考えることができました。これからも写真や展示について考え、作品をつくっていかれたらと思います。ありがとうございました」と喜び今後の意欲を述べました。

さわ ひらき氏による総評

審査では満場一致で迫さんに決まりました。

迫さんの作品を第一次審査で見たとき、3回続けて見て、やっぱりこれはおもしろいと思いました。自分のスタジオに戻っても作品のことがずっと頭に残っていて、構成も内容も僕にとっては完璧に思え、それがすごく悔しくて、自分の作品を作れなくなるほどでした。同時に、「なんだこれ?」みたいなのもあるのです。

僕は2003年にイギリスのコンペで入賞して、それから作品を見せる機会が増えていって今に至るのですが、コンペで僕の作品を選んだくれた審査員の人が総評で「今まで見たこともない、なんだかわからないものを選んだ」というようなことを言っていました。それ以来、僕はできるだけ「なんじゃこりゃ」というものを見ていきたいと思っていて、迫さんの作品にそう感じる場所があったので、そこをもっと伸ばして欲しいと思い、グランプリに推しました。



清水 穰氏による総評

デジタル技術が従来の写真の概念を変えつつある、その真ただ中に僕たちはいます。デジタル技術が写真表現をこれからどこに連れて行くのか、ワクワクする気持ちもあり、まだよくわからない部分もあります。今は動画と静止画が同じカメラで撮れるということ考えると、動画と静止画を分けるという考えかたはすでに追い抜かれつつあるのかなということで、今年から動画と静止画の区別をなくしました。迫さんのような表現は、そのはしりといえます。デジタル技術がいろんな可能性を切り開きつつあるときに、若い人々には静止画・動画に関係なく写真表現にどしどし挑戦してもらいたいと思っています。



2015年度グランプリは、迫 鉄平氏に決定!



表彰式では、キヤノン株式会社 執行役員 野口 一彦 (左) よりグランプリ受賞者の迫 鉄平氏 (右) に表彰状と副賞が手渡されました



上段: 審査員
下段: グランプリ・優秀賞受賞者



三田 健志



岸 啓介 (左)、松本 卓也 (右)



佳作展示風景



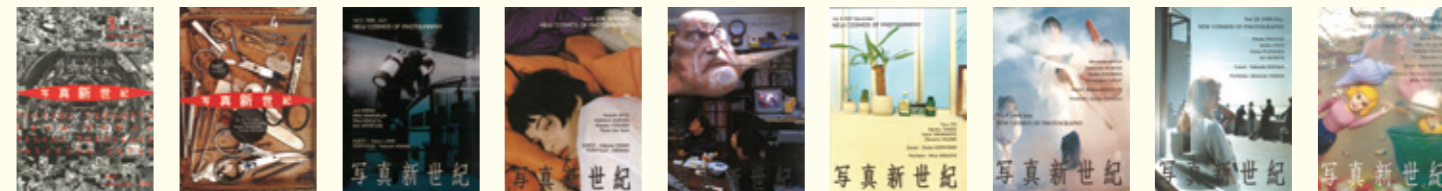
須藤 絢乃個展「面影 Autoscopy」



佳作展示風景

| これまでのあゆみ |

写真新世紀
New Cosmos of Photography



〈写真新世紀〉 これまでのあゆみ

1992	[グランプリ] 木下 伊織 [優秀賞] 岩崎 昌弥/小川 嘉朗/奥谷 佳子 オノデラ ユキ/今 義典/清水 麻弥 辰本 まこと/千葉 鉄也 ノニータ (谷野浩行)/野村 浩 山本 美奈 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生	1998	[グランプリ] 柏 亜矢子 [優秀賞] 池田 宏彦/岩崎 マミ/黒瀬 康之 佐藤 純子/ヴェロニック・シリア 藤原 江理奈/守田 衣利 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 ベルナルド・フォコン/ホンマ タカシ	2004	[準グランプリ] 川村 素代/滝口 浩史 [優秀賞] おおば 英ゆき/ふじい あゆみ/山下 豊 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 森山 大道/ケビン・ウエステンバーグ やなぎ みわ	2010	[グランプリ] 佐藤 華連 [優秀賞] 齋藤 陽道/柴田 寿美/高木 考一 谷口 育美 [審査員] 大森 克己/佐内 正史/榎木 野衣 清水 穰/蛭川 実花
1993	[グランプリ] 市川 綾子 [優秀賞] 遠藤 年勇/大橋 仁/金城 民子 河野 安志/高橋 ジュンコ/土井 弘介 中山 英輔/西 光一/野村 浩 宮本 知保/茂木 綾子 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生	1999	[グランプリ] 安村 崇 [優秀賞] 伊賀 美和子/遠藤 礼奈/岡部 桃 田邊 晴子/長尾 智子/矢ヶ崎 祐子 吉田 優 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 サラ・ムーン/長野 重一	2005	[グランプリ] 小澤 亜希子 [優秀賞] 新垣 尚香/梶岡 禄仙/とくた はじめ 西野 壮平/林口 哲也+松村 康平 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 森山 大道/ウィリアム・エグルストン 蛭川 実花	2011	[グランプリ] 赤鹿 麻耶 [優秀賞] 奥山 由之 木藤 公紀/バトリック・ツアイ 山田 真梨子 [審査員] 大森 克己/佐内 正史/榎木 野衣 清水 穰/ヒロシクス
1994	[グランプリ] 熊谷 聖司 [優秀賞] 大森 克己/小倉 英三郎/金子 亜矢子 白土 恭子/ジャン=クロード・ペレグー リン・デルピエール [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 ロバート・フランク/坂田 栄一郎	2000	[グランプリ] 中村 ハルコ [優秀賞] 佐藤 篤/佐野 方美/澤田 知子 鈴木 良/谷口 正典/中村 年宏 山田 大輔 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 横尾 忠則/倉石 信乃/ジル・モラ	2006	[グランプリ] 高木 こずえ [優秀賞] 喜多村 みか+渡邊 有紀/清水 朝子 Palla/辺口 芳典/山田 いずみ [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 森山 大道/日比野 克彦/ボリス・シハイロフ	2012	[グランプリ] 原田 要介 [優秀賞] 柿田 真吾/吉楽 洋平/長谷波 ロビン 浜中 悠樹 [審査員] 大森 克己/佐内 正史/榎木 野衣 清水 穰/ヒロシクス
1995	[グランプリ] ヒロシックス [優秀賞] A・R・T Puff/坂本 浩/佐内 正史 柴原 三貴子/野沢 文子 バトリシア・ガバス/本田 かな [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 ジャン=クロード・ルマニー/浅葉 克己	2001	[グランプリ] (該当なし) [優秀賞] 今井 紀彰/佐伯 慎亮/新沢 もも たけむら 千夏/中谷 理子/中西 博之 西郡 友典/吉岡 佐和子 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 横尾 忠則/木村 恒久/都築 響一	2007	[準グランプリ] 黒澤 めぐみ/詫間 のり子/中島 大輔 [優秀賞] 青山 裕企/田福 敏史/中里 伸也 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 森山 大道/榎本 了壺/具 本昌	2013	[グランプリ] 鈴木 育郎 [優秀賞] 安藤 すみれ/海老原 祥子/水野 真 藪口 雄也 [審査員] 大森 克己/佐内 正史/榎木 野衣 清水 穰/ヒロシクス
1996	[グランプリ] 野口 里佳 [優秀賞] 加藤 直司/菅野 純/黒瀬 英文 蛭川 実花/早船 ケン/吉田 優 ロス・バン・ホーン [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 伊島 薫/椎名 誠	2002	[グランプリ] 吉岡 佐和子 [優秀賞] 岡本 英理/鍛冶谷 直記 SABA (高橋 宗正・中島弘至) ヨシダ ミナコ/吉本 尚義 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 森山 大道/マルク・クリュー/東松 照明	2008	[グランプリ] 秦 雅則 [優秀賞] 岡部 東京/小山 航平/菅井 健也 保谷 綾乃/元木 みゆき [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 榎本 了壺/大森 克己/野口 里佳	2014	[グランプリ] 須藤 絢乃 [優秀賞] 草野 庸子/南 阿沙美/森本 洋輔 山崎 雄策 [審査員] 大森 克己/佐内 正史/榎木 野衣 清水 穰/ヒロシクス
1997	[グランプリ] 矢島 慎一 [優秀賞] 伊藤 トオル/ヴァレリー・ブラン/慶 高城 典子/山本 香/山本 耕司 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 カシン・リー/森山 大道	2003	[グランプリ] 内原 恭彦 [優秀賞] 植本 一子/加藤 純平/藤田 裕美子 法福 兵吾/ヤマダ シュウヘイ [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 森山 大道/マーティン・パー/鈴木 理策	2009	[グランプリ] クロダ ミサト [優秀賞] Adam Hosmer/杉山 正直 高橋 ひとみ/安森 信 [審査員] 荒木 経惟/飯沢 耕太郎/南條 史生 榎本 了壺/蛭川 実花	2015	[グランプリ] 迫 鉄平 [優秀賞] 新垣 隆太/岸 啓介/HALKA 松本 卓也/三田 健志 [審査員] フリッツ・ヒールズベルフ/荒木 夏実 澤田 知子/さわ ひらき/清水 穰 野口 里佳



2014年度(第37回公募)グランプリ

須藤 絢乃 *Ayano Sudo*

面影 *Autoscopy*









2014年度(第37回公募)グランプリ

須藤 絢乃 インタビュー

Ayano Sudo

大好きな写真をたくさん見ることが出来る環境に身を置きたいと、大学時代に画廊にインターンとして入り国際的なフェアを体験。その後、作家に転身し、精力的に活動を展開している須藤 絢乃氏。失踪した少女たちに扮して取り組んだセルフ・ポートレート「幻影 Gespenster」で2014年度写真新世紀グランプリを受賞。2015年度に発表した新作「面影 Autoscopy」は、性別も国籍も異なる他人のポートレートを撮影し、作家本人の顔に近づけていくというものだった。しっかりとコンセプトを打ち出し制作されるセルフ・ポートレート作品の数々。それらに取り組むご自身の考えをうかがった。

——大学院生の頃から画廊に所属されていますね。作家になるという願望はいつ頃から持たれましたか？

写真集が好きで、写真をもっと見たい、見られたらいいなあという気持ちから大学生の頃画廊の手伝いをしていました。触れたくても触れることのできなかつた世界に踏み入れた感じでした。大好きな環境に身を置けるというのは、本当に光栄で刺激的なことです。パリフォトへも2回赴いて、たくさんの写真を生で見せていただきました。私の憧れの作家、ベッティナ・ランスさんにも偶然お目にかかることができ、私の写真を撮ってもらうという貴重な経験をさせていただきました。

当時はフィルムからデジタルへの移行時期でしたが、写真を撮り、発表する事はプリント方法も難しいし、お金がかかる堅苦しいものだと思っていたので、私は鑑賞する方で表現する方ではないと思っていました。ですが、パリフォトで、写真の様々な表現の自由さを知り、アイデアが湧いてくるようになって自分で発表を始めました。そして大阪のミオ写真奨励賞に応募して森村泰昌さんを選んでいただいて賞をいただきました。それから作家としてやっていきたいという気持ちが強くなったといってもいいかもしれません。

その後NYのAIPADというアートフェアで作品を手伝っていた画廊から作品を出展していただく事になり初めて作品「They are not me, but me」が売れました。どうしてこの作品を買ってくださったんだろう？ と不思議に思ったり(笑)。でも自分の中で手応えを感じて、制作についていろいろなことを考えるようになりました。すごく励みになったんです。

——写真新世紀の応募については何か意識されていらっしゃいましたか？

すでに作家として活動しているし応募しなくてもいいのでは、と周りの人からは言われました。でも有名な作家さんをたくさん輩出しているし、認知度のある憧れの賞だったのでどうしても受賞したいという気持ちから応募しました。

——強い意思の下、応募されたんですね。グランプリ受賞後はなにか変化はありましたか？

大きく変化される方もいらっしゃると思いますが、私的にはそれまでと変わらない感じですよ。ですが、去年は引っ越しをして関西から東京へ活動の拠点を移しました。それから、画廊から任されて毎年出展していたニューヨークのアートフェアへ行き個展をしました。作品の搬入から展示、販売、配達、それから集金までいろいろなことをさせていただいたんです。ご縁もあってニューヨークタイムズの取材をうけてご紹介いただきました。それを見たイギリスのiDマガジンからも連絡があって記事にさせていただいたんですよ。

——世界的に有名なメディアに取り上げていただいたんですね。グランプリ受賞作「幻影 Gespenster」は、失踪した少女たちに扮したセルフ・ポートレートでした。応募にあたっては戦略的にこうしようと考えられたんですか？

確かに、戦略的に考えたところはあります。応募する以前から作品の制作と発表は続けていました。ただしそれは自分の美意識を極めようという方向性のものばかりでした。写真新世紀へ応募するには、大きい賞だからこそちゃんとコンセプトを立てて、なおかつ見た目の美しさがあるものをつくろうと考えました。また、グランプリ選出公開審査会という場でみずから作品について説明ができるというのも大きかったです。プレゼンテーションは、展示と同じように発表の場であるという意識を強く持って臨みました。

優秀賞を取った人たちと話す機会がたくさんできて、改めて驚いたのは、みんなが常にカメラを持ち歩いていることです。絶えず首からぶら下げていて、呼吸をするかのように撮っていくのを目の当たりにしました。写真家とはこういうものなのかとも思いました。そして、私は写真家なのか、そうではないのかとも自問しました。写真を用いることが比較的多いとはいえ、自分としては写真家というよりアーティストという存在でありたいと思っています。

それは写真だけではないということ、立体作品を作ったり、絵を描いたり写真外の分野での制作をするということに興味があるということ、実際、そういうことをしています。

——写真を表現の手段、素材の1つとして見ていらっしゃるんですね。



「They are not me, but me」2010

「作品をつくるって『何でもアリ』なんだということ伝えてたい」

がっていくと思うし、それらをもっと生かしていくべきではないかと考えています。

——2015年の個展で発表された「面影 Autoscopy」は、性別も国籍も異なる他人のポートレートを撮影し、デジタル処理を施して作家本人の顔に近づけていくというものでした。前作はセルフ・ポートレートで、新作は他人のポートレートになりました。なにか違いはありますか？

私としては「面影 Autoscopy」もセルフ・ポートレートではないかと思っています。それぞれ違う人を撮っていますが、結局は無意識、意識的に自分に似ていきます。よく見れば私の顔とは大きく違っているのに、「これ、須藤さんが扮しているの?」と聞かれることがあって、それは私の顔を感じさせるなにかしらの要素というものが、どこかにちゃんと入っているからだと思います。人形作家は、つくる顔が本人に似てくるらしいんですが、写真でもそういうことが起こるのではないかと考えています。ただ、どれだけ元の顔を变形させて、私に近づけていっても、決して私そのものにはならないのも不思議です。他人の顔は、どれだけやっても私の顔にはならないんです。

一方で、じゃあ完全なる私とはいったいなんなのかとも思います。今はみんなスマホで自撮りをします。そこに写っている自分を私だと信じてくれれば、他人が見たらいつもと全然違うというかもしれない。本当の顔はあいまいなもので、ないも同然なんじゃないかという気もします。

——作品によって、人の顔についての深淵まで考察できてしまう。写真は思った以上にいろんなことができるんですね。

写真を含めて、作品をつくることは何でもアリだと思いたい。見る人にもそう感じてほしい。私が10代の頃、とにかくおもしろい表現をあれこれ探していて、そういうものに出会えたらほんとうに嬉しかった。そういう喜びをつくり出せる人に、私もなりたと思っています。

——今後もセルフ・ポートレートを撮っていかれますか？

新作もセルフ・ポートレートの作品にしようと思っています。セルフでも他人を撮っていても自分の心が動かされているものとらえていっているんで、そこに差は感じていません。

次回作ですが、谷崎 潤一郎作品の『細雪』の登場人物の時岡四姉妹をテーマにしようと考えています。幻影の“Gespenster”という言葉も『細雪』からピックアップしました。「幻影」と『細雪』は内容的にはリンクはしませんが、その一部にインスパイアされたところがあります。『細雪』の四姉妹はそれぞれ異なるキャラクターもっていて、読むとやっぱりおもしろい。彼女たちの年齢は20代から30代で、私は今年ちょうど30歳になります。大人の女性というか、女性として生きていくときの次のステージに入ってきていて、20代では作れなかったもの、今であるからこそその人たちに变身してみたいという気持ちになっています。「幻影 Gespenster」を通して少女時代にさよ

らして、大人の女性というものを受け入れてみたい。それからどんなおばあさんになっていくまでの自分を見つめたいと思っています。

——女優さんのようですね。

女性を演じているという意識があるので、そうかもしれません(笑)。私はもともと男の子になりたかったのですが、女として生まれてきたから「まあしょうがないや」というような部分と「生まれてきたからには」というような部分があって、そこを表現してみたいです。『細雪』に出てくる女の人のビジョンは、今までの少女の私にはありませんでした。でも30歳になることで、この10年、20年先というのが見えるようになってきました。女の子のままでもいいかと思っていたのが終わって、「次、次、未来!」というように。その未来のビジョンが時岡四姉妹にあるのではないかと考えています。

四姉妹の末っ子は20代後半で、夙川で一人暮らしをしています。人形作家で自由奔放な人物です。私自身も20代後半まで夙川に暮らし作家活動をしていきたいこともあって、特にシンパシーを感じます。それから、私の祖母は88歳になりますが、大阪・船場出身でお茶屋と検番をしていました。『細雪』の家族も船場がルーツになっています。私もかつて祖母とともに船場の近く、新町に住み、そのあと阪神間に移ったのですが、そこにも共通点を感じます。祖母の検番は大阪で最後の方まで残っていました。今も検番は一部残ってはいますが、船場の文化というものはほとんど触れる機会がありません。祖母はその文化のかけらを持っている人で、船場言葉も話します。

そういう船場文化を作品を通して残しておきたいとも思っています。祖母と話すことで谷崎作品の背景をリサーチしつつ、祖母のきものとか扇子とか、祖母の持ちものをアーカイブしていきたいとも思っています。谷崎の生きていた時代と祖母の生きていた時代はリンクしますし、

この作品は老若男女に愛されていて、海外ではマキオカ・シスターズと呼ばれ、いろんな言葉に翻訳されています。四姉妹それぞれの女性観というか、女性の様々な表情を表現するにはとてもおもしろい作品ではないかと考えています。女性として生まれてきてしまったけれども女性というものが自分自身ではまだよくわかりません。でも、本を読み、祖母の話やいろんな人の話を聞いたりしていく中で、女性として生きて行くのはこういうことなんじゃないのかなあと模索できます。それをまた作品を作りながらやっていきたいと考えています。

——須藤さんにしかできないような仕事になりそうですね。

そうですね、自分にとって生まれた時から身近にある部分、自分のバックグラウンド見つめる表現ですね。ようやく自分を認め出しているのかもかもしれません。自分はここにいるという感じになってきたのかもかもしれません。

——発表はいつ頃を予定されていますか？

2016年の秋、谷崎潤一郎記念館で展示をする予定です。

(すどう・あやの)
1986年 大阪府生まれ
2009年 パリ、エコール・デ・ボザールに交換留学
2011年 京都市立芸術大学大学院卒業
2011年 MIO写真奨励賞審査員特別賞受賞
2014年 キヤノン写真新世紀(第37回公募)グランプリ受賞
2015年 AIPAD Photography showで個展、(Park Avenue Armory, ニューヨーク)
2015年 「面影 Autoscopy」、キヤノン「写真新世紀東京展2015」で個展(代官山ヒルサイドフォーラム、東京)

須藤 絢乃 写真集『面影 Autoscopy』

「写真新世紀東京展2015」の開催に際し『面影 Autoscopy』の写真集を制作。写真新世紀創設25周年を記念して少部数印刷にも対応するキヤノンの高画質プリンター「DreamLabo 5000」で制作されました。



求めていたマシンができたという感じです。高解像度の出力が可能になって、写真プリントがそのまま印刷物になったようなクオリティの高い写真集が完成しました。

今回は、洋服の布地を使用して装丁しました。用途に関係なくチャレンジ可能なのもオンデマンドの魅力ですね。表現の幅が広がっていくともおもしろいと思います。

Web上でもイメージはどんどん広がっていますが、こういう物質になったものにちゃんとした価値が求められていると思うんです。所有するからにはいいものを持ちたい。今はネット上で無料で楽しめるものがたくさんありますが、お金を出して実際に手に置くならばやっぱりスペシャルなものが欲しいという感じでしょ

うか、所有欲をそそのめるのだと思います。

たとえば音楽はネット上で無料で聴いても、その人のライブに行っても生のアーティストに会いに行きたいとか、アートワークとしても楽しめるレコード盤を買いたいとか、今の人は自分の行為や物質に実感や特別さといった価値を求める時代だと思うんです。ネットの世界ではあまりにも情報があふれてしまったから、逆に誰もかれもが持てたり、体験できないようなものが求められていくのではないかなと思います。ですからこういう特別感のあるものがつくれるというのは本当にすばらしくて、今後の可能性を感じることができるやり方だと思います。

(須藤 絢乃)

2011年度(第34回公募)優秀賞

奥山 由之 *Yoshiyuki Okuyama*

BACON ICE CREAM









2011年度(第34回公募)優秀賞

奥山 由之 インタビュー

Yoshiyuki Okuyama

2011年度写真新世紀(第34回公募)優秀賞受賞から5年、写真界の若手オピニオンリーダーとして写真、映像の世界で大活躍中の奥山 由之氏。2016年の年初を飾る大規模な展覧会「BACON ICE CREAM」(2016年1月22日～2月7日 東京・渋谷/パルコミュージアム)を開催、大成功を収めた。写真集の出版、展示への思いについて、これまでの歩みを振り返りながらお話をうかがった。

——受賞作「Girl」は写真集になり、現在は、写真、映像の世界で大活躍でいらっしゃいますね。2011年の優秀賞から5年、どうい時間をご過ごされてきましたか？

時間が経つのは本当に早かったです。奥山由之の写真として最初に人に知って頂けたのが「Girl」でよかったと思います。「Girl」は、大学生のときに制作した作品で、入学と同時に感じた、言葉にはできないモヤモヤとした心象を形にしたものです。

僕は、自分の気持ちや思いを、言葉にして人に伝えることが苦手で、どんどん心の中に滞留させてしまうのですが、写真と出会った時に、その曖昧で混沌とした感情を表現することに向いている、と感じたんです。

——その内面に潜む感情、思いというようなものを形にされ、公募にぶつけられたんですか？

その作品の被写体だった友人に見せるために、ファイルにまとめたのですが、自分の感情を焼き付けたものを作ると、誰かに共感してほしいとか、同じ気持ちで生きている人がいるんじゃないかというのを見つけたくなって、それで写真新世紀に応募したんです。作品が完成した時と、応募時期がちょうど一緒で。

受賞の連絡をいただいたときは、嬉しいというよりも、僕の気持ちを分かってくれる人が1人でもいたんだ、ということに救われる気持ちがありました。うまく言えないけれど、写真に縋るようにして、擦り付けて、こすって、こすって差し出した感じのモノだったんです。その自分の奥深いところにある気持ち、それを見て共感してくれた人がいたということに「よかった…、助かったなあ」というのが正直な思いでした。それはずっと潜水していて、水面に出てきた瞬間のような、そんな感覚だったように思います。

——受賞を機に、ご自身の感情が表に溢れ出た感じだったんですね。

それが僕にとっての写真の始まりでした。今でも感情の揺らぎが、写真の仕上がりに大きく影響します。僕にとって写真の純度の高さは、いかに自分の感情に寄り添っているかということだったりもする。

良し悪しではなくて。人によるとは思いますが、でも自分にとってはそれが全てで、今に至っています。

——今回開催された展覧会「BACON ICE CREAM」(2016年1月22日～2月7日 東京・渋谷/パルコミュージアム)は、写真集の出版記念展でもあられたんですね。9千人を超える来場があったそうですが、展覧会を開催されていかがでしたか？

夜行バスに乗って新潟から見に来てくれた中学生や、奥山さんがきっかけで写真を撮り始めましたと言って下さる人たちがいました。その人たちにとっての写真の入口に、僕がなれているという事、それは単純に嬉しいことです。毎日を楽しんで、何かがいいなあと感じた瞬間に写真を撮っているということに、共鳴があると思うと本当に光栄です。

——タイトルがとてもユニークですね。

5、6年前にWebで発表した作品で「BACON ICE CREAM」というものがあって、それは作品の中にベーコンが写っている写真とアイスクリームが写っている写真があって、それを見ながら「BACON ICE CREAM」って、意味は特に無いけど、発音的に好きだなあと思って付けていたんです。

今回の写真集は、コンセプトを先に言葉で決めてセレクトしていくのではなく、自分の中で何かを感じた、自分にとっての写真らしさが強く出ている作品をセレクトしていきました。ただある意味でコンセプトのない作品群は、それをまとめるタイトルが見つからなくて。それで、以前、「BACON ICE CREAM」と名付けた作品があったことを思い出したんです。最初は自分独自の造語だと思っていたんですが、調べたら、実際に存在する食べ物で、70年代にイギリスのパラエティ番組で放送されたコントで初めて登場したそうなんです。アイスクリームにベーコンをグチャッと混ぜたようなもの。それをヘストン・ブルメンタルという気鋭のシェフが試作を重ね、自分のレストランに出したそうなんです。イギリスでもトップクラスのレストランをやっている人で、それ以降他のシェフも作る様になり、イギリスではエイプリル・フールに食べられる伝統のお菓子にまでなったんです。



「自分が楽しんでやってきたこの5、6年です。それが人に伝わっているということは間違いではなく、それが単純に嬉しいことです」

れど、それがおいしさの表現になっているかといえば、起きている状態の話だったりする。おいしさの表現は、言葉にして詳しく説明するのが難しく、そういう感覚が写真にも欲しかった。これってこうだからいいんだよね、というように説明が出来てしまう事っていうのは、やっぱりそこまでの気がして。もっと説明のつかない「何か」に引き寄せられる感覚がありがたいんです。それこそ味覚のように、身体で感じるような。

——ユニークな会場構成でした。大小様々なプリントがあり、鏡の上に写真が貼ってあったり、冷蔵庫のドアあって、開けると別世界に入り込むような演出がありました。

やりたかったことは、現代独特の感覚である“レイヤー”を表現することです。写真集は見るときにめくるという体験をします。写真展は、見る順番も人によってまちまちで、身体を動かして見ることで温度感がある。なので、その人に合った見方をして、写真のおもしろさを感じて欲しかったんです。たとえば鏡の中に写り込んで見えている写真と生でみる写真は見え方が違ってくる。鏡に写り込むことで写真はちょっと歪んだり、彎曲したり、大きくなったり小さくなったりします。見る角度、距離感によって見え方が違うし、額装の仕方、その素材によっても全然違って見えてくるということを体験してほしかった。僕ら20代やそれより若い人たちは特にそうだと思うのですが、平面の奥にも平面がある、という“レイヤー”の感覚を持っています。だから、写真という平面を用いて、奥ゆきのレイヤーを作り、その重なりによって見え方が異なる、ということを表現してみたかった。重なりその先、奥が見たくなる感覚、それを空間を使ってやってみたかったんですよ。

入り口の亚克力ボード、鏡面上での展示、クリップで何枚もの写真を重ねる行為、などはそれによるものです。

——いろいろなことにチャレンジした展覧会でいらしたんですね。

展示という空間の中で、挑戦したいことは沢山あったのですが、ごちゃごちゃして分かりにくくなっては勿体無いし、パルコミュージアムという空間独特の雰囲気もあるので、それを活かしつつ、あくまで見に来てくれる人に単純に楽しんでほしかったですね。だから、冷蔵

庫の扉が開く、という様な遊び心も入れたりしています。

——大型写真展が終わって、いよいよフェーズIIに入られる感じですね。これからの計画は？

展示が始まったばかりの時は、出し切った気持ちもあって、これからどうするのだろう、と少し怖くなってしまい、落ち込みました。でも、結局は毎日毎日写真を撮っていく事しか進む道は無いと思っていて、なので今は、悩むよりも、また1から撮り始めようという気持ちです。

——いい感じでいらっしゃいますね。撮ってあげばいいということでしょうか？

そうですね。ここ最近、森山大道さんの著書をいろいろと読み返しました。約8年程、撮れなくなって悩まれた時期があったそうで。でも、もう一度撮り始めたのは、カメラがあって、光があって、自分がいて。カメラを向けると、自分の影が映る、それだけでいいんだと思えたからだそうです。その境地、写真家としてすごく強い人なんだと思います。かつこよさがあり、そのかつこよさには悲しさも伴っている。ある種なにかを諦めて、写真というモノに自分の全てを託した彼の人としての悲しさがあると思うんです。それは写真家に限らずとも、ミュージシャンでも、なんでもいろいろなところであるとは思えます。でも、そこを超えたところにまた見えないなにかがあるように思うんですよね。

——ところで、今回、写真新世紀25周年を記念して、キヤノンの高精細プリンター、ドリームラボ5000を駆使して写真集「THE NEW STORY」を作っていただきました。A3サイズの大型本はいかがでしたか？

すごく気に入っています。プリント作品がそのまま本になっているような新しい感覚で、いい本ができたと思います。こういう状態めくるということはないし、写真集を見ているのだけど、また違う印象もある。なんだろう、とても不思議です。

「BACON ICE CREAM」とは違うし、また「march」とも違う。3つの写真集が同じ時期に出たんですが、それぞれに違いを楽しんでもらえると思います。

——写真集にするというこだわりはなにかありますか？

自分自身の写真を見返したいという思いから始まる事が多いです。データでもまとめて見ることはできますが、物として表れてくる、めくるという体験があって、見返すこともできるというのは写真集にしかできないんです。また時間の変化によって紙の匂いや色も変わってくる。

写真は、その時見るという大切さもあるし、時間が経ってから見る良さもあると思うんです。違ったコンテキストで見ると、そのために残しておくというのは、大きな要因だし、それは僕だけじゃなく買ってくれた人も同じように見ることができるとすよ。だから僕は本屋さんでパッと見るのではなく、買って、手元に置いておいて欲しいと思っています。

——奥山さんにとって興味のあるものは？ 写真のお仕事をされる上で気にかけていることはありますか？

興味があるのはやっぱり人間ですね。人の輝かしさ、人の温度

感、冷たさ、卑屈さ、憎しみまで含め、興味があります。

——今後の予定について、なにか計画はありますか？

予定は特に決まってないです。あまり決めないタイプで。でも映画が作りたいです。映像は、写真とはまた違って、点ではなく、線の表現なので、当然流れている時間がある訳で。今は、瞬間よりも、もう少し長い時間の中で人とどう向き合うのかに挑戦してみたいです。

——最後に、写真新世紀は25周年を迎えました。次の応募者たちへメッセージをお願いしますか？

自分で思ったこと、感じたことを写真にして、誰かに見て欲しい、誰か一人にでもわかってほしい、共感してほしいと思うものがあれば、チャレンジしてみるのがいいと思います。どんな作品であれ、見てもらうことでまた変化していきます。受賞かどうかは関係なく、応募することによって変わってくるものがあると思うんです。見られることで、作品の解釈が変わり、作品が成長していくことがあります。だからどんどん恐れず撮ってみてください。



『THE NEW STORY』

(おくやま・よしゆき)
1991年1月23日東京都生まれ。大学在学中の2011年に、第34回写真新世紀優秀賞受賞。受賞作『Girl』が2012年に写真集として出版される。2015年、約5年間におよび撮りためた写真集『BACON ICE CREAM』が完成。私家版写真集に『THE NEW STORY』『march』がある。

「写真の未来は僕らがつくる!」開催

多彩なゲストで贈る写真家のためのイベント

「写真新世紀東京展2015」の会期中、代官山ヒルサイドフォーラムを基点に写真新世紀創設25周年を記念したイベント「写真の未来は僕らがつくる!」を開催。審査員、歴代受賞者、写真家、美術評

論家、学芸員など多彩なゲストを招き、写真レクチャーやトークショー、映像ライブのほか、参加者が持参した写真を対面で見てもらえるポートフォリオレビューなどを実施しました。

ポートフォリオレビュー

参加者がブックにまとめた作品を持ち寄り、レビュアーと対面して講評を受けるのがポートフォリオレビュー。各日30人が参加して、熱いプレゼンと講評が展開されました。

レビュアーを務めたのは、11日が今年の審査員も務めたフリッツ・ヒールズベルフ氏と荒木 夏実氏、東京都写真美術館学芸員の石田哲朗に三井 圭司氏の3氏。

13日は審査員も務めた清水 穰氏と澤田 知子氏、野口 里佳氏。それに写真新世紀出身者の写真家・大森 克己氏。

「空き地というのは被写体としていいんですよね。ただ、この手の写真はすでに世にあるし、ワンパターンになってしまっていないか?」(清水)、「こういう技法で作品をつくるのは見たことがなかった。それだけでもすごいけれど、だからこそ被写体をもっと吟味するともっとよくなりそう」(大森)など、参加者とレビュアーのあいだで濃厚なやりとりが続きました。その様子を、ほかの参加者は食い入るように見つめ、耳を傾ける。写真をめぐる真剣な場がそこに生まれていました。

●ポートフォリオレビュー プログラムA

フリッツ・ヒールズベルフ (オランダ写真美術館 チーフキュレーター)
荒木 夏実 (森美術館学芸員)
石田 哲朗 (東京都写真美術館学芸員)
三井 圭司 (東京都写真美術館学芸員)
日時：12月11日(金) 15：30～17：30
会場：代官山ヒルサイド アネックスA

●ポートフォリオレビュー プログラムB

大森 克己 (写真家)
清水 穰 (写真評論家)
澤田 知子 (アーティスト)
野口 里佳 (写真家)
日時：12月13日(日) 13：00～15：00
会場：代官山ヒルサイド アネックスA



写真レクチャー

フリッツ・ヒールズベルフ氏による写真レクチャーを開催。ヨーロッパの写真作家の作品をスライドで紹介しながら、ヨーロッパ写真の変遷、これから期待する写真家について、お話いただきました。

フリッツ・ヒールズベルフ (オランダ写真美術館チーフキュレーター)
「ヨーロッパ写真の変遷、期待する写真家について」
日時：12月11日(金) 18：00～19：30
会場：代官山ヒルサイド アネックスA



映像ライブ

映像と音楽のコラボレーション!
さわ ひらき氏の映像作品に合わせて、テニスコーツ・さや氏の即興ライブを開催。キーボード、打楽器、声など身体を使って表現された写真新世紀25周年を祝うアニバーサリーライブが披露されました。

さわひらき (美術家) × さや (テニスコーツ/音楽ユニット)
日時：12月13日(日) 18：30～20：00
会場：代官山ヒルサイド アネックスA



審査員、歴代受賞者、写真家、美術評論家、学芸員など、多彩なゲストによるギャラリートークとトークショー

●伊丹 豪 × 大森 克己

伊丹 豪 (写真家)
大森 克己 (写真家)
パネリスト: 柿島貴志 (ポエティックスケープ 代表)
日時: 12月18日 (金) 18:00~19:30
場所: 代官山ヒルサイド E棟ロビー



写真によって独自の世界を築いているふたりの写真家対談。抽象的でグラフィカルな画面が特長的な伊丹 豪氏に対し、ストレートフォトを中心に撮影をする大森 克己氏。それぞれの作品をモニターに映し出しながら、共通点や相違点を探りました。

伊丹: 像が写るといふだけのことに、なぜ自分はこんなに心を動かされるのか。写ることへの興味から作品づくりをはじめました。デジタルカメラの時代になって、もっとくっきり見たいという世間の欲望は大きくなるばかり。高解像度を求める欲望は何なのかにも触れたいと思い、デジタルカメラで制作をしています。

大森: かつて発表した作品「サナヨラ」などはテーマを決めずにやっていたもの。キャプションも場所しか入れていなかった。それが、近年取り組んでいる「sounds and things」では、もう少し詳しい言葉をつけている。世の中には見えないものがたくさんあって、人はそれをひとつの感覚として当たり前のようには享受しているけれど、写真になると視覚情報だけが切り離されがち。それはひょっとするともったいないんじゃないか。そのあたりのことをもう一度考え直すためにしています。

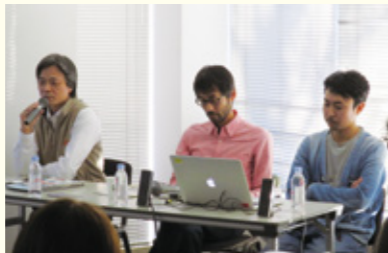
●植松 由佳 × さわ ひらき

植松 由佳 (国立国際美術館 主任学芸員)
さわ ひらき (アーティスト)
日時: 12月13日 (日) 16:30~18:00
場所: 代官山ヒルサイド アネックスA



●飯沢 耕太郎 × 熊谷 聖司 × 西野 壮平

飯沢 耕太郎 (写真評論家)
熊谷 聖司 (写真家)
西野 壮平 (写真家)
日時: 12月19日 (土) 13:00~14:30
場所: 代官山ヒルサイド E棟ロビー



●澤田 知子 × 平野 啓一郎

澤田 知子 (写真家)
平野 啓一郎 (文筆家)
日時: 12月19日 (土) 13:00~14:30
場所: 代官山ヒルサイド E棟ロビー



●荒木 夏実 × 梅 佳代

荒木 夏実 (森美術館学芸員)
梅 佳代 (写真家)
日時: 12月20日 (日) 13:00~14:30
場所: 代官山ヒルサイド E棟ロビー



●榎木 野衣 × 須藤 絢乃

榎木 野衣 (美術批評家)
須藤 絢乃 (写真家)
日時: 12月20日 (日) 16:00~17:30
場所: ヒルサイドフォーラム



1991年の発足から25年。その歩みに則すように、フィルムからデジタルへ、写真を取り巻く環境は大きく変化し、デジタルカメラは静止画から動画へと表現の領域が拡張しています。これらを踏まえ、次世代がつくる写真表現、写真の未来とはどんな世界になるのか、これらについての考察を「写真新世紀」という場を通して行なわれました。



●川内 倫子 × 野口 里佳

川内 倫子 (写真家)
野口 里佳 (写真家)
日時: 12月23日 (水) 15:00~16:30
場所: ヒルサイドフォーラム

1990年代に活動をはじめ、現在まで自身のペースを崩さず作品を発表し続けたふたり、川内倫子と野口里佳はほぼ同年代。同じ時代を生きてきた「同志」的な連帯がある様子だ。
川内「野口さんは常に独特のスタンスをとっていて、すてきだなと思いつつ見えてきました」
野口「川内さんも同じ。どこにも属さない感じですよ。料理がお上手と聞いたんですけど、料理と写真は関係がありますか」
川内「撮影はシューティングとも言うし、瞬間

をつかまえるという意味では狩りみたいなもの。獲物をとってきただけから、プリントする作業は調理っぽいなと思います。塩をどれくらい入れればいいのか、というように細かく調整していくところなんか、似ていますよね」
野口「川内さんはいつも、バランスのいい食事をつくっているように見えます。私なんて今日は前菜、明日はメインディッシュだけというように、全力でおいしいものを求めるけれどバランスは一向に取れないタイプ。それに、撮影が狩りという感じにもならない。落とし物を持って歩くようなことになってしま

ます(笑)」
川内「でも、いつも肉体を動かして作品をつくっている感じはありますよね」
野口「作品に身体的な感じが出てこないとは言われますけど」
川内「それでいいんじゃないですか。へんな言い方ですけど、暑苦しさや押しつけがましさがなくて。常に一定の距離感がありますよね。地球に住んでいるのではない人が、世界を見ている視点というのは、デビュー作からずっと変わっていない気がしますよ」

●山内 悠 × 赤鹿 麻耶

山内 悠 (写真家)
赤鹿 麻耶 (写真家)
パネリスト: 山内宏泰 (ライター)
日時: 12月4日 (金) 20:00~21:30
場所: 代官山 北村写真機店



●鈴木 育郎

鈴木 育郎 (写真家)
パネリスト: 山内宏泰 (ライター)
日時: 12月11日 (金) 20:00~21:30
場所: 代官山 蔦屋書店



協力: 代官山 北村写真機店、代官山 蔦屋書店



写真集『BACON ICECREAM』を刊行したばかりの奥山 由之氏が登場。写真集制作の過程やふだんの撮影の仕事で考えていることを明らかにしました。

奥山：今回の写真集は、テーマを設けていません。桜の写真です、家族の写真ですとはっきりいえる写真集は多いけれど、被写体ありきのものはどこか“写真集にするため”の写真に見えてしまっ。もっと、人がいて自然があって光があって、そして生きていて……、そのとき撮りたいものを撮るだけというのがいちばん自然に思えたんです。

——そういう写真は一冊にまとめていくのが難しいのではないのでしょうか？

奥山：感覚的なことになっていくし、自分の解釈だけが頼りなので、日によって見えかたが変わっていく。そこでもう一冊同時に写真集をつくることのできるお話がきたので、僕のことをよく知っているスタイリスト・アートディレクターのHiroyuki Kuboさんに構成をお願いし「THE NEW STORY」が完成しました。自分の写真を客観的に見る機会になっておもしろかった。



2010年代に入ってから、突如として世界的な評価を得るようになった若手写真家の横田大輔が、創作時に考えていること、ビジョンを語った。「美術館ではこう展示する、とか写真集はこう構成する、といった発表の流儀やルールがアートや写真の世界では出来上がっている。そこに当てはめようと作品をつくっている、想定内のものしかできないと思う。も

のをつくるサイクルや構造から疑い、ずらしていかないと、新しいものは生まれてこないのではないか」その言葉通り、カメラを用いないで作品をつくることさえある。「大判フィルムを熱湯現像し化学変化を起こし、乳剤や支持体のプラスチック部分が溶けることで色や形を表す手法もとります。外界を記録するための写真としてはNGでしょ

●奥山 由之 × Hiroyuki Kubo

奥山 由之 (写真家)
Hiroyuki Kubo (アートディレクター)
パネリスト: 山内宏泰 (ライター)
日時: 12月18日 (金) 20:00~21:30
場所: 代官山 蔦屋書店

——ファッション写真の分野で活躍する奥山さんですが、撮影時に心がけていることは？

奥山：モデルの女性がカメラをバチッと見つめるよう写真は、嘘を撮っている気がして。風が吹いて髪が顔にかかって目が隠れるくらいのほうが、逆に見えてくるものがある気がする。色気やおくゆかしさを感じてドキドキする。でもファッションをちゃんと見せることももちろん大事で、両方の要素をどう収めたらいいか、いつも追究していきたいです。

●横田 大輔

横田 大輔 (写真家)
パネリスト: 山内 宏泰 (ライター)
日時: 12月13日 (金) 20:00~21:30
場所: 代官山 蔦屋書店

うけど、写真の機能やおもしろさは記録性以外の部分にもある。何が写っているかわからないザラザラの画面でも、見るだけで手触りが感じられるような“視触覚”が働いたりすることはある。作品を通してそんな体験をしてもらえたらと思制作しています」

Messages

写真新世紀25周年
歴代受賞者からのメッセージ

祝賀25周年!今こそ、さらに続けてほしい。

この25年で写真やアート、文化を取り巻く環境は大きく変わったが(社会や政治も激変。決してポジティブではいられない!)そんな状況だからこそ、自由で独創的な考えとアイデアを携え制作を突き進めて行く新人を輩出するメディアであり続けてください!そして受賞後の若手作家のバックアップも!

——Yuki Onodera (1991/優秀賞)

25周年おめでとうございます。私の現在の表現スタイルは絵画ですが、原点は写真新世紀です。その変遷を追い、想いを馳せながら、絵を描いてきました。今後も写真ならではの表現を模索し牽引していかれる事を期待しています。

——千葉 鉄也 (1991/優秀賞)

第一回写真新世紀の公募を知り『エキストラ』の和綴じのモノクロコピー本を送付、結果は佳作だった。それが作家としての原点。25年経った今でも、ジリジリと私を後押ししてくれています。

——野村 浩 (1992、1993/優秀賞)

大学生の頃好きだったのは写真と映画だった。写真新世紀での受賞が、人生において写真をやり続けるきっかけになったことは間違いない。そして私は写真と映画の仕事し続け、生きるためのヒントを探す旅の途上に今もいる。

——茂木 綾子 (1993/優秀賞)

写真を取り巻く環境は、あたりまえのように変化していきます。25年前、そして今も風化せずに続いている事を考え、感じなければなりません。それは写真のはじまり時から同じです。皆様まだまだ続きますよ。

——熊谷 聖司 (1994/グランプリ)

ボクにとって「写真新世紀」って、ときどきふと思い出す、遠く離れた美しい故郷であり、一緒に幼年時代を過ごした兄弟姉妹のような存在でもあります。ますますの発展をお祈りしています。

——大森 克己 (1994/優秀賞)

25周年、おめでとうございます!
写真を撮る仕事をはじめた20年くらい経ちました。そのきっかけをつくってくれたのが写真新世紀でした。写真のありかたも変化しますが、これからも撮る人の憧れでい続けてください。

——金子 亜矢子 (1994/優秀賞)

25周年おめでとうございます。日課ながら写真を撮っています。ときどき友達と買い物します。

——佐内 正史 (1995/優秀賞)

優秀賞受賞の連絡を受けた吉祥寺のアパート。
20年経った今もあの日ははっきり思い出せます。
子育てで仕事の写真から少し離れていても、
あの日はずっと私の「撮る」の支えです。
これからも「撮る」人々をたくさん発掘してください。

——柴原 三貴子(1995/優秀賞)

25周年、本当におめでとうございます。
この地球上の調和の何%かは写真新世紀が支えているかもしれないと思える程、大きな存在に育ちました。
素晴らしい発展と功績を喜ばしく、また名誉に思っております。プロになると忘れがちですが写真って本当に楽しい
ものです。今では身近な存在になりましたが、昔の時代を考えるとこの機材システムをつくってくださった方達へ常々
感謝の気持ちを忘れてはいけないと思います。写真家は素敵な瞬間を発表出来る贅沢な職業だと最近改めて
思いますので、今後も芸術を通して全人類に貢献出来ますよう、切磋琢磨していきますのでどうぞお見守り下さい。
益々のご活躍、これからも楽しみにしています。

——ヒロミックス(1995/グランプリ)

25周年おめでとうございます。私が写真作品をつくりはじめたころ、写真新世紀は目の前を
照らしてくれる明かりのようでした。いつまでも、作品をつくる人たちの道を照らし続ける
写真新世紀でいて下さい。

——野口 里佳(1996/グランプリ)

25周年おめでとうございます。あれからもうそんな年月が経ったのか、、、写真新世紀からは
じまって今の私があります。入選された皆様、ここからがスタートです。
入選できなかった方、多少の運もあるけどぶっぎりにはいい作品は入選します。
結果をしっかり受け止めて次の糧にしてください。10年後20年後もトップスピードで
走り続けることをイメージしましょう。デビューよりも継続することのほうが大変です。

——蛭川 実花(1996/優秀賞)

私が賞をいただいたのは第13回の96年で、そのときからすでに20年もの時が過ぎたのかと思うと
ちょっとびっくりです。それは私にとって大きな転機となったことはいうまでもありません。ただ、そんななか新世紀の
スタッフの方々の親身な対応と、時折かけていただくあたたかな言葉は心底ありがたくて、それは知らず知らず
日々の励みになっていたように思います。この場をかりてお礼申し上げます。
今後も若い方々の作品を楽しみにしております。がんばってください。

——菅野 純(1996/優秀賞)

NYのアパートに優秀賞の知らせがあったときのことは今でも
よく覚えている。熱にうなされたように撮った作品群が、
海の向こうまでその温度と湿度が伝わったんだと嬉しかった。
これからも多様な作品に光を照らしてください。

——守田 衣利(1998/優秀賞)

写真は自身を構築し、今の全てに生きている。
とても不思議で、特別な力で、ずっとそこにある。
そんなものに会えてよかった。
写真新世紀に会えてよかった。
25周年おめでとうございます!

——岩崎 マミ(1998/優秀賞)

1998年当時、いったいどこで発表したらいいものかわからずいた中東の写真が
写真新世紀受賞のおかげで日の目を見る事ができ、それをきっかけに多くの魅力的な人達と
出会えました。感謝しています。これからのますますのご発展をお祈りしています!

——池田 宏彦(1998/優秀賞)

25周年おめでとうございます。賞をいただいて自分にとって大変支えになったことを思い出し、感謝の気持ちで
いっぱいです。変化し続ける環境のなかで、続けてゆくことの意味を自問しつつ、これからも励みたいと思います。
変わらないために変わることを含め、今後の写真新世紀も楽しみにしております。

——安村 崇(1999/グランプリ)

賞を頂いたとき、私は17才だった。写真を撮ったり止したり
しながら、今年は35才になる。あのときから今まで、
写真より他に本当に大事な事はひとつもなかったのだ、と思う。

——岡部 桃(1999/優秀賞)

写真新世紀25周年、おめでとうございます!
制作と発表の大きな原動力となっているのは、写真新世紀の「産みっぱなしではない、
きちんと育てる」という体制で当時の審査員の南條先生、飯沢先生、そして事務局の方が
長きに渡って応援してくださる事です。受賞して終わりたくない。受賞作品を越えたい。
そういう思いで自分の写真新世紀を拓いていきたいと思っています。

——伊賀 美和子(1999/優秀賞)

25周年おめでとうございます。
たしか19歳と20歳のときにアラーキー先生から佳作もらって、
とつもうれしくて調子に乗って、そしたらカメラマンになったよ。

——梅 佳代(1999/優秀賞)

写真新世紀25周年おめでとうございます。
私の作家としての道を最初に切り開いてくれたのは
写真新世紀でした。これからもたくさんの写真新世紀で
見出された才能が世界へ広がっていくことを願っています。

——澤田 知子(2000/優秀賞)

25周年おめでとうございます。きたるべき写真が世界中の
たくさんの人に幸せな気持ちをもたらしますように!
世界中のたくさんの人が写真を通して楽しい時間を過ごせますように!!

——西郡 友則(2001/優秀賞)

25周年おめでとうございます!
新世紀の存在によって、
写真を撮っていくことの喜怒哀楽は倍々増えました。
受賞をきっかけに僕の人生は確かに大きく変わり、
今でも本当に感謝しています。
愛と笑いと狂気と執着と解放と希望絶望と明日明後日、
印画紙の表面ににじんできると。
写真は贅沢な遊び道具やね。今年は新しい本を出すぜ!!

——佐伯 慎亮(2001/優秀賞)

祝! 写真新世紀25周年!
自身の受賞から早、十数年。今も作家を続けてられるのは、
写真新世紀に背中を押して貰えたからだと思っています。
この賞を受賞すればなにかが変わる、
これからもそんな夢を見させてくれる存在であり続けて下さい!

——鍛冶谷 直記(2002/優秀賞)

写真新世紀は当時22才のぼくに大きな勇気をくれました。そのもらった勇気が大きすぎて
一時期天狗になりましたが、思い返すといろいろありましたが、ぼくにとってとてもいい
写真の世界への入り口でした。これからも若者に、素晴らしくも厳しい入り口を提供して
あげてください!

——高橋 宗正(2002/優秀賞)

写真新世紀、そしてアラキー、
わたしを見つけてくれて、ありがとう。

——植本 一子 (2003 / 優秀賞)

僕は荒木経惟さんからの受賞を頂き、そのときに頂けた言葉や
受賞作品を胸に、その後10年かけてつくり続け写真集へとまとめる
事が出来ました。写真新世紀は僕にとって写真家としてのはじまり
でした。写真新世紀は日本の若手の大きな力です!!

——滝口 浩史 (2004 / 準グランプリ)

いつだって写真新世紀って響きは甘酸っぱく、そして触れたくて仕方のないものだった。
これからもそうあって欲しいが、それはひとえに今写真を撮っている我々にかかっている。
のだろうな。精進します。

——伊丹 豪 (2004 / 佳作)

何故この道を選んだか、ふと立ち返ることがありその理由を思い浮かべると、そこには
写真新世紀の公開審査に向け西宮の家から東京都写真美術館まで歩いて行ったときの
風景が脳裏に現れる。本当に貴重な時間を与えてもらった。

——西野 壮平 (2005 / 優秀賞)

25周年おめでとうございます。私たちはどうしようもなく写真が好きで毎日毎日たくさんの写真を撮ったり
見たりしているけれど、いい写真とか特別な写真ってどういう写真なのか、写真ってなんなのか、
これからも写真新世紀はそういうことを色んな人の視点から示していくのだと思います。見たことのない新しい
写真をたくさん見せてもらえることを楽しみに、わたしも受賞当時のせいっぱいを忘れずやっていきたいです。

——高木 こずえ (2006 / グランプリ)

今でも鮮明に、覚えています。
29歳の夏、今年ダメなら写真家を諦めようと、
自分の全てを注ぎ込んで制作した作品を、
期限最終日に提出しました。
優秀賞の電話をもらったときに、自分の人生は切り拓かれました。
みなさん。全力で写真、してますか？

——青山 裕企 (2007 / 優秀賞)

写真新世紀25周年おめでとうございます!
実はこれがきっかけで僕自身も写真を撮りはじめて今年で25年目だということに気がつきました!
ビックリです!四半世紀、時代は目まぐるしく変化してまさに新世紀ですね。ここがきっかけでたくさんの仲間と
出逢えたことに本当に感謝致します。そしてこれから出逢う方々や応募する方々も含め、どうぞこれからも共に
この時代を歩んで行けたらと思います!!写真新世紀、ありがとう!

——山内 悠 (2008 / 佳作)

数千もの出会いと何百の声が、
今も支えとなり道しるべとなっています。
写真新世紀という素晴らしい作品に関われたことに
感謝と益々の期待を込めて、
いつまでも希望と情熱のステージでありますように!!

——佐藤 華連 (2010 / グランプリ)

今、写真はもはや「その人」と分かちがたく結びついている。
生存充実感の練り上げが写真に表れる世紀になったのだと思う。

——齋藤 陽道 (2010 / グランプリ)

受賞して、たくさんの人たちとの出会いがあって、今につながって
います。これが一番嬉しかったことです。「写真でなにができるだろう?
写真でしかできないことはなんだろう?」今もずーっと私の目標です!

——赤鹿 麻耶 (2011 / グランプリ)

うわあああ!!!
いつの間にか動画でも応募できるようになってる——!!!
審査員も入れ替わってる——!!! し、し、新陳代謝ああああ!!!
うちのプリンタがキヤノン製なんですけど純正インクしか使わないことを
誓います! 祝!

——いくしゅん (2011 / 佳作)

選出いただいたヒロミックスをはじめ、
写真新世紀を通して出会った方々は、一生の宝です。
優秀賞の受賞は、写真作品をつくり続けて大丈夫と
背中を押していただきました。
これからも、自分の表現を追求していきたいと思います。

——浜中 悠樹 (2012 / 優秀賞)

写真を軸に生きるということ。
受賞前と後で大きく変わったのは、
その軸の振れ幅が大きくなったという実感がある。
写真には責任感があってほんとうに奥深いものだ。
そして撮影することより刺激的なことはなかなかないということ。

——長谷波 ロビン (2012 / 優秀賞)

25周年おめでとうございます。写真新世紀でグランプリを受賞したとき、宛もなくさまよって
いた私はとても報われました。そんな私を応援し見守ってくれた人たちの笑顔と歓声は
今でも記憶に残っています。今も出会いの素晴らしさに感動しもっと出会いたいという欲望に
刈られています、縁は育てるものと知りながら。風の予感、幸運の女神と龍に導かれて。
すべての写真は幻、出会うそのときまで

——鈴木 育郎 (2013 / グランプリ)

創設25周年おめでとうございます。写真新世紀の優秀賞に選ばれたところで人生は
なんにも変わらなかったけれど、なにかがはじまった気はします。それが「なにか」は、
まだわかりません。50周年のときまでにはわかるといいな、と、思っています。

——海老原 祥子 (2013 / 優秀賞)

受賞から三年が来る。喜びと、戸惑いと、不安のなかで展示作品を
制作したあの頃。そして自分を探しながら作品制作をする今。
やはり、写真でしか表現できないものを制作し続けていきたいと強く思う。

——藪口 雄也 (2013 / 優秀賞)

人はそれぞれ物の見方が違うけども、写真は個々の目に写った感覚や印象を共有する事が
できる唯一無二のツールだと思います。何処でも撮れて、プリントできて、一瞬にして世界に
広まる。シンプルながらも大きな影響力のある写真の可能性は無限だと思います。

——須藤 絢乃 (2014 / グランプリ)

写真新世紀25周年おめでとうございます。応募案内に載っていた
「写真は下半身的なものです。だから最大限に知性を使って
ください」という清水穰さんのコメントを、今も強烈に覚えています。

——山崎 雄策 (2014 / 優秀賞)

写真：中村 ハルコ (2000 / グランプリ)

写真新世紀 活動履歴

写真新世紀 10周年記念展

[公募審査会]

1991～2000年3月

- 21回実施 (1992年、1993年は年4回、1994年～2001年は年2回開催)
- レギュラー審査員3名で審査会を開催（荒木 経惟、南條 史生、飯沢 耕太郎）
- 第9回よりゲスト審査員1名を加え、4名で審査

2002年～

- 公募を年1回へ変更

2010年～2014年

- 審査員5名で審査会を開催（大森 克己、佐内 正史、清水 穰、榎木 野衣、 蜷川 実花 (2010)、ヒロミックス (2011～2014)）

2015年4月

- デジタルデータ（静止画・動画）も公募対象に
- 審査員6名で審査会を開催（フリッツ・ヒールスベルフ、荒木 夏実、澤田 知子、さわ ひらき、清水 穰、野口 里佳）

写真新世紀 2003 第26回公募

[展覧会|写真新世紀展]

受賞作品を一堂に会した「写真新世紀展」を開催

- 1999年11月までに8回実施（会場：P3 Art and environmen／東京）
- 2000年、2001年は、会場を青山モダポリティカ（青山、東京）に移して開催
- 2002年より東京都写真美術館と共催で東京都写真美術館（恵比寿）展覧会を開催している
- グランプリを決定するグランプリ選出公開審査会を開催
- 展會期中グランプリ受賞者へ奨励金(100万円)及び次年度における個展開催の権利を授与
- 2015年は、代官山ヒルサイドフォーラムで開催。展覧会会期中、写真新世紀25周年記念イベント「写真の未来は僕らがつくる!」を代官山ヒルサイドテラス、代官山 蔦谷書店、代官山 北村写真機店と連動して開催

写真新世紀 2004 第27回公募

[展覧会|地方展]

- 教育の現場から広く写真文化を広めるため、1997年より「写真新世紀京都展」を京都造形芸術大学・京都芸術短期大学と共催で実施
- 写真を通じての交流、及び作家育成のため優秀賞受賞作家によるトークショーを実施
- 2003年より大阪展（海岸通CASO、大阪アートコートギャラリー）をはじめ、仙台展（せんだいメディアテーク）、福岡展（福岡アジア美術館）、名古屋展（電気文化会館）を適宜開催
- 2011年東日本大震災の後、文化復興を祈念する目的で写真新世紀仙台展を開催。東北にゆかりのある作家を起用し、復興支援特別展を併設、会期中にはトークショー、ワークショップを実施した（2011年～2013年に実施）

写真新世紀 2005 第28回公募

[展覧会|これまでの展覧会]

1992

第1回写真新世紀展

第1回～第4回公募、優秀賞受賞者12名による作品展
年間グランプリ受賞：木下伊織「Jamais-vu 未視感-」
会期：1992年11月6日～11月19日
場所：P3 Art and environment
[同時開催]
荒木 経惟 日替わり写真展「物事 color copy print」

1993

第2回写真新世紀展

第5回～第8回公募、優秀賞受賞者12名による作品展

年間グランプリ受賞：市川 綾子「近づけなかった私」

会期：1993年11月12日～11月27日
会場：P3 Art and environment
[同時開催]
1992年度年間グランプリ受賞

木下 伊織 個展「Jamais-vu未視感」

1994

第3回写真新世紀展

第9回～10回公募、優秀賞受賞作家7名による作品展
年間グランプリ受賞：熊谷 聖司「もりとでじゃねいろ」
会期：1994年12月2日～12月15日
会場：P3 Art and environment
[同時開催]
1993年度年間グランプリ受賞
市川 綾子 個展「真剣と遊ギ」

1995

第4回写真新世紀展

第11回～12回公募、優秀賞受賞作家8名による作品展
年間グランプリ受賞：ヒロミックス「SEVENTEEN GIRL DAYS」
会期：1995年12月2日～15日
会場：P3 Art and environment
[同時開催]
1994年度年間グランプリ受賞
熊谷 聖司 個展「95LARERU」

1996

第5回写真新世紀展

第13回～14回公募、優秀賞受賞作家8名による作品展
年間グランプリ受賞：野口里佳「潜ル人」
[東京展]
会期：1996年12月6日～12月19日
会場：P3 Art and environment
[京都展]

会期：1997年5月
会場：京都造形芸術大学 ギャラリーRAKU
写真レクチャー：野口 里佳
[同時開催]
1995年度年間グランプリ受賞
ヒロミックス 個展「SELF」

1997

第6回写真新世紀展

第15回～16回公募、優秀賞受賞作家7名による作品展
年間グランプリ受賞：矢島 慎一「Bubble」
[東京展]
会期：1997年12月5日～12月18日
会場：P3 Art and environmen
[京都展]

会期：1998年4月
会場：京都造形芸術大学 ギャラリーRAKU
写真レクチャー：矢島 慎一、山本 香
[同時開催]
1996年度年間グランプリ受賞
野口 里佳 個展「フジヤマ」

1998

第7回写真新世紀展

第17回～18回公募、優秀賞受賞作家8名による作品展
年間グランプリ受賞：柏 亜矢子「極東新世界—Go to the END of EAST」
[東京展]
会期：1998年12月4日～12月19日
会場：P3 Art and environmen
[京都展]

会期：1999年4月
会場：京都造形芸術大学 ギャラリーRAKU

写真レクチャー：柏 亜矢子、黒瀬 康之

[同時開催]
1997年度年間グランプリ受賞

矢島 慎一 個展「leaves」

1999

第8回写真新世紀展

第19～20回公募、優秀賞受賞作家8名による作品展
年間グランプリ受賞：安村 崇「日常らしさ」
[東京展]
会期：1999年11月5日～11月27日
会場：P3 Art and environment
[京都展]

会期：2000年4月
会場：京都造形芸術大学 ギャラリーRAKU
写真レクチャー：安村 崇、岩崎 マミ
[同時開催]
1998年度年間グランプリ受賞
柏 亜矢子 個展「暴走天使99」

2000

第9回「写真新世紀2000」展

第21～22回公募、優秀賞受賞作家8名による作品展
年間グランプリ受賞：中村ハルコ「海からの贈り物」
[東京展]
会期：2000年12月15日～12月22日
会場：青山モダポリティカ
[京都展]

会期：2001年4月
会場：京都造形芸術大学 ギャラリーRAKU
写真レクチャー：澤田 知子、中村 ハルコ、山田 大輔
[同時開催]
1999年度年間グランプリ受賞
安村 崇 個展「自然をなぞる」

2001

第10回「写真新世紀2001」展

第23～24回公募、優秀賞受賞作家9名による作品展
[東京展]
会期：2001年12月8日～12月21日
会場：青山モダポリティカ
[仙台展]

会期：2002年3月
会場：せんだいメディアテーク
写真レクチャー：伊藤 トオル、慶、中村 ハルコ
[京都展]
会期：2002年4月
会場：京都造形芸術大学 ギャラリーRAKU
写真レクチャー：川鍋 はるな、たけむら 千夏、中西 博之

[同時開催]
2000年度年間グランプリ受賞
中村 ハルコ 個展「光の音」

2002

写真新世紀 2002

第25回公募、優秀賞受賞作家6名による作品展
グランプリ受賞：吉岡 佐和子「FLYING HIPPO」
[東京展]
会期：2002年9月1日～23日
会場：東京都写真美術館
[京都展]

会期：2003年4月15日～27日
会場：京都造形芸術大学 ギャラリーRAKU
スライド・トーク：鍛冶谷 直記、吉本 尚義、ヨシダ ミナコ
[仙台展]
会期：2003年5月23日～28日

写真レクチャー：伊藤 トオル、慶、中村 ハルコ

[同時開催]
2002年度年間グランプリ受賞

吉岡 佐和子 個展「NUDIBRANCHIA」

2003

写真新世紀 2003

第26回公募、優秀賞受賞作家75名より抜粋した受賞作品の展示。また、優秀賞受賞者によるトークショーやワークショップなどの関連イベントも実施。
[東京展]
会期：2002年9月1日～23日
会場：東京都写真美術館
[大阪展]
会期：2003年4月23日～5月25日
会場：海岸通ギャラリー-CASO
スライド・トーク：澤田 知子、山本 香、黒瀬 康之、谷口 正典
[仙台展]
会期：2003年5月31日～6月22日
会場：せんだいメディアテーク
スライド・トーク：今 義典、野村 浩

2003

写真新世紀 2003

第26回公募、優秀賞受賞作家6名による作品展
グランプリ受賞：内原 恭彦「Raw life」
[東京展]
会期：2003年10月31日～11月28日
会場：東京都写真美術館
[仙台展]

会期：2004年3月26日～4月7日
会場：せんだいメディアテーク
[大阪展]
会期：2004年4月14日～5月9日
会場：海岸通ギャラリー-CASO
アーティスト・トーク：4月24日／内原 恭彦、植本 一子、加藤 純平、藤田 裕美

子、法福 兵吾、ヤマダ シュウヘイ
5月9日／佐伯 慎亮、たけむら 千夏、吉岡 佐和子

[福岡展]

会期：2004年6月17日～29日
会場：福岡アジア美術館
[同時開催]
2002年度グランプリ受賞
吉岡 佐和子 個展「NUDIBRANCHIA」

2004

写真新世紀 2004

第27回公募、優秀賞受賞作家5名による作品展
準グランプリ受賞：川村 素代「1.1」、滝口 浩史「狭間」
[東京展]
会期：2004年11月27日～12月19日
会場：東京都写真美術館
[仙台展]

会期：2005年3月18日～3月30日
会場：せんだいメディアテーク
[大阪展]
会期：2005年4月2日～4月30日
会場：アートコートギャラリー
[福岡展]
会期：2005年6月25日～7月15日
会場：福岡アジア美術館
[同時開催]
2003年度グランプリ受賞
内原 恭彦 個展「うて、うて、考えるな。」

2005

写真新世紀 2005

第28回公募、優秀賞受賞作家6名による作品展
グランプリ受賞：小澤 亜希子「A DAY [Women of 30 years]」

[東京展]
会期：2005年11月12日～12月11日
会場：東京都写真美術館
[仙台展]
会期：2006年2月3日～2月22日
会場：せんだいメディアテーク
[大阪展]
会期：2006年4月1日～23日
会場：アートコートギャラリー
[福岡展]
会期：2006年4月27日～5月23日
会場：福岡アジア美術館
[同時開催]
2004年度準グランプリ受賞
川村 素代「③」・滝口 浩史「つづれおり」2人展

2006

写真新世紀 2006

第29回公募、優秀賞受賞作家6名による作品展
グランプリ受賞：高木 こずえ「insider」
[東京展]
会期：2006年11月11日(土)～12月3日(日)
会場：東京都写真美術館
出展者トークショー：11月11日、25日
ゲスト審査員トークショー：12月1日/ボリス・ミハイロフ、荒木 経惟
[仙台展]
会期：2007年2月23日～3月6日
会場：せんだいメディアテーク
[福岡展]
会期：2007年4月5日～4月17日
会場：福岡アジア美術館
[大阪展]
会期：2007年4月20日～5月6日
会場：アートコートギャラリー
[名古屋展]
会期：2007年5月29日～6月10日
会場：電気文化会館
[同時開催]
2005年度グランプリ受賞
小澤 亜希子 個展「バブ」

2007

写真新世紀 2007

第30回公募、優秀賞受賞作家6名による作品展
準グランプリ受賞：黒澤 めぐみ「二重性活」、詫間 のり子「まばたき」、
中島 大輔「喪失メトロ ノーム」
[東京展]
会期：2007年11月3日～11月25日
会場：東京都写真美術館
出展者トークショー：11月3日、4日、17日
ゲスト審査員トークショー：11月9日(具 本昌、飯沢 耕太郎)
[仙台展]
会期：2008年2月22日～3月4日
会場：せんだいメディアテーク
[大阪展]
会期：2008年3月29日～4月13日
会場：アートコートギャラリー
[名古屋展]
会期：2008年4月22日～5月6日
会場：電気文化会館
[福岡展]
会期：2008年5月29日～6月10日
会場：福岡アジア美術館
[同時開催]
2006年度グランプリ受賞
高木 こずえ 個展「laboratory1」

2008

写真新世紀 2008

第31回公募、優秀賞受賞作家6名による作品展
グランプリ受賞：秦 雅則「遊び言葉」
[東京展]
会期：2008年11月8日～11月30日
会場：東京都写真美術館
出展者トークショー：11月15日、11月22日
ゲスト審査員トークショー：11月28日(大森 克己、野口 里佳)
[仙台展]
会期：2009年2月20日～3月3日
会場：せんだいメディアテーク
[大阪展]
2008年度受賞作品展
会期：2009年3月28日～4月7日
会場：アートコートギャラリー
2007年度準グランプリ受賞者新作展
会期：2009年4月10日～4月19日
会場：アートコートギャラリー
[同時開催]
2007年度準グランプリ受賞
黒澤 めぐみ「奈々子」、詫間 のり子「as if」、中島 大輔「neutral」3人展

2009

写真新世紀 2009

第32回公募、優秀賞受賞作家5名による作品展
グランプリ受賞：クロダ ミサト「He is …」
[東京展]
会期：2009年11月7日～11月29日
会場：東京都写真美術館
出展者トークショー：11月14日
[大阪展]
会期：2010年4月17日～5月9日
会場：アートコートギャラリー
出展者トークショー：4月24日
[同時開催]
2008年度グランプリ受賞
秦 雅則 個展「幼稚な心」

2010

写真新世紀 2010

第33回公募、優秀賞受賞作家5名による作品展
グランプリ受賞：佐藤 華蓮「だっぴがら」
[東京展]
会期：2010年11月6日～11月28日
会場：東京都写真美術館
受賞作品公開レビュー：11月6日
アーティストトーク：11月13日
[大阪展]
会期：2011年4月5日～4月27日
会場：アートコートギャラリー
[同時開催]
2009年度グランプリ受賞
クロダ ミサト 個展「家族の風景」

2011

写真新世紀 2011

第34回公募、優秀賞受賞作家5名による作品展
グランプリ受賞：赤鹿 麻耶「風を食べる」
[東京展]
会期：2011年10月29日～11月20日
場所：東京都写真美術館
受賞作品公開レビュー：10月29日
アーティストトーク：11月5日
[大阪展]
会期：2012年4月3日～4月26日

会場：アートコートギャラリー
[仙台展]
会期：2012年5月25日～5月30日
会場：せんだいメディアテーク
復興支援特別展
出展者：菅野 純、伊藤 トオル、木戸 孝子、中村 ハルコ
アーティストトーク：5月26日
[同時開催]
2010年度グランプリ受賞
佐藤 華蓮 個展「間、うつろう」

2012

写真新世紀 2012

第35回公募、優秀賞受賞作家5名による作品展
グランプリ受賞：原田 要介「世界するもの」
[東京展]
会期：2012年10月27日～11月18日
会場：東京都写真美術館
受賞作品公開レビュー：10月27日
アーティストトーク：11月3日
[大阪展]
会期：2013年4月2日～4月25日
会場：アートコートギャラリー
[仙台展]
会期：2013年5月24日～6月12日
会場：せんだいメディアテーク
復興支援特別展「復興のために写真でエールを送ること」
出展者：青山 裕企、滝口 浩史、西郡 友典
ワークショップ：6月1日/青山裕企ワークショップ「跳ばずにいられないっ!ホップ!
ステップ!ジャンプ!」
アーティストトーク：6月8日
[同時開催]
2011年度グランプリ受賞
赤鹿 麻耶 個展「電!光!石!火!」

2013

写真新世紀 2013

第36回公募、優秀賞受賞作家5名による作品展
グランプリ受賞：鈴木 育郎「鳶・CONSTREQUIEM」
[東京展]
会期：2013年10月26日～11月17日
会場：東京都写真美術館
[大阪展]
会期：2014年4月8日～5月1日
会場：アートコートギャラリー
[仙台展]
会期：2014年5月23日～6月4日
会場：せんだいメディアテーク
復興支援特別展「写真で何かができるだろう?」
写真でしかできないことは何だろう?—2011年3月11日以降—
アーティストトーク：5月23日/大森 克己×熊谷 聖司
[同時開催]
2012年度グランプリ受賞
原田 要介 個展「見るになる」

2014

写真新世紀 2014

第37回公募、優秀賞受賞作家5名による作品展
グランプリ受賞：須藤 絢乃「幻影 Gespenster」
[東京展]
会期：2014年8月30日～9月21日
会場：東京都写真美術館
アーティストトーク：8月30日/2014年優秀賞受賞者6名、佳作受賞者20名
2013年度グランプリ受賞者 鈴木 育郎
[同時開催]
2013年度グランプリ受賞

鈴木 育郎 個展「最果(SAIKA) Taste of Dragon」

2015

写真新世紀 2015

第38回公募、優秀賞受賞作家6名による作品展
グランプリ受賞：迫 鉄平「Made of Stone」
[東京展]
会期：2015年12月3日～12月25日
会場：代官山ヒルサイドフォーラム
[同時開催]
2014年度グランプリ受賞
須藤 絢乃 個展「面影 Autoscopy」

創設25周年記念イベント「写真の未来は僕らがつくる!」

写真レクチャー：フリッツ・ヒールスベルフ(12月11日、代官山ヒルサイドテラス)
ギャラリー・トーク：山内 悠×赤鹿 麻耶、山内 宏泰(パネリスト)(12月4日)
鈴木 育郎、山内 宏泰(パネリスト)(12月11日)
さわ ひらき×植松 由佳/横田 大輔×山内 宏泰(パネリスト)(12月13日)
伊丹 豪×大森 克己、柿島 貴志(パネリスト)/奥山 由之×HIROYUKI KUBO、山内 宏泰(パネリスト)(12月18日)
飯沢 耕太郎×熊谷 聖司×西野 壮平
澤田 知子×平野 啓一郎(12月19日)
梅 佳代×荒木 夏実/須藤 絢乃×樺木 野衣(12月20日)
川内 倫子×野口 里佳(12月19日)
映像ライブ：さわ ひらき×さや(テニス Courts)(12月13日)
ポートフォリオレビュー：フリッツ・ヒールスベルフ、荒木 夏実、石田 哲朗、三井 圭司(12月11日)
大森 克己、澤田 知子、清水 稜、野口 里佳(12月13日)

【その他】

写真新世紀誌

- 公募で選ばれた作品を独自のメディア『写真新世紀』誌上に発表
- 美術館、ギャラリー、学校等に無料配布
- 1994～2001年まで年2回発行、2002年～年1回発行

ホームページCAST

<http://www.canon.co.jp/scsa/>

- NEWS 公募、展覧会告知など最新情報を紹介
- オンライン公募受付(静止画・動画)を実施
- 作家情報発信(歴代受賞者 新作個展、グループ展、新刊本の紹介など)
- 1991年～歴代グランプリ、優秀賞受賞作品を紹介

CD-ROM

優秀賞・佳作受賞者作品の映像データベースとして『new egoism88』(1996)制作

ワークショップ

- 新人写真家育成プログラムとして、来日した審査員の指導のもとで開催
- ロバート・フランク ワークショップ(1994年4月16日、17日)
 - ジャンクロード・ルマニー ワークショップ(1995年3月18日)
 - ベルナルル・フォコン ワークショップアドベンチャー「写真の祭」(1998年3月15日)
 - サラ・ムーン ワークショップ「女性について」(1999年3月14日)
 - マーティン・バー ワークショップ「I am a Fly.」(2003年7月15日)
 - ケビン・ウエスティンバーグ ワークショップ「No Fear」(2004年7月2日)
 - ウィリアム・エグルストン ワークショップ「ONE OF THE JAPAN」(2005年6月26日)

レクチャー

- ジャン＝クロード・ルマニー(1995年3月18日)

「ヨーロッパ最大の仏国立図書館の写真コレクション」

- フリッツ・ヒールスベルフ(2015年12月11日)

「ヨーロッパ写真の変遷、期待する写真家について」

機器サポート、その他支援

- 受賞者の個展、作品制作に対する機器サポート(カメラ、レンズ、プロジェクターなど)
- 受賞者の個展、グループ展に際しプリント支援を実施(インクジェットプリント、大判出力など)

写真新世紀

New Cosmos of Photography

〈2016年度 第39回公募〉

静止画、動画、オンライン受付開始!

写真術の誕生から170余年。テクノロジーの進化によって、カメラの領域はフィルムからデジタル、静止画から動画へと広がってきました。また、インターネットやスマートフォン、SNSなどの普及により、今や誰もが気軽に写真を撮り、コミュニケーションを楽しむ時代となりました。こうした写真環境の変化を踏まえ、「写真新世紀」は、創設25周年を機にプリント作品の応募に加えて、オンラインでのデジタル作品(静止画・動画)の受付を開始しました。静止画と動画はシームレスな関係にあり、両者の間には、まだ見たことのない新しい写真表現が潜んでいるのではないかと、私たちは期待しています。次世代を予感させる、新しい写真表現にチャレンジするみなさまのご応募を、心よりお待ちしております。

【応募受付期間】

2016年4月20日(水)～2016年6月8日(水)

※最終日の23:59まで

【作品受付期間】

郵送による応募

2016年4月20日(水)～2016年6月15日(水)

※最終日の郵便切手消印または宅配便受付有効

オンラインによる応募

2016年4月20日(水)～2016年6月15日(水)

※最終日の23:59まで

応募申込は、2016年4月20日(水)から6月8日(水)(最終日は23:59まで)の間、写真新世紀Web応募申込システムにより受け付けます。「応募要項」「応募手順」をお読みいただき、「応募申込」からご応募ください。

【応募申込・詳細はこちら】

写真新世紀ホームページ: canon.co.jp/scsa

【目的】

写真新世紀は、写真表現の可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的として、キヤノン株式会社が主催する公募形式のコンテストです。自由で独創的な写真表現を追求し、写真の持っている可能性を引き出すような創作活動を奨励します。

【応募資格】

○国籍、年齢、性別、経験(プロ、アマチュア)は問いません。
○個人またはグループでの応募が可能です。ただし、グループの場合はグループでの活動を今後も継続していくことが前提です。

【応募条件】

○過去にコンテストなどで入賞あるいは入選したことのない、オリジナル作品に限ります。また、他のコンテストなどに応募し、まだ結果の出していない作品はご応募いただけません。
○第三者の権利(著作権、商標権、肖像権など)を侵害する作品は応募できません。応募作品に、第三者の著作物(美術品、映画、写真、音楽など)その他の権利が含まれる場合は、当該第三者から本応募について事前の承認を得ていることが必要です。
○応募者1人または応募グループ1組につき1作品の応募とします。同一人物が個人とグループで重複して応募することはできません。
○作品点数の制限はありません。但し、データ(静止画・動画)での作品応募はファイルサイズ・形式に制限があります。DVD・ブルーレイなどメディアでの応募は受け付けておりません。

【作品規定】

スマートフォン、デジタルカメラなどを含む、静止画、動画を撮影できるすべての機器で撮影した画像データ。カメラアプリ、編集アプリ、ソフトウェア等を利用し処理・加工した作品の応募も可能です。カラー、モノクロを問いません。(フィルムカメラで撮影し、スキャナで作成した画像データの応募も可能です)

【静止画作品について】

画像データのデータ形式は、サイズ1,200×1,600pixel以上(推奨)になります。登録は、100枚以下かつ合計500MBまでです。画像データのファイル形式: JPEG・72dpi推奨/審査時の色空間は、sRGBを基準とします。
注: 入賞者には受賞決定後、本コンテストに関わる印刷物作成または展覧会における展示等のため、より解像度の高い画像データの追加提出をお願いすることがあります。

【動画作品について】

○動画素材および静止画素材で構成された映像作品。
○撮影機器は問いません。
○静止画および動画データのファイルサイズは、1,000MB(約1GB)以下、フォーマットはMP4のみとさせていただきます。
○応募作品に使用される楽曲は、第三者から使用差し止め等のクレームを受けることのない楽曲に限ります。また応募者自身が著作権を有したオリジナル楽曲(著作権管理団体に信託譲渡されていない作品)も可能です。

【応募費用】

無料

【賞について】

グランプリ: 1名(組)
優秀賞 : 7名(組)
佳作 : 14名(組)

【奨励金、副賞、特典】

●グランプリ

奨励金100万円(優秀賞奨励金20万円を含む)、副賞 キヤノン製品写真新世紀展2017における個展開催の権利、優秀賞の全特典

●優秀賞

奨励金20万円、写真新世紀展2016への出展、グランプリ選出公開審査会への参加、写真新世紀ホームページでの紹介、写真新世紀誌次号での紹介

●佳作

奨励金3万円、写真新世紀展2016への出展、写真新世紀ホームページでの紹介。写真新世紀誌次号での紹介

【受賞者の発表】

●優秀賞・佳作

審査終了後、2016年7月末日までに直接受賞者に連絡するとともに、同年8月5日(金)までに写真新世紀ホームページ(canon.jp/scsa)にて発表します。また、発表後、優秀賞受賞者に対しては、写真新世紀展2016での展示を目的とした作品制作についてオンラインテーションを行う予定です。

●グランプリ

グランプリ選出公開審査会後に行う表彰式において発表します。また、後日、写真新世紀ホームページ(canon.jp/scsa)で発表します。

【お問い合わせ】

応募申込システムほか応募方法など応募に係る全般に関して(応募受付センター)
写真新世紀 応募受付センター 株式会社放送映画製作所
〒103-0027 東京都中央区日本橋3-5-13 三義ビル 4F
電話: 03-5202-4732(平日10:00~17:00)
メールアドレス: newcosmos@hosoeiga.co.jp

【その他(写真新世紀事務局)】

写真新世紀事務局 キヤノン株式会社
〒146-8501 東京都大田区下丸子3-30-2
電話: 03-5482-3904(平日10:00~17:00)
メールアドレス: cast@web.canon.co.jp

Canon

写真新世紀

New Cosmos of Photography

写真新世紀30号
2016年4月7日発行

発行責任者：キヤノン株式会社
CSR推進部 写真新世紀事務局
〒146-8501 東京都大田区下丸子3-30-2
TEL：03-5482-3904
FAX：03-5482-5131
E-mail：cast@web.canon.co.jp
canon.jp/scsa
Cover photos：迫 鉄平、新垣 隆太、岸 啓介、HALKA、松本 卓也、三田 健志

本誌掲載の写真・記事の無断複製・転載を禁じます。
© 2016 Canon Inc. All rights reserved. 非売品

PUB. NCP04 0407 GC05 Printed in Japan